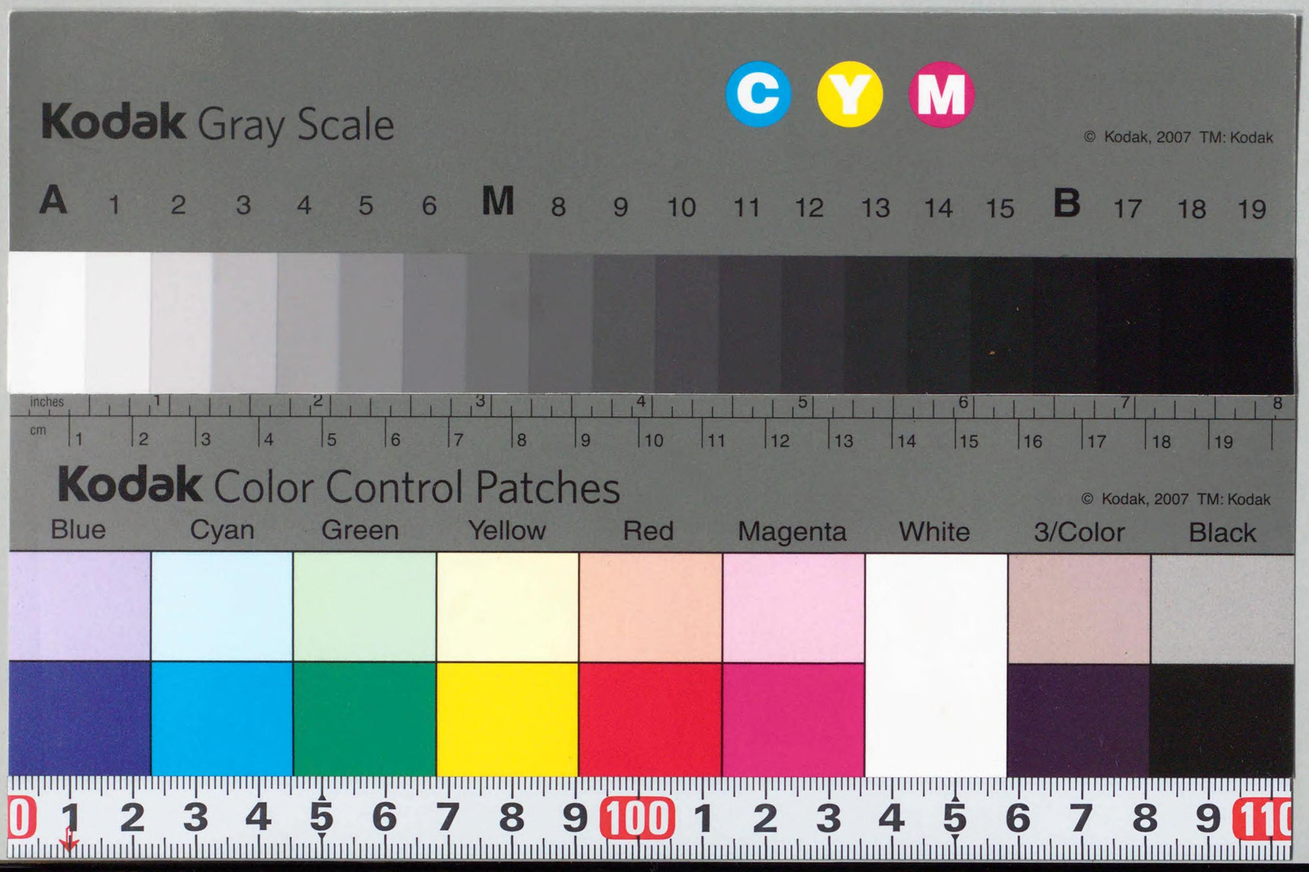

911.12
t
S
00314229

納本

定本萬葉集

五

文學博士 佐佐木信綱
文學博士 武田祐吉 編

自卷第十七
至卷第二十

岩波書店刊行

911.12
t
S

本書に對して、財團法人啓明會は、多年に渉りて研究費を補助せられたり。茲に深厚なる謝意を表す。

国立国会
29.1.-8
図書館

314229

目次

序……一
凡例……一
定本萬葉集……五
　卷第十七……一
　卷第十八……四一
　卷第十九……七一
　卷第二十……一〇七
定本萬葉集別記……一
　卷第十七……一
　卷第十八……二五
　卷第十九……三八
　卷第二十……五一

定本萬葉集第五册の後にしるす……

序

定本萬葉集を刊行せむとするに當りて、ここに其の來由を略述せむとす。

萬葉集が歌集として最も尊き書なることは、予が幼かりし時、先人より、集中の名歌の誦誦を授けられし際、屢〻聞きつるところなりき。

萬葉集が吾が國の古典として深く研究すべき書なることは、東京大學古典科に入學して、木村正辭先生の講義を聽講し、つばらかに知り得たるところなりき。先生の講義中、予の殊に感銘して胸裏に存する言に曰く、萬葉集の文字はみだりに改むべからず、改むるはさかしらのわざなり。賀茂眞淵翁も、寛延二年に寛永寺宮にささげまつれる萬葉解通釋には、萬葉拾穗抄に就きてしか論じ記されつるも、寶曆十年の著なる萬葉考に、文字を改め易へられたるはよからず。集中の文字のよみ解きがたき所は、古本と校勘して熟慮すべし。かの契沖阿闍梨が、水戸家の囑によりて萬葉集代匠記を著しささげつるに、光圀公は、古本との比校いまだしければとて、水戸家にてものせし校本、及び飛鳥井本を借し與へられぬ。卽ち、阿闍梨は校讐を加へ、更に稿を新たにしてささげつるが、精撰本代匠記なり。思ふべし、と。

木村先生の教により、吾が日本學の對象として深く研究すべきは萬葉集なることを知り、また先人の誨により、歌集としての萬葉集の價値をいやが上に發揮すべきものなることをおもひ、萬葉集の研鑽に生涯をささげまく志しつるに、偶〻明治三十八年、東京帝國大學より講師を囑託せられ、萬葉集を講ずるに及び、その基礎的研究として、萬葉集の古鈔本の世に埋れたるものあるべきを思ひ、祕府の尙藏本をはじめまつり、社寺の襲藏本、官私の祕笈本、及び古筆手鑑の斷簡等の搜索に力を效したりき。

當時萬葉集の古鈔本としてその原本の知られたりしは、わづかに、桂本、神田本、近世の寫本として、細井本、中院本、及び元暦校本十四巻本の摸本、古葉略類聚鈔の摸本等のあるに過ぎざりき。さるを、予の夢寐忘るること能はざる關心により、幸にも發見し得たるもの尠からず。そを列擧せむに、その殘存巻數おほく古鈔本として貴重なる元暦校本十四巻本の原本は、水野家にありとのみにて有無不明なりしを、明治四十三年五月、之を發見することを得、仙覺の校正以後多くの歳月を經ずして書寫し二十巻の完備せる西本願寺舊藏本を、大正二年一月初めて見ることを得、他に、天治本萬葉集巻十三、傳壬生隆祐筆本、嘉暦傳承本、春日本、傳冷泉爲頼筆本、三春文庫舊藏本、谷森本、祕府本萬葉集抄、萬葉集目錄、仙覺奏覽狀等を發見したりき。

また田中伯によりて、藍紙本、元暦校本六巻本、類聚古集、大口氏によりて、金澤本、金澤文庫本、大矢氏によりて、室町期書寫本、中村氏藤原氏によりて、古葉略類聚鈔等、世に知らるるに至りぬ。

かくのごとく、仙覺以前本及び仙覺系統本の善本、學書のたぐひの出現せるにより、まづこれらの諸本を以て校合せる校本を成し、次いで定本をと企圖せしに、幸に文部省文藝委員會の容るる所となり、橋本進吉君と共に校本の作成に著手し、千田憲君しばらく之にたづさはり、更に、東京帝國大學國語研究室の事業に移り、武田祐吉君、久松潜一君等之に加はり、武田君は專ら校訂に從事し、久松君は仙覺以後の研究の部を擔任し、かつ啓明會の補助を得、爾來十一年の歳月を積みて、その原稿成り、淨書成り、印刷成れりしを、大正十二年九月の大震災の爲め、校合底本二十冊、原稿本百二十八冊、淨書本二十冊、印刷せる五百部等、全部燒失したりき。ただ神明の呵護を蒙りて、校正刷二部の殘存せしをもて、同人の激勵に依り、再び印刷に腐心し、終に校本萬葉集二十五冊、六千二百十六頁を學界におくることを得たりき。しかして更に啓明會の補助によりて、定本萬葉集の作成にいそしみしが、一方に、貴重なる原本の萬一の湮滅を惧れ、上述の古鈔本のうち十部を、古典複製の叢書なる扶桑珠寶の中に收めて印行を了へ、永く學者の參考に供することとし、また新訓萬葉集、白文萬葉集、分類萬葉集等を編纂し、更に武田君と協力して、校本萬葉集增訂版十冊を刊行したりき。

しかして定本の事業は、一首の研究、いな一語一字の研究はた容易ならざるを以て、荏苒歳月を閲せしが、完全なる定本の作成は、百年河清を俟つよりも難き業なることを思ひ、更に武田君と協力し、昭和十五年二月、巻一巻二巻三巻四の本文及び別記、昭和十七年四月、巻五巻六巻七巻八の本文及び別記、昭和十七年十二月巻九巻十巻十一巻十二の本文及び別記、昭和十九年一月、巻十三巻十四巻十五巻十六の本文及び別記を刊行せしが、こゝに巻十七以下四巻の本文及び別記を刊行してこれを完成するに至れり。

この書、定本萬葉集の名を負はせつといへども、その一語一字に就きては、現在に於いて、はた將來に於いて、異見あるもの蓋し尠からざるべし。畢竟するに、定字、定訓、定說は、多くの學者の多くの歳月の研鑽を經、或は古鈔本の出現あらむによりて、漸次確定すべきものならむ。本書また機會ある毎に逐次改訂を加へて、將來一層完全なるものに近からしめむと欲す。ただ今日に於いて、現に知らるる限りの證本及び文證により、また諸學者の所說を參照し、校勘考察を忠實に加へたるものなるをもて、永く萬葉集研究の基礎たるべきことは予の堅く信ずるところなり。

昭和二十三年三月

佐佐木信綱識

凡例

一、本書は、本文及び別記の二部から成る。

一、本文は、上段に萬葉集の原文を掲げ、これに相當する釋文を、その下段に掲げ、別記に記事のある詞句を、更にその下方に掲げた。この最下段に出したものの中、別記に本文校定に關する記事のあるものにはその句の右に傍線を施し、原文の字面に關係せず訓法のみの記事のものには施線しないこととした。

一、本書に掲げた萬葉集の原文は、現存せる最古の全本として知られる西本願寺本萬葉集を底本とし、これに校本萬葉集に使用した諸傳本に依り、時には諸學者の說及び編者の所見をも參考として校訂を加へた。その體裁は主として底本に依つた。文字は、便宜上普通の活字を使用したが、異體の甚しきものは、特に新製した。底本に使用してある異體字で、本書に普通の活字としたものは、異體字表として本書の附錄とした。なほ歌と謌と哥、白水と泉、麻呂と麿との如きは、本朝古寫本の例に依り、すべて別字として取扱はなかつた。底本の文字を改訂する場合は、別系統の傳本二種以上の一致を以つてするを原則とした。但し、傳本の缺乏、及び理論上等の理由に依り、この原則に依ることを得ない場合がある。底本の文字を改訂した場合は、最下段に、まづその詞句を掲げてこれに傍線を附し、次に括弧を加へて、傳本の記號その他の根據を示し、次に底本の文字を記すこととした。底本にもと文字の無かつた場合は、これに代ふるに——を以つてした。なほ改訂に資した傳本が二種以上ある場合は、二種の傳本の名を擧げるに止めることとした。原文の改訂に當つては、傳來を尊重して、學說に依つて文字を改訂することは萬已むを得ざるもののみに止めた。これらは別記にその改訂の理由を記したが、底本の文字を改訂しない場合でも、特に說明を要するものは、最下段に詞句を掲げて、別

記にこれに關する記事を掲げた。本文下欄に掲げた改訂の根據は、往々にして別記に擧げた根據と一致しないものがある。それは本文下欄の根據は、なるべくその句全體を證するものを掲げ、別記では特に問題となるべき文字の根據を擧げたからである。但し、下欄に擧げた根據の下に＊符を附したものは、その一部分のみを證することを示すものである。なほ諸傳があつて取捨を決定し難いもののうち、最下段にその諸傳を併記しておいたものもある。これは〔　〕の中に插んで區別しておいた。

一、釋文に於いては、編者の一人が曩に刊行した新訓萬葉集(岩波文庫本)を基礎とし、上段の原文に基き、またその後の研究に依つて改訂を加へた。そのいまだ定訓を得ざるものは、しばらく原文の儘にこれを存した。釋文に關して諸說のあるものは、しばらくその一を取つて本文としたが、特に最下段に他の諸訓を併記しておいたものもある。

一、原文及び釋文の決定に際し、その理由とした所は、別記にこれを記した。別記に出した詞句は、すべて本文の部の最下段に掲出してあるから、それは別記の目錄といふことにもなる。別記は、その要を摘んで記すに止めた。詳しいことは、編者の他の論文に發表したものもあり、また將來發表するものもあるであらう。

一、本書に使用した諸傳本の記號は次の如くである。但し、學書は、考、古義等の如く、略稱を用ゐる場合でも、直にその書と知られる稱號を用ゐることとした。

桂	桂本	藍	藍紙本
金	金澤本	天	天治本
嘉	嘉曆傳承本	壬	傳壬生隆祐筆本
類	類聚古集	古葉	古葉略類聚鈔
文	金澤文庫本	細	細井本（細一　細井本の二種、巻一―三、七―二十。細二　細井本の二種、巻三、四、五、六。）
元	元曆校本		
尼	尼崎本		
春	春日本		
神	神田本		

溫　溫故堂本
京　京都帝國大學本
矢　大矢本
無　活字無訓本
冷　傳冷泉爲頼筆本
附　活字附訓本

定本萬葉集　五

萬葉集卷第十七

天平二年庚午冬十一月大宰帥大伴卿被任大納言上京時傔從人等別取海路入京於是悲傷羈旅各陳所心作歌十首

同十年七月七日大伴宿祢家持獨仰天漢聊述懷歌一首

同十二年十一月九日大伴宿禰家持追和大宰時梅花新歌六首

同十三年二月右馬頭境部宿祢老麻呂讃三香原新都歌一首 并短歌

四月二日大伴宿祢書持詠霍公鳥贈兄家持歌二首

三日内舍人大伴宿祢家持從久邇京報送弟書持歌三首

田口朝臣馬長思霍公鳥歌一首

山邊宿祢明人詠春鶯歌一首

同十六年四月五日大伴宿祢家持於平城故郷作歌六首

同十八年正月日雪零左大臣橘卿率王卿等參入太上皇御在所作歌五首 十六首略之

萬葉集卷の第十七

天平二年庚午冬十一月、大宰帥大伴卿の大納言に任(ま)けらえ京に上りし時、傔從の人等別に海路を取りて京に入る。ここに羈旅を悲み傷み、各所心を陳べて作れる歌十首

同じ十年七月七日、大伴宿禰家持の、獨天漢を仰ぎて聊懐を述ぶる歌一首

同じ十二年十一月九日、大伴宿禰家持の、大宰の時の梅花に追ひて和ふる新しき歌六首

同じ十三年二月、右馬頭境部宿禰老麻呂の、三香の原の新しき都を讃むる歌一首 并に短歌

四月二日、大伴宿禰書持の、霍公鳥を詠みて兄家持に贈れる歌二首

三日、内舍人大伴宿禰家持の、久邇の京より弟書持に報へ送る歌三首

田口朝臣馬長の、霍公鳥を思(しの)ぶ歌五首

山邊宿禰明人の、春鶯を詠める歌一首

同じ十六年四月五日、大伴宿禰家持の、平城の故郷にて作れる歌六首

同じ十八年正月の日、雪の零りしに、左大臣橘卿の、王卿等を率(ま)て、太上皇の御在所に參入(まゐ)りて作れる歌五首 十六首は略す

天平二年庚午 大宰帥(神龍)「太宰帥」 傔從人等

大伴宿祢家持 大宰時(神龍)「太宰時」

四月二日

正月日雪 十六首

同七月越中守大伴宿祢赴任時大伴坂上郎女贈家持歌二首
更贈越中國歌二首
平群氏女郎贈越中守大伴宿祢家持歌十二首
八月七日夜宴飲越中館下時守大伴宿祢家持歌一首
椽大伴宿祢池主作歌三首
守大伴宿祢家持歌二首
椽大伴池主歌一首
守大伴家持歌一首
大目秦忌寸八千嶋歌一首
大原高安眞人作歌一首
守大伴家持歌二首
史生土師宿祢道良歌一首
大目秦忌寸八千嶋館宴歌一首
九月廿五日大伴家持遙聞弟喪感傷歌一首 并短歌
十一月越中守大伴家持大帳使椽大伴池主還到本任時相歡歌二首
同十九年二月廿日大伴家持臥病悲傷歌一首 并短歌

守大伴家持贈椽大伴池主悲歌二首 并序
同廿年二月廿九日守大伴宿祢家持歌二首
沽洗二日椽大伴池主歌二首
三月三日大伴家持送椽大伴池主七言詩一首 并序
四日大伴池主奉和守家持詩歌一首 并短歌
五日椽大伴宿祢池主答守家持詩一首 并序
同五日大伴家持短歌二首
廿日大伴家持起戀情歌一首 并短歌
四月大伴家持未聞霍公鳥歌二首
三月卅日大伴家持二上山賦一首 并短歌
卅日大伴家持依興作歌一首
四月十六日大伴家持聞霍公鳥述懷歌一首
大目秦忌寸饑守大伴家持歌二首
廿日守大伴家持遊覽布施水海賦一首 并短歌
廿六日椽大伴池主敬和遊覽布施水海賦一首 并一絕
廿六日椽大伴池主餞守大伴家持時家持作歌一首
介內藏忌寸繩麿餞守家持歌一首
守大伴家持和繩麿歌一首

守大伴家持の、椽大伴池主に贈れる悲の歌二首 并に序
同じ二十年二月二十九日、守大伴宿祢家持の歌二首
沽洗二日、椽大伴池主の歌二首
三月三日、大伴家持の、椽大伴池主に送れる七言の詩一首 并に序
四日、大伴池主の、守家持の詩に和へ奉れる歌一首 并に短歌
五日、椽大伴宿祢池主の、守家持に答ふる詩一首 并に序
同じ五日、大伴家持の短歌二首
二十日、大伴家持の、戀の情を起せる歌一首 并に短歌
四月、大伴家持の、いまだ霍公鳥を聞かざる歌二首
三月三十日、大伴家持の二上山の賦一首 并に短歌
三十日、大伴家持の、興に依りて作れる歌一首
四月十六日、大伴家持の、霍公鳥を聞きて懐を述ぶる歌一首
大目秦忌寸の、守大伴家持を餞する歌二首
二十日、守大伴家持の、布施の水海に遊覽せる賦一首 并に短歌
二十六日、椽大伴池主の、布施の水海に遊覽せる賦に敬みて和ふる一首 并に一絕
二十六日、椽大伴池主の、守大伴家持を餞せし時、家持の作れる歌一首
介內藏忌寸繩麻呂の、守家持を餞する歌一首
守大伴家持の、繩麻呂に和ふる歌一首

大伴宿祢家持歌
沽洗
椽大伴池主歌二首
詩歌一首
起戀情歌一首并短歌(細)「起戀情歌二首并短歌」
三月卅日
二上山賦一首并短歌
卅日大伴家持依興作歌一首
餞守大伴家持歌
布施水海
廿六日
布施水海
餞守家持歌(神細)「餞守家持作歌」
大目
悲傷歌一首

大伴池主傳誦石川朝臣水通橘歌一首
同日守大伴家持舘飲宴歌一首
廿七日大伴家持立山賦一首
廿八日大伴池主敬和守大伴家持立山賦一首 幷二絶
卅日守大伴家持贈椽大伴池主歌一首 幷一絶
五月二日椽大伴池主報和守家持述懷歌一首 幷二絶
九月廿六日守大伴家持思放逸鷹夢感悅一首 幷短歌
高市連黑人歌一首
大伴宿祢家持歌四首
守大伴家持春出擧巡行諸郡當時所屬歌九首
大伴家持怨鶯晩哢歌一首
造酒歌一首

大伴池主の傳へ誦める、石川朝臣水通の橘の歌一首
同じ日、守大伴家持の館に飲宴する歌一首
二十七日、大伴家持の立山の賦一首
二十八日、大伴池主の、守大伴家持の立山の賦に敬みて和ふる一首 幷に二絶
三　日、守大伴家持の、椽大伴池主に贈れる歌一首 幷に一絶
五月五日、椽大伴池主の、守家持の懷を述ぶる歌に報へ和ふる一首 幷に二絶
九月二十六日、守大伴家持の、放逸せる鷹を思びて、夢みて感悅せる一首 幷に短歌
高市連黑人の歌一首
大伴宿禰家持の歌四首
守大伴家持の、春の出擧に諸郡を巡行し、當時屬する所の歌九首
大伴家持の、鶯の晩く哢くを怨むる歌一首
酒を造る歌一首

石川朝臣水通（神細）「石河朝臣水通」
五月二日
大伴宿祢家持
造酒歌

天平二年庚午冬十一月大宰帥大伴卿被任大納言 兼帥如舊
上京之時傔從等別取海路入京於是悲傷羈旅各陳所心作歌十首
和我勢兒乎安我松原欲見度婆安麻乎等女登母多麻藻可流美由
右一首三野連石守作
荒津乃海之保悲思保美知時波安礼登伊頭礼乃時加吾孤悲射良牟
伊蘇其登尒海夫乃釣船波氐尒家里我船波氐牟伊蘇乃之良奈久
昨日許曾敷奈但婆勢之可伊佐魚取比治奇乃奈太乎今日見都流香母
淡路嶋刀和多流船乃可治麻尒毛吾波和須礼受伊弊乎之曾於毛布
大船乃宇倍尒之居婆安麻久毛乃多度伎毛思良受歌乞和我世
海未通女伊射里多久火能於煩保之久都努乃松原於母保由流可聞

天平二年庚午冬十一月、大宰帥大伴卿の、大納言に任けらえ 帥を兼ぬること舊の如し 京に上りし時、傔從等の、別に海路を取りて京に入り、ここに羈旅を悲み傷みて、各所心を陳べて作れる歌十首
三八九〇 我が夫子を我が松原よ見渡せば海人をとめども玉藻刈る見ゆ
右の一首は、三野連石守の作れる。
三八九一 荒津の海潮干潮滿ち時はあれどいづれの時か吾が戀ひざらむ
三八九二 礒ごとに海人の釣船泊てにけり我が船泊てむ礒の知らなく
三八九三 昨日こそ船出はせしか鯨魚取り比治奇の灘を今日見つるかも
三八九四 淡路島門渡る船の楫間にも吾は忘れず家をしぞ念ふ
三八九八 大船の上にし居れば天雲のたどきも知らず歌乞我が夫
三八九九 海未通女漁り焚く火のおほほしく都努の松原念ほゆるかも

大宰帥
傔從
羈旅（元神）「羈旅」
伊蘇其登尒
波氐尒家里
敷奈但婆勢之可
大船乃
歌乞知我世

多麻波夜須武庫能和多里尒天傳日能久礼由氣婆家
乎之曾於毛布
家尒底母多由多敷命浪乃宇倍尒宇伎氐之乎礼波於
久香之良受母
大海乃於久可母之良受由久和礼乎何時伎麻佐武等
問之兒良波母
右九首作者不審姓名
十年七月七日之夜獨仰天漢聊述懷一首
多奈波多之船乘須良之麻蘇鏡吉欲伎月夜尒雲起和
多流
右一首大伴宿祢家持作
追和大宰之時梅花新歌六首
民布由都藝芳流波吉多礼登鳶梅能芳奈君尒之安良
祢婆遠流人毛奈之
鳶梅乃花美夜万等之美尒安里登母也如此乃未君波
見礼登安可尒勢牟
春雨尒毛延之楊奈疑可鳶梅乃花登母尒於久礼奴常
乃物能香聞

三八九五 玉はやす武庫の渡に天づたふ日の暮れゆけば家をしぞ念ふ
三八九六 家にてもたゆたふ命浪の上に浮きてし居れば奥處知らずも
三八九七 大海の奥處も知らず行く我を何時來まさむと問ひし兒らはも
右の九首は、作者姓名を審にせず。
十年七月七日の夜、獨天漢を仰ぎて聊懷を述ぶる一首
三九〇〇 織女し船乘りすらしまそ鏡清き月夜に雲立ち渡る
右の一首は、大伴宿禰家持の作れる。
大宰の時の梅花に追ひて和ふる新しき歌六首
三九〇一 み冬つぎ春はきたれど梅の花君にしあらねばをる人もなし
三九〇二 梅の花み山と繁に有りともやかくのみ君は見れど飽かにせむ
三九〇三 春雨に萌えし楊か梅の花ともに後れぬ常の物かも

日能久礼由氣婆（元細）「日能久礼由氣波」
宇伎氐之乎礼波（元）「思之乎礼波一云宇伎氐之乎礼八」
問之兒良波母（元類）「問之兒等波母」
大宰之時（元神）「太宰之時」
遠流人毛奈之
見礼登安可尒勢牟
常乃物能香聞

宇梅能花伊都波乎良自等伊登波祢登佐吉乃盛波乎
思吉物奈利
遊内乃多努之吉庭尒梅柳乎理加謝思底婆意毛比奈
美可毛
御苑布能百木乃宇梅乃落花之安米尒登妣安我里雪
等敷里家牟
右十二年十二月九日大伴宿祢書持作
讃三香原新都歌一首 幷短歌
山背乃久迩能美夜古波春佐礼播花咲乎〻理秋左礼
婆黄葉尒保比於婆勢流泉河乃可美都瀬尒宇知橋和
多之余登瀬尒波宇枳橋和多之安里我欲比都加倍麻
都良武万代麻弖尒
楯並而伊豆美乃河波乃水緒多要受都可倍麻都良牟
大宮所
右十三年二月右馬頭境部宿祢老麿作也
詠霍公鳥歌二首
多知婆奈波常花尒毛歟保登等藝須周無等來鳴者伎
可奴日奈家牟

三九〇四 梅の花何時は折らじと厭はねど咲の盛は惜しきものなり
三九〇五 遊ぶ内の樂しき庭に梅柳折りかざしてば念ひ無みかも
三九〇六 御苑生の百木の梅の散る花の天に飛びあがり雪と降りけむ
右は、十二年十二月九日、大伴宿禰書持の作れる。
三香の原の新しき都を讃むる歌一首 幷に短歌
三九〇七 山背の　久邇の都は　春されば　花咲きををり　秋されば
黄葉にほひ　帶ばせる　泉の河の　上つ瀬に　うち橋わたし
淀瀬には　浮橋渡し　在り通ひ　仕へまつらむ　萬代までに
三九〇八 楯並めて泉の河の水脈絶えず仕へまつらむ大宮處
右は、十三年二月右馬頭境部宿禰老麻呂の作れる。
霍公鳥を詠める歌二首
三九〇九 橘は常花にもが霍公鳥住むと來鳴かば聞かぬ日なけむ

乎理加謝思底婆（細類）「乎理可謝思底波」
十二年十二月九日（元）「十二年十一月九日」
大伴宿祢書持（元）「大伴宿祢家持」
久迩能美夜古波（元）「久尒能美夜古波」
花咲乎〻理（元神）「花喚乎〻理」
秋左礼婆（元類）「秋佐礼婆」
都加倍麻都良武
楯並而（元）「反歌楯並而」
右十三年（元）「右天平十三年」
右馬頭（元細）「右馬寮頭」

珠尒奴久安布知乎宅尒宇惠多良婆夜麻霍公鳥可礼
受許武可聞

右四月二日大伴宿祢書持從奈良宅贈兄家持

橙橘初咲霍鳥飜嚶對此時候詎不暢志因作三首短歌以
散欝結之緒耳

安之比奇能山邊尒乎礼婆保登等藝須木際多知久吉
奈可奴日波奈之

保登等藝須奈尒乃情曾多知花乃多麻奴久月之來鳴
登餘牟流

保登等藝須安不知能枝尒由吉底居者花波知良牟奈
珠登見流麻泥

右四月三日內舍人大伴宿祢家持從久迩京報送弟
書持

思霍公鳥歌一首　田口朝臣馬長作

保登等藝須今之來鳴者餘呂豆代尒可多理都具倍久
所念可母

右傳云一時交遊集宴此日此處霍公鳥不喧仍作件
歌以陳思慕之意但其宴所幷年月未得詳審也

三九一〇珠に貫く楝を宅に植ゑたらば山霍公鳥離れず來むかも

右は、四月二日大伴宿禰書持の、奈良の宅より兄家持に贈れる。

橙橘初めて咲き、霍鳥飜り嚶く。此の時候に對して、詎ぞ志を暢べざらむ。因りて三首の短歌を作りて、欝結の緒を散らすのみ。

三九一一あしひきの山邊に居れば霍公鳥木の間立ちくき鳴かぬ日はなし

三九一二霍公鳥何の心ぞ橘の珠貫く月し來鳴きとよむる

三九一三霍公鳥楝の枝に行きて居ば花は散らむな珠と見るまで

右は、四月三日內舍人大伴宿禰家持の、久邇の京より弟書持に報へ送れる。

霍公鳥を思ぶ歌一首　田口朝臣馬長の作れる

三九一四霍公鳥今し來鳴かば萬代に語りつぐべく念ほゆるかも

右は、傳へ云はく、ある時交遊集宴せり。此の日此の處に霍公鳥鳴かず。仍りて件の歌を作りて思慕の意を陳べきといふ。但しその宴所幷に年月日はいまだ詳審なることを得ず。

贈兄家持
霍鳥飜嚶
對此時候
仍作件歌（神細）

山部宿祢明人詠春鶯歌一首

安之比奇能山谷古延氐野豆加佐尒今者鳴良武宇具
比須乃許惠

右年月所處未得詳審但隨聞之時記載於茲

十六年四月五日獨居平城故宅作歌六首

橘乃尒保敞流香可聞保登等藝須奈久欲乃雨尒宇都
路比奴良牟

保登等藝須夜音奈都可思安美指者花者須具登毛可
礼受加奈可牟

橘乃尒保敞流苑尒保登等藝須鳴等比登都具安美佐
散麻之乎

青丹余之奈良能美夜古波布里奴礼登毛等保登等藝
須不鳴安良久尒

鶉鳴布流之登比等波於毛敞礼騰花橘乃尒保敷許乃
屋度

加吉都播多衣尒須里都氣麻須良雄乃服曾比獦須流
月者伎尒家里

右大伴宿祢家持作

山部宿禰明人の春鶯を詠める歌一首

三九一五あしひきの山谷越えて野づかさに今は鳴くらむ鶯の聲

右は、年月所處、いまだ詳審なることを得ず。但し聞きし時のまにまにここに記し載す。

十六年四月五日、獨平城の故き宅に居て作れる歌六首

三九一六橘のにほへる香かも霍公鳥鳴く夜の雨にうつろひぬらむ

三九一七霍公鳥夜音なつかし網ささば花は過ぐとも離れずか鳴かむ

三九一八橘のにほへる苑に霍公鳥鳴くと人告ぐ網ささましを

三九一九あをによし奈良の都は古りぬれどもと霍公鳥鳴かずあらくに

三九二〇鶉鳴き古しと人は念へれど花橘のにほふこの宿

三九二一杜若衣に摺りつけ丈夫のきそひ獵する月は來にけり

右は、大伴宿禰家持の作れる。

山部宿祢明人
山谷古延氐
野豆加佐尒
花者須具登毛（元神）「花者須久登毛」
保登等藝須
不鳴安良久尒
鶉鳴（元神）「鶉鳴」
於毛敞礼騰
右大伴宿祢家持作（元）「右六首歌者天平十六年四月五日獨居於平城故鄕舊宅大伴宿祢家持作」

十八年正月白雪多零積地數寸也於時左大臣橘卿率大納言藤原豐成朝臣及諸王臣等參入太上天皇御在所中宮西院供奉掃雪於是降　詔大臣參議幷諸王者令侍于大殿上諸卿大夫者令侍于南細殿而則賜酒肆宴勅曰汝諸王卿等聊賦此雪各奏其歌

左大臣橘宿祢應　詔歌一首

布流由吉乃之路髮麻泥尒大皇尒都可倍麻都礼婆貴久母安流香

紀朝臣清人應　詔歌一首

天下須泥尒於保比氐布流雪乃比加里乎見礼婆多敷刀久母安流香

紀朝臣男梶應　詔歌一首

山乃可比曾許登母見延受乎登都日毛昨日毛今日毛由吉能布礼〻婆

葛井連諸會應　詔歌一首

新年乃婆自米尒豐乃登之思流須登奈良思雪能敷礼流波

大伴宿祢家持應　詔歌一首

十八年正月、白雪多に零りて地に積むこと數寸なり。時に左大臣橘卿、大納言藤原豐成朝臣及び諸王臣等を率て、太上天皇の御在所中宮西院に參入りて、掃雪に供へ奉りき。ここに詔を降して、大臣參議幷に諸王は、大殿の上に侍はしめ、諸卿大夫は南の細殿に侍はしめて、酒を賜ひて肆宴し給ひき。勅し給はく、汝諸王卿等、聊此の雪を賦して各其の歌を奏せよといふ。

左大臣橘宿禰の、詔に應ふる歌一首

三九二二 降る雪の白髮までに大皇に仕へまつれば貴くもあるか

紀朝臣清人の、詔に應ふる歌一首

三九二三 天の下すでに覆ひて降る雪の光を見れば貴くもあるか

紀朝臣男梶の、詔に應ふる歌一首

三九二四 山の峽其處とも見えず一昨日も昨日も今日も雪の降れれば

葛井連諸會の、詔に應ふる歌一首

三九二五 新しき年のはじめに豐の年しるすとならし雪の降れるは

大伴宿禰家持の、詔に應ふる歌一首

十八年正月（元）「天平十八年正月」
諸王臣等（元）「諸王諸臣等」
中宮西院
諸卿大夫
賜酒
須泥尒於保比氐
由吉能布礼〻婆（元細）「由吉能布礼〻波」

大宮能宇知尒毛刀尒毛比賀流麻泥零須白雪見礼杼安可奴香聞

藤原豐成朝臣　巨勢奈弖麿朝臣
大伴牛養宿祢　藤原仲麿朝臣
三原王　智奴王
船王　邑知王
小田王　林王
穗積朝臣老　小田朝臣諸人
小野朝臣綱手　高橋朝臣國足
太朝臣德太理　高丘連河內
秦忌寸朝元　楢原造東人

右件王卿等應　詔作歌依次奏之登時不記其歌漏失但秦忌寸朝元者左大臣橘卿謔云靡堪賦歌以麝贖之因此默已也

大伴宿祢家持以閏七月被任越中國守卽取七月赴任所於時姑大伴氏坂上郎女贈家持歌二首

久佐麻久良多妣由久吉美乎佐伎久安礼等伊波比倍須惠都安我登許能敞尒

三九二六 大宮の內にも外にも光るまで零らす白雪見れど飽かぬかも

藤原豐成朝臣、巨勢奈弖麻呂朝臣、大伴牛養宿禰、藤原仲麻呂朝臣、三原王、智奴王、船王、邑知王、小田王、林王、穗積朝臣老、小田朝臣諸人、小野朝臣綱手、高橋朝臣國足、太朝臣德太理、高丘連河內、秦忌寸朝元、楢原造東人。

右の件の王卿等、詔に應へて歌を作り次によりて奏しき。登時記さず、其の歌漏失せり。但し秦忌寸朝元は、左大臣橘卿謔れて云はく、歌を賦するに堪へざらば麝を以ちて贖へといふ。此に因りて默已をりき。

大伴宿禰家持、閏七月を以ちて越中の國の守に任けらえ、卽七月を取りて任所に赴く。時に姑大伴氏坂上郎女の、家持に贈れる歌二首

三九二七 草枕旅ゆく君を幸くあれと齋戸すゑつ吾が床の邊に

大宮能（元類）「大宮之」
巨勢奈弖麿朝臣
智奴王
小田王（元）「山田王」
小野朝臣綱手
謔云
默已也（元）「點已也」
以閏七月（元）「以天平十八年閏七月」
大伴氏坂上郎女
安我登許能敞尒

伊麻能其等古非之久伎美我於毛保要婆伊可尒加母
世牟須流須邊乃奈左

更贈越中國歌二首

多妣尒伊仁思吉美志毛都藝氐伊米尒美由安我加多
孤悲乃思氣家礼婆可聞

美知乃奈加久尒都美可未波多妣由伎母之思良奴伎
美乎米具美多麻波奈

平群氏女郎贈越中守大伴宿祢家持歌十二首

吉美尒餘里吾名波須泥尒多都多山絶多流孤悲乃之
氣吉許呂可母

須麻比等乃海邊都祢佐良受夜久之保能可良吉戀乎
母安礼波須流香物

阿里佐利底能知毛相牟等於母倍許曾都由能伊乃知
母都藝都追和多礼

奈加奈可尒之奈婆夜須家牟伎美我目乎美受比佐奈
良婆須敞奈可流倍思

許母利奴能之多由孤悲安麻里志良奈美能伊知之路
久伊泥奴比登乃師流倍久

三九二八今のごと戀しく君が思ほえばいかにかもせむ爲るすべのなさ

更に越中の國に贈れる歌二首

三九二九旅に去にし君しも續ぎて夢に見ゆ吾が片戀の繁ければかも

三九三〇道の中國つ御神は旅行も爲知らぬ君を惠みたまはな

平群氏の女郎の、越中守大伴宿禰家持に贈れる歌十二首

三九三一君により吾が名はすでに立田山絶えたる戀のしげき頃かも

三九三二須磨人の海邊常去らず燒く鹽の辛き戀をも吾はするかも

三九三三ありさりて後も逢はむと念へこそ露の命も續ぎつつ渡れ

三九三四なかなかに死なば安けむ君が目を見ず久ならば術なかるべし

三九三五隱沼の下ゆ戀ひあまり白波のいちしろく出でぬ人の知るべく

伊麻能其等（元神）「伊麻能去等」

吉美志毛都藝氐

久佐麻久良多妣尒之婆〻〻可久能未也伎美乎夜利
都追安我孤悲乎良牟

草枕多妣伊尒之伎美我可敞里許牟月日乎之良牟須
邊能思良難久

可久能未也安我故非乎浪牟奴婆多麻能欲流乃比毛
太尒登吉佐氣受之氐

佐刀知加久伎美我奈里那婆古非米也等母登奈於毛
比此安連曾久夜思伎

餘呂豆代等許己呂波刀氣氐和我世古我都美之手見
都追志乃備加祢都母

鷽能奈久〻良多尒〻宇知波米氐夜氣波之奴等母伎
美乎之麻多武

麻都能波奈花可受尒之毛和我勢故我於母敞良奈久
尒母登奈佐吉都追

右件歌者時〻寄便使來贈非在一度所送也

八月七日夜集于守大伴宿祢家持舘宴歌

秋田乃穗牟伎見我氐里和我勢古我布左多乎里家流
乎美奈敞之香物

三九三六草枕旅にしばしばかくのみや君を遣りつつ吾が戀ひをらむ

三九三七草枕旅去にし君が歸りこむ月日を知らむすべの知らなく

三九三八かくのみや吾が戀ひをらむぬばたまの夜の紐だに解き放けずして

三九三九里近く君が成りなば戀ひめやともとな念ひし吾ぞ悔しき

三九四〇萬代と心は解けて我が夫子が拊みし手見つつ忍びかねつも

三九四一鶯の鳴くくら谷にうちはめて燒けはしぬとも君をし待たむ

三九四二松の花花數にしも我が夫子が思へらなくにもとな咲きつつ

右の件の歌は、時々に便使に寄せて來贈れり。一度に送れるにあらず。

八月七日の夜、守大伴宿禰家持の館に集ひて宴する歌

三九四三秋の田の穗向見がてり我が夫子がふさ手折りける女郎花かも

登吉佐氣受之氐

餘呂豆代等（元）「餘呂豆代尒」

許己呂波刀氣氐

都美之手見都追（元）「都美之乎見都追」

奈久〻良多尒〻宇知波米氐

右件歌者（元）「右件十二首歌者」

在一度（元神）「在度」

穗牟伎見我氐里布左多乎里家流

右一首守大伴宿祢家持作

乎美奈敞之左伎多流野邊乎由伎米具利吉美乎念出
多母登保里伎奴

安吉能敞欲波阿加登吉左牟之思路多倍乃妹之衣袖伎
牟餘之母我毛

保登等藝須奈伎氐須疑尒之乎加備可良秋風吹奴余
之母安良奈久尒

右三首椋大伴宿祢池主作

家佐能安佐氣秋風左牟之登保都比等加里我來鳴牟
等伎知可美香物

安麻射加流比奈尒月歷奴之可礼登毛由比氐之紐乎
登伎毛安氣奈久尒

右二首守大伴宿祢家持作

安麻射加流比奈尒安流和礼乎宇多我多毛比母登吉
佐氣氐於毛保須良来也

右一首椋大伴宿祢池主

伊敞尒之底由比旦師比毛乎登吉佐氣受念意緒多礼
賀思良牟母

三九四四 女郎花咲きたる野邊を行きめぐり君を念ひ出徘徊り來ぬ

三九四五 秋の夜は曉さむし白栲の妹が衣手著むよしもがも

三九四六 霍公鳥鳴きて過ぎにし岡傍から秋風吹きぬよしもあらなくに

三九四七 今朝の朝明秋風寒し遠つ人鴈が來鳴かむ時近みかも

三九四八 天ざかる鄙に月歷ぬ然れども結ひてし紐を解きも開けなくに

三九四九 天ざかる鄙にある我をうたがたも紐解き放けて念ほすらめや

三九五〇 家にして結ひてし紐を解き放けず念ふ心を誰か知らむも

奈伎氐須疑尒之乎

家佐能安佐氣

安麻射加流
由比氐之紐乎

比母登吉佐氣氐
（元初）「比母毛登吉佐氣氐」

伊敞尒之底

右一首守大伴宿祢家持

日晩之乃奈吉奴流登吉波乎美奈敞之佐伎多流野邊
乎遊吉追都見倍之

右一首大目秦忌寸八千嶋

古歌一首 大原高安眞人作 年月不審但隨聞時記載茲焉

伊毛我伊敞尒伊久里能母里乃藤花伊麻許牟春母都
祢加久之見牟

右一首傳誦僧玄勝是也

鴈我祢波都可比尒許牟等佐和久良武秋風左無美曾
乃可波能倍尒

馬並氐伊射宇知由可奈思夫多尒能伎欲吉伊蘇未尒
与須流奈祢加見尒

右二首守大伴宿祢家持

奴婆多麻乃欲波布氣奴良之多末久之氣敷多我美夜
麻尒月加多夫伎奴

右一首史生土師宿祢道良

大目秦忌寸八千嶋之舘宴歌一首

奈吳能安麻能都里須流布祢波伊麻許曾婆敷奈太那

三九五一 茅蜩の鳴きぬる時は女郎花咲きたる野邊を行きつつ見べし

三九五二 妹が家に伊久里の森の藤の花今來む春も常かくし見む

三九五三 鴈がねは使に來むと騒くらむ秋風寒みその河の邊に

三九五四 馬並めていざうち行かな澁谿の清き礒廻に寄する波見に

三九五五 ぬばたまの夜はふけぬらし玉くしげ二上山に月かたぶきぬ

三九五六 奈吳の海人の釣する船は今こそは船柵打ちてあへて榜ぎ出め

右一首は、守大伴宿禰家持

右一首は、守大伴宿禰家持

右の一首は、傳へ誦めるは僧玄勝なり。

右の二首は、守大伴宿禰家持

右の一首は、史生土師宿禰道良

大目秦忌寸八千島の館に宴する歌一首

守大伴宿祢家持（元）「守大伴宿祢家持作」
乎美奈敞之

伊毛我伊敞尒
伊久里能母里乃
伊麻許牟春母（元類）伊麻許牟奉毛」

馬並氐

敷奈太那宇知氐

宇知氐安倍豆許藝泥米

右舘之客屋居望蒼海仍主人作此歌也

哀傷長逝之弟歌一首 并短歌

安麻射加流比奈乎佐米尒等大王能麻氣乃麻尒末尒
出而許之和礼乎於久流登青丹余之奈良夜麻須疑氐
泉河伎欲吉可波良尒馬駐和可礼之時尒好去而安礼
可敞理許牟平久伊波比氐待登可多良比氐許之比乃
伎波美多麻保許能道乎多騰保美山河能敞奈里氐安
礼婆孤悲之家口氣奈我枳物能乎見麻久保里念間尒
多麻豆左能使乃家礼婆宇礼之美登安我麻知刀敷尒
於餘豆礼能多波許登等可毛波之伎余思奈弟乃美許
等奈尒之加母時之波安良牟乎波太須酒吉穂出秋乃
芽子花尒保敞流屋戸乎 言斯人爲性好愛花草花樹而多植於甕院之庭故謂之花薫庭也 安佐尒波
尒伊泥多知奈良之碁庭尒敷美多比良氣受佐保能宇
知乃里乎徃過安之比紀乃山能許奴礼尒白雲尒多知
多奈妣久等安礼尒都氣都流 佐保山火葬故謂之佐保乃宇知乃佐刀乎由吉須疑
麻佐吉久登伊比氐之物能乎白雲尒多知多奈妣久登
伎氣婆可奈思物

右は、館の客屋は、居ながら蒼海を望む。仍りて主人この歌を作れり。

長逝せる弟を哀傷める歌一首 并に短歌

天離る 鄙治めにと 大王の 任のまにまに 出でて來し
吾を送ると あをによし 奈良山過ぎて 泉河 清き河原に
馬とどめ 別れし時に ま幸くて 吾歸り來む 平けく 齋
ひて待てと 語らひて 來し日の極 玉桙の 道をた遽み
山河の 隔りてあれば 戀しけく け長きものを 見まく欲
り 念ふ間に 玉梓の 使の來れば うれしみと 吾が待ち
問ふに およづれの たは言とかも 愛しきよし な弟の命
何しかも 時しはあらむを はだ薄 穗に出る秋の 芽子の
花 にほへる屋戸を 言ふこころは、この人、人となり花草花樹を愛でて多に甕院の庭に植う。故、人となり花草花樹を愛でて甕へる庭と謂へり。 朝庭
に 出で立ち平し 夕庭に 踏み平げず 佐保のうちの 里
を行き過ぎ あしひきの 山の木末に 白雲に 立ち棚引く
と 吾に告げつる 佐保山に火葬せり。故、佐保の内の里を行き過ぎといへり。

安倍豆許藝泥米
主人(元古葉)「主人八千嶋」

奈良夜麻須疑氐
安礼可敞理許牟(元類)「安礼可敞里許牟」

伊波比氐待登
可多良比氐
敞奈里氐安礼婆
多波許登等可毛(類)「多婆許登等可毛」

波之伎余思(元)「婆之伎余思」
時之波安良牟乎(元神)「時之婆安良牟乎」

波太須酒吉(元温)「婆太須酒吉」
尒保敞流屋戸乎
多植(類細)「多値」
佐保能宇知乃

佐刀乎由吉須疑(神細)「佐力乎由吉須疑」
伊比氐之物能乎

可加良牟等可祢豆思理世婆古之能宇美乃安里蘇乃
奈美母見世麻之物能乎
右九月廿五日越中守大伴宿祢家持遙聞弟喪感傷
作之也

相歡歌二首

庭尒敷流雪波知敞之久思加乃未尒於母比氐伎美乎
安我麻多奈久尒
白浪乃余須流伊蘇未乎榜船乃可治登流間奈久於母
保要之伎美

右以八月椽大伴宿祢池主附大帳使赴向京師而同
年十一月還到本任仍設詩酒之宴彈絲飲樂是日也
白雪忽降積地尺餘此時也漁夫之船入海浮瀾爰守
大伴宿祢家持寄情二眺聊裁所心

忽沈枉疾殆臨泉路仍作歌詞以申悲緒一首 并短歌

大王能麻氣能麻尒〻〻大夫之情布里於許之安思比
奇能山坂古延豆安麻射加流比奈尒久太理伎伊伎太
尒毛伊麻太夜須米受年月毛伊久良母阿良奴尒宇都
世美能代人奈礼婆宇知奈妣吉等許尒許伊布之伊多

三九五九 かからむとかねて知りせば越の海の荒磯の波も見せましもの
を

右は、九月二十五日、越中守大伴宿禰家持の、遙に弟の喪を聞き、感傷みて作れり。

相歡べる歌二首

三九六〇 庭に降る雪は千重しく然のみに念ひて君を吾が待たなくに

三九六一 白浪の寄する磯廻をこぐ船の楫取る間なく念ほえし君

右は、八月を以ちて、椽大伴宿禰池主、大帳使に附けらえて京師に赴向きき。而して同じ年十一月、本任に還り到りき。仍りて詩酒の宴を設け、彈絲飲樂せり。この日、白雪忽に降りて、地に積むこと尺餘なり。この時、漁夫の船、海に入り瀾に浮べり。ここに守大伴宿禰家持、情を二つの眺に寄せて、聊所心を裁る。

忽に枉疾に沈み、殆に泉路に臨めり。仍りて歌詞を作りて悲緒を申ぶる一首 并に短歌

三九六二 大王の 任のまにまに 丈夫の 心振り起し あしひきの
山坂越えて 天ざかる 鄙に下り來 息だにも いまだ休め
ず 年月も いくらもあらぬに うつせみの 世の人なれば
うち靡き 床に反側し 痛けくし 日にけに益る たらちね

可祢豆思理世婆
見世麻之物能乎(元神)「見世麻之物能乎」
右九月(元)「右天平十八年秋九月」

相歡歌二首(元神)「相歡歌二首越中守大伴宿祢家持作」
於母比氐伎美乎

右以八月(元)「右以天平十八年八月」
赴向京師(元神)
彈絲飲樂(類神)「彈絲飲樂」
是日也(元神)「是也」
漁夫之船(元)「復漁夫之船」
裁所心
忽沈枉疾(元)「忽沈狂疾」
山坂古延豆

宇都世美能(元神)「宇津世美能」

家苦之日異益多良知祢乃波ゝ能美許等乃大船乃由
久良ゝゝゝ尓思多叟非尓伊都可聞許武等麻多須良
牟情左夫之苦波之吉与志都麻能美許登母安氣久礼
婆門尓餘里多知己呂母泥乎遠理加敞之都追由布佐
礼婆登許宇知波良比奴婆多麻能黒髪之吉氐伊都之
加登奈氣可須良牟曾伊母毛勢母和可伎兒等毛波乎
知許知尓佐和吉奈久良牟多麻保己能美知乎多騰保
旅間使毛夜流余之母奈之於母保之伎許登都氐夜良
受孤布流尓思情波母要奴多麻伎波流伊乃知乎之家
騰世牟須辨能多騰伎乎之良尓加苦思氐也安良志乎
須良尓奈氣枳布勢良武

三九六三　世間は數なきものか春花の散りのまがひに死ぬべき念へば

三九六四　山河の退方を遠み愛しきよし妹を相見ずかくや嘆かむ

右は、十九年春二月二十日、越中國の守の館にて、病に臥し悲傷みて、聊此の歌を作れり。

椽大伴宿祢池主に贈れる悲の歌二首

世間波加受奈枳物能可春花乃知里能麻我比尓思奴
倍吉於母倍婆
山河乃曾伎敞乎登保美波之吉余思伊母乎安比見受
可久夜奈氣加牟

右十九年春二月廿日越中國守之舘臥病悲傷聊作
此歌

贈椽大伴宿祢池主悲歌二首

三九六三　世間は數なきものの　母の命の　大船の　ゆくらゆくらに　下戀に　何時かも
來むと　待たすらむ　情さぶしく　愛しきよし　妻の命も
明け來れば　門に倚り立ち　衣手を　折り反しつつ　夕されば　床うち拂ひ　ぬばたまの　黒髪敷きて　いつしかと　嘆かすらむぞ　妹も兄も　若き兒どもは　彼此に　騒き泣くらむ　玉桙の　道をた遠み　間使も　遣るよしも無し　思ほしき　言傳て遣らず　戀ふるにし　情は燃えぬ　たまきはる
命惜しけど　爲むすべの　たどきを知らに　かくしてや　荒し男すらに　嘆き臥せらむ

波ゝ能美許等乃（神細）「婆ゝ能美許等乃」
麻多須良牟
遠理加敞之都追
奴婆多麻能
和可伎兒等毛波（元神）「和可伎兒等毛婆」
美知乎多騰保旅（元神）
許登都氐夜良受
加苦思底也
加受奈枳物能可
知里能麻我比尓

三九六四　山河の退方を遠み　愛しきよし　妹を相見ずかくや　嘆かむ

右は、十九年春二月二十日、越中の國の守の館にて、病に臥し悲傷みて、聊此の歌を作れり。

椽大伴宿祢池主に贈れる悲の歌二首

右十九年（元）「右天平十九年二月廿日」
贈椽大伴宿祢池主（元）「守大伴宿祢家持贈椽大伴宿祢池主」

忽沈枉疾累旬痛苦禱恃百神且得消損而由身體疼羸筋
力怯軟未堪展謝係戀旅深方今春朝春花流馥於春苑春
暮春鴬囀聲於春林對此節候琴罇可翫矣雖有乘興之感
不耐策杖之勞獨臥帷幄之裏聊作寸分之歌輕奉机下犯
解玉顏其詞曰

波流能波奈伊麻波左加里尓仁保布良牟乎里氏加射
佐武多治可良毛我母

忽沈枉疾に沈み、旬を累ねて痛苦す。百神を禱み恃みて、力怯軟に、未だ展謝に堪へず。係戀彌深し。方今春の朝の春の花、馥を春の苑に流へ、春の暮の春の鶯、聲を春の林に囀る。此の節候に對して琴罇翫びつ可し。興に乘る感あれども、杖を策く勞に耐へず。獨帷幄の裏に臥して、聊寸分の歌を作り、輕しく机下に奉り、玉顏を解かむことを犯す。其の詞に曰はく

三九六五　春の花今は盛ににほふらむ折りて揮頭さむ手力もがも

忽沈枉疾
對此節候
帷幄之裏
乎里氏加射佐武

三九六六　鶯の鳴き散らすらむ春の花いつしか君と手折りかざさむ

二月廿九日、大伴宿禰家持

忽に芳音を辱くし、翰苑雲を凌ぐ。兼ねて倭詩を垂る、詞林錦を舒べたり。以ちて吟じ以ちて詠じ、能く戀緒を蠲く。春、樂む可し。暮春の風景最可怜し。紅桃灼灼として戯蝶花を廻りて儛ひ、翠柳依依として嬌鶯葉に隠りて歌ふ。樂しむべきかも、淡交席を促け、意を得て言を忘る。樂しきかも、美しきかも、幽襟賞するに足れり。豈慮りきや、蘭薫を隔てて琴罇用無く、空しく令節を過して物色人を輕みせむとは。怨むる所此に有り、默已ること能はず。俗の語に云ふ、藤を以ちて錦に續ぐといへり。聊談咲に擬するのみ。

三九六六　鶯の　鳴き散らすらむ　春の花　いつしか君と　手折りかざさむ

二月廿九日（元）「天平廿年二月廿九日」
琴罇無用（元神）
不能默已（元神）「不能默已俗」
夜麻我比尓
伎美尓旅西氐婆

三九六七　山峽に　咲ける櫻を　ただひと目　君に見せてば　何をか思はむ

三九六八　鶯の　來鳴く山吹　うたがたも　君が手觸れず　花散らめやも

礼受波奈知良米夜母

沽洗二日椽大伴宿祢池主

更贈歌一首 幷短歌

含弘之徳垂恩蓬體不貲之思報慰陋心載荷未春無堪所喩也但以稚時不渉遊藝之庭横翰之藻自乏于彫蟲焉幼年未逕山柿之門裁歌之趣詞失乎聚林矣爰辱以藤纈錦之言更題將石間瓊之詠因是俗愚懐癖不能默已仍捧數行式酬嗤咲其詞曰

於保吉民能麻氣乃麻尓〻〻之奈射加流故之乎袁佐米尓伊泥氐許之麻須良和礼須良余能奈可乃都祢之奈家礼婆宇知奈妣伎登許尓己伊布之伊多家苦乃日異麻世婆可奈之家口許己尓思出伊良奈家久曾許尓念出奈氣久蘇良夜須家奈久尓於母布蘇良久流之伎母能乎安之比紀能夜麻伎敞奈里氐多麻保許乃美知能等保家婆間使毛遣縁毛奈美於母保之吉許等毛可欲波受多麻伎波流伊能知乎之家登勢牟須辨能多騰吉乎之良尓隠居而念奈氣加比奈具佐牟流許己呂波奈之尓春花乃佐家流左加里尓於毛敷度知多乎里可

三九六九 大王の 任のまにまに しなざかる 越を治めに 出でて來し 丈夫吾すら 世の中の 常し無ければ うち靡き 床に反倒し 痛けくの 日にけに増せば 悲しけく 此處に思ひ出 いらなけく 其處に念ひ出 歎くそら 安けなくに 念ふそら 苦しきものを あしひきの 山來隔りて 玉桙の 道の遠けば 間使も 遣るよしも無み 思ほしき 言も通はず たまきはる 命惜しけど 爲むすべの たどきを知らに 籠り居て 念ひ嘆かひ 慰むる 心は無しに 春花の 咲ける盛に 思ふどち 手折りかざさず 春の野の 茂み飛びくく 鶯の 聲だに聞かず をとめ等が 春菜摘ますと くれなゐの 赤裳の裾の 春雨に にほひひづちて 通ふらむ 時の盛を いたづらに 過し遣りつれ 思はせる 君が心を うるはしみ 此の夜すがらに 寐も宿ずに 今日もしめらに 戀ひつつぞ居る

戴荷未春（元）「戴荷未春」　乏乎彫蟲（元神）「乏于彫蟲」　詞失乎聚林（元神）「詞失于聚林」　將石間瓊之詠不能默已（元神）「不能黙已」　故之乎袁佐米尓伊泥氐許之　夜須家奈久尓（神細）　夜麻伎敞奈里氐美知能登保家婆（元）「美知能登保家波」　春花乃（元細）「春花之」　多乎里可射佐受

射佐受波流乃野能之氣美登妣久〻鬱音太尓伎加受乎登賣良我春栄都麻須等久礼奈爲能赤裳乃須蘇能波流佐米尓〻保比〻豆知豆加欲敷良牟時盛乎伊多豆良尓須具之夜里都礼思努波勢流君之心乎宇流波之美此夜須我浪尓伊母祢受尓今日毛之賣良尓孤悲都追曾乎流

安之比奇能夜麻左久良婆奈比等目太尓伎美等之見氐婆安礼古非米夜母

夜麻扶枳能之氣美登毗久〻鬱能許惠乎聞良牟伎美波登母之毛

伊泥多〻武知加良乎奈美等許母里爲豆伎旅尓故布流尓許己呂度母奈思

三月三日大伴宿祢家持

七言晩春遊覧一首 幷に序

上巳名辰暮春麗景桃花昭瞼以分紅柳色含苔而競緑于時也携手曠望江河之畔訪酒迴過野客之家既而也琴罇得性蘭契和光嗟乎今日所恨徳星已少歟若不扣寂含章何以攄遊遙之趣忽課短筆聊勒四韻云尓

なゐの 赤裳の裾の 春雨に にほひひづちて 通ふらむ 時の盛を いたづらに 過し遣りつれ 思はせる 君が心を うるはしみ 此の夜すがらに 寐も宿ずに 今日もしめらに 戀ひつつぞ居る

三月三日、大伴宿禰家持

七言、晩春の遊覧一首 并に序

上巳の名辰、暮春の麗景、桃花瞼を昭して紅を分ち、柳色苔を含みて綠を競ふ。時に手を携へて曠く江河の畔を望み、酒を訪ひて迴に野客の家を過ぐ。既にして琴罇性を得、蘭契光を和ぐ。嗟乎今日恨むる所は徳星已に少きことを。若し寂を扣き章を含まずは、何を以ちてか逍遙の趣を攄べむ。忽に短筆に課せて聊四韻を勒すと云ふ。

三九七〇 あしひきの 山櫻花ひと目だに 君とし見てば 吾戀ひめやも

三九七一 山吹の 茂み飛び潜く 鶯の 聲を聞くらむ 君は羨しも

三九七二 出で立たむ 力を無みと 籠り居て 君に戀ふるに 心神もなし

三月三日、大伴宿禰家持

晩春遊覧（元）「晩春三日遊覧」　桃花昭瞼　贖望　訪酒　過野客之家（元）「過野客之家」　琴罇得性（元神）「琴樽得性」　扣寂含章（神細）「扣寂含章」　何以攄（元神）「何以攄」　逍遙之趣

餘春媚日宜怜賞　上巳風光足覽遊
柳陌臨江縟袨服　桃源通海泛仙舟
雲罍酌桂三清湛　羽爵催人九曲流
縱醉陶心忘彼我　酩酊無處不淹留

三月四日大伴從祢池主

昨日述短懷今朝汙耳目更承賜書且奉不次死罪〻〻不遺下賤頻惠德音英雲星氣逸調過人智水仁山既韞琳瑯之光彩潘江陸海自坐詩書之廊廟騁思非常託情有理七步成章數篇滿紙巧遣愁人之重患能除戀者之積思山柿歌泉比此如蔑彫龍筆海粲然得看矣方知僕之有幸也敬和歌其詞云

憶保枳美能旀許等可之古美安之比奇能夜麻野佐波良受安麻射可流比奈毛乎佐牟流麻須良袁夜奈途可母能毛布安乎尒余之奈良治伎可欲布多麻豆佐能都可比多要米也己母理古非伊枳豆伎和多利之多毛比余奈氣可布和賀勢伊尒之敞由伊比都藝久良之餘乃奈加波可受奈枳毛能曾奈具佐牟流己等母安良牟等佐刀毗等能安礼途都具良久夜麻備尒波佐久良婆奈

餘春の媚日は宜しく怜賞すべく　上巳の風光は覽遊するに足れり　柳陌は江に臨みて袨服を縟にし　桃源は海に通ひて仙舟を浮ぶ　雲罍に桂を酌めば三清湛へ　羽爵は人を催して九曲に流る　縱醉陶心して彼我を忘れ　酩酊して處として淹留せずといふことなし

三月四日、大伴宿禰池主

昨日短懷を述べ、今朝耳目を汙す。更に賜書を承り、且奉ること不次なり。死罪々々。

下賤を遺れず、頻に德音を惠む。英雲星氣、逸調人に過ぎたり。智水仁山、既に琳瑯の光彩を韞み、潘江陸海、おのづから詩書の廊廟に坐す。思を非常に聘せ、情を有理に託け、七步章を成し、數篇紙に滿つ。巧に愁人の重患を遣り、能く戀者の積思を除く。山柿の歌泉、此に比ぶれば蔑きが如し。彫龍の筆海粲然として看ることを得たり。方に僕の幸あるを知りぬ。敬みて和ふる歌。其の詞に云はく、

三九七三 大王の　命かしこみ　あしひきの　山野障らず　天離る　鄙も治むる　丈夫や　何かもの念ふ　あをによし　奈良路來通ふ　玉梓の　使絕えめや　籠り戀ひ　息づき渡り　下念よ嘆かふ吾が夫　古ゆ　言ひ繼ぎ來らし　世の中は　數なきものぞ　慰むる　事もあらむと　里人の　吾に告ぐらく　山傍には　櫻花散り　貌鳥の　間なくしば鳴く　春の野に　菫を摘むと　白栲の　袖折り反し　紅の　赤裳裾引き　孃子らは

忘彼我
如蔑
得看矣
夜麻野佐波良受（元）「夜麻野佐婆良受」
麻須良袁夜
奈途可母能毛布
之多毛比余
伊尒之敞由
可受奈枳毛能曾
佐刀毗等能
安礼途都具良久

知利可保等利能麻奈久之婆奈久春野尒須美礼乎都牟等之路多倍乃蘇泥乎利可敞之久礼奈爲能安可毛須蘇妣伎乎登賣良波於毛比美太礼弖伎美麻都等宇良吳悲須奈理己許呂具志伊謝美尒由加奈許等波多奈由比

夜麻夫枳波比尒〻〻佐伎奴宇流波之等安我毛布伎美波思久〻〻於毛保由

和賀勢故途古非須敞奈賀利安之可伎能保可尒奈氣加布安礼之可奈思母

三月五日大伴宿祢池主

昨暮來使幸也以垂晚春遊覽之詩今朝累信辱也以貺相招望野之歌一看玉藻稍寫鬱結二吟秀句已蠲愁緒非此眺翫孰能暢心乎但走稟性難彫闇神靡瑩握翰腐毫對研忘渴終日目流綴之不能所謂文章天骨習之不得也豈堪探字勒韻叶和雅篇哉抑聞鄙里少兒古人言無不酬聊裁拙詠敬擬解咲焉如今賦言勒韻同斯雅作之篇豈殊將石間瓊唱聲遊走曲歟抑小兒譬濫謠敬寫葉端式擬乱曰

七言一首

杪春餘日媚景麗　初巳和風拂自輕

念ひ亂れて　君待つと　うら戀すなり　心ぐし　いざ見に行かな　事はたなゆひ

三九七四 山吹は日に日に咲きぬ愛しと我が念ふ君はしくしく念ほゆ

三九七五 我が夫子に戀ひすべなかり葦垣の外になげかふ我し悲しも

三月五日、大伴宿禰池主

昨暮の來使は、幸にも晩春遊覽の詩を垂れ、今朝の累信は、辱くも相招望野の歌を貺ふ。一たび玉藻を看て、稍鬱結を寫き、二たび秀句を吟じて、已に愁緒を蠲く。此の眺翫にあらずは、孰か能く心を暢べむ。但走、稟性彫り難く、闇神瑩くこと靡し。翰を握りて毫を腐し、研に對ひて渴くを忘る。終日流を目して、綴れども能はず。所謂文章は天骨にして、習ひて得ず。豈字を探り韻を勒して雅篇に叶和するに堪へめや。そもそも鄙里の小兒に聞く、古人は言酬いずといふこと無しといへり。聊拙詠を裁り、敬みて解咲に擬す。如今言を賦し韻を勒し、斯の雅作の篇に同するは、豈石を將ちて瓊に間へ、聲を唱して走曲に遊ぶに殊ならめや。そもそも小兒の濫に謠ふに譬ふ。敬みて葉端に寫し、式ちて亂に擬して曰はく

七言一首

抄春の餘日媚景麗しく　初巳の和風拂へどもおのづから輕し

須美礼乎都牟等（元神）
蘇泥乎利可敞之
乎登賣良波（神細）「乎登賣良婆」
於毛比美太礼弖
宇良吳悲須奈理
和賀勢故途
古非須敞奈賀利
但走（元）「但惟下僕」
終日目流
如今賦言
將石間瓊
遊走曲歟（神矢）「遊之曲歟」
濫謠
葉端（神細）

來燕街泥賀宇入　歸鴻引蘆適赴瀛
聞君嘯侶新流曲　禊飲催爵泛河清
雖欲追尋良此宴　還知染懊脚跉町

短歌二首

佐家理等母之良受之安良婆母太毛安良牟己能夜万
夫吉乎美勢追都母等奈

安之可伎能保加尒母伎美我余里多〻志孤悲家礼許
曾婆伊米尒見要家礼

三月五日大伴宿禰家持、病に臥して作れる。

戀緒を述ぶる歌一首　并に短歌

妹毛吾毛許己呂波於夜自多具敞礼登伊夜奈都可之
久相見婆登許波都波奈尒情具之眼具之毛奈之尒波
思家夜之安我於久豆麻大王能美許登加之古美阿之
比奇能夜麻古要奴由伎安麻射加流比奈乎左米尒等
別來之曾乃日乃伎波美荒璞能登之由吉我敞利春花
乃宇都呂布麻泥尒相見祢婆伊多母須敞奈美之伎多
倍能蘇泥可敞之都追宿夜於知受伊米尒波見礼登宇
都追尒之多太尒安良祢婆孤悲之家口知敞尒都母里

奴近在者加敞利尒太仁母宇知由吉氏妹我多麻久良
佐之加倍氏祢天蒙許万思乎多麻保己乃路波之騰保
久關左閇尒敞奈里氏安礼許曾与思惠夜之餘志播安
良武曾霍公鳥來鳴牟都奇尒伊都之加母波夜久奈里
那牟宇乃花能尒保敞流山乎余曾能未母布里佐氣見
都追淡海路尒伊由伎能里多知青丹吉奈良乃吾家尒
奴要鳥能宇良奈氣之都追思多戀尒於毛比宇良夫礼
可度尒多知由布氣刀比都追吾乎麻都等奈須良牟妹
乎安比氏早見牟

安良多麻乃登之可弊流麻泥安比見祢婆許己呂毛之
努尒於母保由流香聞

奴婆多麻乃伊米尒波母等奈安比見礼騰多太尒安良
祢婆孤悲夜麻受家里

安之比奇能夜麻伎弊奈里氏等保家騰母許己呂之遊
氣婆伊米尒美要家里

春花能宇都路布麻泥尒相見祢婆月日餘美都追伊母
麻都良牟曾

右三月廿日夜裏忽兮起戀情作大伴宿祢家持

來燕は泥を銜みて宇を賀して入り　歸鴻は蘆を引きて逈に瀛に赴く　聞く君が嘯侶新に曲を流ふることを　禊飲爵を催して河清に泛ぶ　良きこの宴を追尋せむと欲へども　還りて知る懊に染みて脚の跉町たることを

短歌二首

佐家理等母之良受之安良婆母太毛安良牟己能夜万
夫吉乎美勢追都母等奈

安之可伎能保加尒母伎美我余里多〻志孤悲家礼許
曾婆伊米尒見要家礼

三月五日、大伴宿禰家持、病に臥して作れる。

戀緒を述ぶる歌一首　并に短歌

妹毛吾毛許己呂波於夜自多具敞礼登伊夜奈都可之
久相見婆登許波都波奈尒情具之眼具之毛奈之尒波
思家夜之安我於久豆麻大王能美許登加之古美阿之
比奇能夜麻古要奴由伎安麻射加流比奈乎左米尒等
別來之曾乃日乃伎波美荒璞能登之由吉我敞利春花
乃宇都呂布麻泥尒相見祢婆伊多母須敞奈美之伎多
倍能蘇泥可敞之都追宿夜於知受伊米尒波見礼登宇
都追尒之多太尒安良祢婆孤悲之家口知敞尒都母里

奴近在者加敞利尒太仁母宇知由吉氏妹我多麻久良
佐之加倍氏祢天蒙許万思乎多麻保己乃路波之騰保
久關左閇尒敞奈里氏安礼許曾与思惠夜之餘志播安
良武曾霍公鳥來鳴牟都奇尒伊都之加母波夜久奈里
那牟宇乃花能尒保敞流山乎余曾能未母布里佐氣見
都追淡海路尒伊由伎能里多知青丹吉奈良乃吾家尒
奴要鳥能宇良奈氣之都追思多戀尒於毛比宇良夫礼
可度尒多知由布氣刀比都追吾乎麻都等奈須良牟妹
乎安比氏早見牟

安良多麻乃登之可弊流麻泥安比見祢婆許己呂毛之
努尒於母保由流香聞

奴婆多麻乃伊米尒波母等奈安比見礼騰多太尒安良
祢婆孤悲夜麻受家里

安之比奇能夜麻伎弊奈里氏等保家騰母許己呂之遊
氣婆伊米尒美要家里

春花能宇都路布麻泥尒相見祢婆月日餘美都追伊母
麻都良牟曾

右三月廿日夜裏忽兮起戀情作大伴宿祢家持

三九七六　嗟けりとも知らずしあらば默もあらむこの山吹を見せつつもとな

三九七七　蘆垣の外にも君が倚り立たし戀ひけれこそは夢に見えけれ

三九七八　妹も吾も心は同じ副へれどいや懐しく相見れば常初花に情ぐし眼ぐしもなしに愛しけやし吾が奥妻大王の命かしこみ あしひきの山越え野行き天ざかる鄙治めにと別れ來し其の日の極あらたまの年往き返り春花の うつろふまでに相見ねば甚もすべなみ敷栲の袖反しつつ宿る夜閇ちず夢には見れど現にし直にあらねば戀しけく千重に積りぬ近くあらばかへりにだにも うち行きて妹が手枕指し交へて宿ても來ましを玉桙の路はし遠く關さへに隔りてあれこそよしゑやし よしはあらむぞ霍公鳥來鳴かむ月にいつしかも早くなりなむ卯の花のにほへる山を外のみもふり放け見つつ淡海路にい行きのり立ちあをによし奈良の吾家にぬえ鳥のうら嘆しつつ下戀に念ひうらぶれ門に立ち夕占問ひつつ吾を待つと宿すらむ妹を逢ひて早見む

三九七九　あらたまの年かへるまで相見ねば心もしのに念ほゆるかも

三九八〇　ぬばたまの夢にはもとな相見れど直にあらねば戀ひ止まずけり

三九八一　あしひきの山來隔りて遠けども心し行けば夢に見えけり

三九八二　春花のうつろふまでに相見ねば月日數みつつ妹待つらむぞ

右は、三月二十日の夜の裏に、忽に戀情を起して作れる。大伴宿禰家持

三月廿日
忽兮

孤悲家礼許曾婆（元神）「孤悲家礼許古婆」

染懊

短歌二首（元細）「短歌」

多具敞礼登

相見婆（元神）「相見波」

安麻射加流

登之由吉我敞利春花乃（元細）「春花之」

伊多母須敞奈美

蘇泥可敞之都追

知敞尒都母里奴

近在者（元神）「近有者」

加敞利尒太仁母宇知由吉氏

佐之加倍氏

關佐閇尒

敞奈里氏安礼許曾

宇乃花能

尒保敞流山乎

安比氏早見牟

安良多麻乃（元細）「安良多麻之」

登之可弊流麻泥（元細）「登之可敞流麻泥」

於毛保由流香聞

伊米尒波母等奈（元神）「伊米尒婆母等奈」

夜麻伎弊奈里氏（元細）「夜麻伎敞奈里氏」

相見祢婆（元細）「相見祢波」

三月廿日
忽兮

立夏四月、既に累日を經れども、しかも由いまだ霍公鳥の喧くを聞かず。因りて作れる恨の歌二首

安思比奇能夜麻毛知可吉乎保登等藝須都奇多都麻泥尓奈仁加吉奈可可奴

多麻尓奴久波奈多知波奈乎等毛之美思己能和我佐刀尓伎奈可受安流良之

霍公鳥者立夏之日來鳴必定又越中風土希有橙橘也因此大伴宿祢家持感發於懷聊裁此歌三月廿九日

二上山賦一首　此山者有射水郡也

伊美都河伯由伎米具礼流多麻久之氣布多我美山者波流波奈乃佐家流左加利尓安吉能葉乃尓保敝流等伎尓出立氏布里佐氣見礼婆可牟加良夜曾許婆多敷刀伎夜麻可良夜見我保之加良武須賣可未能須蘇未乃夜麻能之夫多尓能佐吉乃安里蘇尓阿佐奈藝尓餘須流之良奈美由敷奈藝尓美知久流之保能伊夜麻之尓多由流許登奈久伊尓之敝由伊麻乃乎都豆尓可久之許曾見流比登其等尓加氣氏之努波米之夫多尓能佐伎能安里蘇尓与須流奈美伊夜思久思

立夏四月、既に累日を經れども、しかも由いまだ霍公鳥の喧くを聞かず。因りて作れる恨の歌二首

三九八三 あしひきの 山も近きを 霍公鳥 月立つまでに 何か來鳴かぬ

三九八四 玉に貫く 花橘を ともしみし この我が里に 來鳴かずあるらし

霍公鳥は立夏の日來鳴くこと必定まれり。又越中の風土、橙橘のあること希なり。此に因りて、大伴宿禰家持、感を懷に發して聊此の歌を裁る。三月二十九日

二上山の賦一首　この山は射水の郡にあり

三九八五 射水河 い行き廻れる 玉くしげ 二上山は 春花の 咲け る盛に 秋の葉の にほへる時に 出で立ちて ふり放け見れば 神からや 許多貴き 山からや 見が欲しからむ 皇 神の 裾廻の山の 渋谿の 埼の荒礒に 朝なぎに 寄する 白波 夕なぎに 滿ち來る潮の いや増しに 絶ゆること無く 古ゆ 今の現に かくしこそ 見る人ごとに 懸けて偲ばめ

三九八六 渋谿の埼の荒礒に寄する波いやしくしくに古念ほゆ

伊美都河伯（元）「伊美都河泊」
波奈多知波奈乎
佐家流左加利尓
安吉能葉乃（元類）「安吉乃葉乃」
尓保敝流等伎尓
出立氏
伊尓之敝由
加氣氏之努波米

久尓伊尓之敝於母保由

多麻久之氣敷多我美也麻尓鳴鳥能許惠乃孤悲思吉登岐波伎尓家里

右三月卅日依興作之大伴宿祢家持

四月十六日夜裏遙聞霍公鳥喧懽歌一首

奴婆多麻乃都奇尓牟加比氏保登等藝須奈久於登波流流氣之佐刀騰保美可聞

右大伴宿祢家持作之

大目秦忌寸八千嶋之舘餞守大伴宿祢家持宴歌二首

奈呉能宇美能意吉都之良奈美志苦思苦尓於毛保要武可母多知和可礼奈婆

和我勢故波多麻尓母我毛奈手尓麻伎氏見都追由可牟乎於吉氏伊加婆乎思

右守大伴宿祢家持以正税帳須入京師仍作此歌聊陳相別之嘆　四月廿日

遊覧布勢水海賦一首　并短歌　此海者有射水郡礪江村也

物能乃敷能夜蘇等母乃乎能於毛布度知許己呂也良武等宇麻奈米氏宇知久知夫利乃之良奈美能安里蘇

三九八七 玉くしげ 二上山に 鳴く鳥の 聲の戀しき 時は來にけり

右は、三月三十日に興に依りて作れる。大伴宿禰家持

四月十六日、夜の裏に、遙に霍公鳥の喧くを聞きて、懐を述ぶる歌一首

三九八八 ぬばたまの 月に向ひて 霍公鳥 鳴く音はるけし 里遠みかも

右は、大伴宿禰家持の作れる。

大目秦忌寸八千島の館にて、守大伴宿禰家持を餞する宴の歌二首

三九八九 奈呉の海の 沖つ白波 しくしくに 念ほえむかも 立ち別れなば

三九九〇 我が夫子は 玉にもがもな 手に纏きて 見つつ行かむを 置きて往かば惜し

右は、守大伴宿禰家持、正税帳を以ちて京師に入らむとす。仍りて此の歌を作り、聊相別るる歎を陳ぶ。四月二十日

布勢の水海に遊覧する賦一首　并に短歌　此の海は射水の郡礪江の村にあり

三九九一 ものの ふの 八十伴の緒の 思ふどち 心遣らむと 馬竝めて うちくちぶりの 白波の 荒礒に寄する 渋谿の 埼徘

多知和可礼奈婆（元）「多知和可礼奈波」
和我勢故波（元類）「和加勢故波」
手尓麻伎氏
於吉氏伊加婆乎思
相別之嘆
宇麻奈米氏

尒与須流之夫多尒能佐吉多母登保理麻都太要能奈
我波麻須義氐宇奈比河波伎欲吉勢其等尒宇加波多
知可由吉加久遊岐見都礼騰母曾許母安加尒等布勢
能宇旅尒布祢宇氣須惠氐於伎敞許藝邊尒己伎見礼
婆奈藝左尒波安遲牟良佐和伎之麻未尒波許奴礼波
奈左吉許己婆久毛見乃佐夜氣吉加多麻久之氣布多
我旅夜麻尒波布都多能由伎波和可礼受安里我欲比
伊夜登之能波尒於母布度知可久思安蘇婆牟異麻母
見流其等

布勢能宇美能意枳都之良奈美安利我欲比伊夜登偲
能波尒見都追思奴播牟

右守大伴宿祢家持作之　四月廿四日

敬和遊覽布勢水海賦一首　并一絕

布治奈美波佐岐弖知里尒伎宇能波奈波伊麻曾佐可
理等安之比奇能夜麻尒毛野尒毛保登等藝須奈伎之
等与米婆宇知奈妣久許己呂毛之努尒曾己乎之母宇
良胡非之美等於毛布度知宇麻宇知牟礼弖多豆佐波
理伊泥多知美礼婆伊美豆河伯美奈刀能須登利安佐

徊り　松田江の　長濱過ぎて　宇奈比河　清き瀬ごとに　鵜
河立ち　か往きかく往き　見つれども　そこも飽かにと　布
勢の海に　船浮け居ゑて　沖邊榜ぎ　邊に榜ぎ見れば　渚に
は　あぢむら騷き　島廻には　木末花咲き　許多も　見の清
けきか　玉くしげ　二上山に　延ふ蔦の　行きは別れず　あ
り通ひ　いや毎年に　思ふどち　かくし遊ばむ　今も見る如

三九九二　布勢の海の沖つ白波在り通ひいや毎年に見つつ偲ばむ

右は、守大伴宿禰家持の作れる。四月二十四日

敬みて布勢の水海に遊覽する賦に和ふる一首　并に一絕

三九九三　藤浪は　咲きて散りにき　卯の花は　今ぞ盛と　あしひきの
山にも野にも　霍公鳥　鳴きし響めば　うち靡く　心もしの
に　そこをしも　うら戀しみと　思ふどち　馬うち群れて
携はり　出で立ち見れば　射水河　湊の洲鳥　朝なぎに　潟
に求食し　潮滿てば　妻喚び交す　ともしきに　見つつ過ぎ

奈我波麻須義氐
布祢宇氣須惠氐於伎敞許藝
見都追思奴播牟
佐岐弖知里尒伎
宇麻宇知牟礼弖
伊美豆河伯（元神）「伊美豆河泊」

奈藝尒可多尒安佐里之思保美弖婆都麻欲妣可波須
等母之伎尒美都追須疑由伎之夫多尒能安利蘇乃佐
伎尒於枳追奈美余勢久流多麻母可多与理尒可都良
尒都久理伊毛我多米氐尒麻吉母知弖宇良具波之布
勢能美豆宇旅尒阿麻夫祢尒麻可治加伊奴吉之路多
倍能蘇泥布理可邊之阿登毛比弖和賀己藝由氣婆乎
布能佐伎波奈知利麻我比奈伎佐尒波阿之賀毛佐和
伎佐射礼奈美多知弖毛爲弖母己藝米具利美礼登母
安可受安伎佐良婆毛美知能等伎尒波流佐良婆波奈
能佐可利尒可毛加久母伎美我麻尒麻等可久之許曾
美母安吉良米〻多由流比安良米也

之良奈美能与世久流多麻毛余能安比太母都藝弖民
仁許武吉欲伎波麻備乎

右椽大伴宿祢池主作　四月廿六日追和

四月廿六日椽大伴宿祢池主之舘餞税帳使守大伴宿祢
家持宴歌并古歌四首

多麻保許乃美知尒伊泥多知和可礼奈婆見奴日佐麻
祢美孤悲思家武可母　一云不見日久旅戀之家牟加母

行き　澁谿の　荒礒の埼に　沖つ波　寄せ來る玉藻　片寄り
に　蘰に作り　妹がため　手に纏き持ちて　うらぐはし　布
勢の水海に　海人船に　眞楫かい貫き　白栲の　袖振り反し
率ひて　我が榜ぎ行けば　乎布の埼　花散りまがひ　渚には
葦鴨騷き　さざれ波　立ちても居ても　榜ぎ廻り　見れども
飽かず　秋さらば　黃葉の時に　春さらば　花の盛に　かも
かくも　君がまにまと　かくしこそ　見も明らめめ　絕ゆる
日あらめや

三九九四　白波の寄せくる玉藻世の間も續ぎて見に來む清き濱傍を

右は、椽大伴宿禰池主の作れる。四月二十六日追ひて和ふる

四月二十六日、椽大伴宿禰池主の館にて、税帳使守大伴
宿禰家持を餞する宴の歌、并に古歌四首

三九九五　玉桙の道に出で立ち別れなば見ぬ日さまねみ戀しけむかも

一に云ふ、見ぬ日久しみ戀しけむかも

思保美弖婆
都麻欲妣可波須（元類）「都麻欲比可波須」
安利蘇乃佐伎尒
氐尒麻吉母知弖
布勢能美豆宇旅尒（神類）「布施能美豆宇旅尒」
蘇泥布理可邊之（元細）「蘇泥布里可邊之」
阿登毛比弖
波奈知利麻我比（元神）「婆奈知利麻我比」
多知弖毛爲弖母
都藝弖民仁許武
餞税帳使
見奴日佐麻祢美

右一首大伴宿祢家持作之

和我勢古我久尒敞麻之奈婆保等登藝須奈可牟佐都
奇波佐夫之家牟可母

右一首介内藏忌寸繩麿作之

安礼奈之等奈和備和我勢故保登等藝須奈可牟佐都
奇波多麻乎奴香佐祢

右一首守大伴宿祢家持和

石川朝臣水通橘歌一首

和我夜度能花橘乎波奈其米尒多麻尒曾安我奴久麻
多婆苦流之美

右一首傳誦主人大伴宿祢池主云尒

守大伴宿祢家持舘飲宴歌一首　四月廿六日

美夜故敞尒多都日知可豆久安久麻且尒安比見而由
可奈故布流比於保家牟

立山賦一首　并短歌　此立山者有新川郡也

安麻射可流比奈尒名可加須古思能奈可久奴知許登
其等夜麻波之母之自尒安礼登毛加波ゝ之母佐波尒
由氣等毛須賣加未能宇之波伎伊麻須尒比可波能曾

三九九六我が夫子が國へましなば霍公鳥鳴かむ五月はさぶしけむかも

右の一首は、大伴宿禰家持の作れる。

三九九七吾なしとな侘び我が夫子霍公鳥鳴かむ五月は玉を貫かさね

右の一首は、介内藏忌寸繩麻呂の作れる。

三九九八我が屋戸の花橘を花ごめに玉にぞ吾が貫く待たば苦み

右の一首は、傳へ誦めるは主人大伴宿禰池主しか云へり。

守大伴宿禰家持の館にて飲宴する歌一首　四月二十六日

三九九九京方に立つ日近づく飽くまでに相見て行かな戀ふる日多けむ

立山の賦一首　并に短歌　此の立山は新川の郡にあり

四〇〇〇天離る　鄙に名懸かす　越の中　國内ことごと　山はしも
繁にあれども　川はしも　多に行けども　皇神の　領き坐す
新川の　その立山に　常夏に　雪降り敷きて　帶ばせる　可

久尒敞麻之奈婆

石川朝臣水通（元細）石河朝臣水通」

美夜故敞尒
安久麻且尒

此立山者有新川郡也（元神）「此山者有新河郡也」

多加比河の　清き瀬に　朝夕ごとに　立つ霧の　思ひ過ぎめ
や　あり通ひ　いや毎年に　外のみも　ふり放け見つつ　萬
代の　語ひ草と　いまだ見ぬ　人にも告げむ　音のみも　名
のみも聞きて　羨しぶるがね

四〇〇一立山に降り置ける雪を常夏に見れども飽かず神からならし

四〇〇二可多加比の河の瀬清く行く水の絕ゆることなくあり通ひ見む

四月二十七日、大伴宿禰家持の作れる。

敬和立山の賦に和ふる一首　并に一絕

四〇〇三朝日さし　背向に見ゆる　神ながら　御名に帶ばせる　白雲
の　千重を押し別け　天そそり　高き立山　冬夏と　分くこ
ともなく　白栲に　雪は降り置きて　古ゆ　あり來にければ
凝しかも　巖の神さび　たまきはる　幾代經にけむ　立ちて
居て　見れども奇し　峯高み　谷を深みと　落ち激つ　清き
河内に　朝去らず　霧立ち渡り　夕されば　雲居棚引き　雲

由伎布理之伎且
於婆勢流（元神）「於波勢流」

余增能未母（細温）「余曾能未母」

名能未母伎吉氏（元細）「名能未毛伎吉氏」

由久美豆能

遊吉波布里於吉且

多知氏爲且

等於知多藝都吉欲伎可敷知尒安佐左良受綺利多知
和多利由布佐礼婆久毛爲多奈毗吉久毛爲奈須己許
呂毛之努尒多都奇理能於毛比須具佐受由久美豆乃
於等母佐夜氣久与呂豆余尒伊比都藝由可牟加波之
多要受波

多知夜麻尒布理於家流由伎能等許奈都尒氣受豆和
多流波可無奈我良等曾
於知多藝都可多加比我波能多延奴期等伊麻見流比
等母夜麻受可欲波牟

右椽大伴宿祢池主和之　四月廿八日

入京漸近悲情難撥述懐一首　并一絕

可伎加蘇布敷多我美夜麻尒可牟佐備豆多氏流都我
能奇毛等母延毛於夜自得伎波尒波之伎与之和我世
乃伎美乎安佐左良受安比豆許登騰比由布佐礼婆手
多豆佐波利豆伊美豆河波吉欲伎可布知尒伊泥多知
豆和我多知旅礼婆安由能加是伊多久之布氣婆美奈
刀尒波之良奈美多可旅都麻欲夫等須騰理波佐和久
安之可流等安麻乃乎夫祢波伊里延許具加遅能於等

居なす　心もしのに　立つ霧の　思ひ過さず　行く水の　音
も清けく　萬代に　言ひ續ぎ行かむ　河し絶えずば

立山に降り置ける雪の常夏に消ずてわたるは神ながらとぞ
多流波可無奈我良等曾

加波之多要受波（元神）「加婆之多要受波」

布理於家流由伎能氣受豆和多流波

於知多藝都可多加比我波能多延奴期等伊麻見流比

可牟佐備豆多氏流都我能奇

於伎豆伊加婆乎思（元細）「於伎豆伊加波乎志」

和我勢故波（元類）「和我勢故婆」

保登等伎須

許惠尒安倍奴吉

手尒麻伎豆由可牟

四月卅日

生別悲兮（元京）「生別悲号」

安遠途与之

許等登理毛知豆

多可之曾己乎之毛安夜尒登母志美之怒比都追安蘇
夫佐香理乎須賣呂伎能乎須久尒奈礼婆美許登母知
多知和可礼奈婆於久礼多流吉民婆安礼騰母多麻保
許乃美知由久和礼播之良久毛能多奈妣久夜麻乎伊
波祢布美古要敞奈利奈婆孤悲之家久氣乃奈我家牟
曾則許母倍婆許己呂志伊多思保等登藝須許惠尒安
倍奴久多麻尒母我手尒麻吉毛知豆安佐欲比尒見都
追由可牟乎於伎豆伊加婆乎思
和我勢故波多麻尒母我毛奈保登等伎須許惠尒安倍
奴吉手尒麻伎豆由可牟

右大伴宿祢家持贈椽大伴宿祢池主　四月卅日

忽見入京述懐之作生別悲兮斷腸万廻怨緒難禁聊奉所
心一首　并二絕

安遠途与之奈良乎伎波奈礼阿麻射可流比奈尒波安
礼登和賀勢故乎見都追志乎礼婆於毛比夜流許等母
安利之乎於保伎美乃美許等可之古美乎須久尒能許
等登理毛知豆和可久佐能安由比多豆久利無良等理
能安佐太知伊奈婆於久礼多流阿礼也可奈之伎多妣
ば　後れたる　君はあれども　玉桙の　道行く我は　白雲の
棚引く山を　磐根踏み　越え隔りなば　戀しけく　けの長け
むぞ　そこ念へば　心し痛し　霍公鳥　聲にあへ貫く　玉に
もが　手に纏き持ちて　朝夕に　見つつ行かむを　置きて行
かば惜し

吉民婆安礼騰母

古要敞奈利奈婆（元細）「古要敞奈利奈波」

氣乃奈我家牟曾

手尒麻吉毛知豆

我が夫子は玉にもがもな霍公鳥聲にあへ貫き手に纏きて行か
むむ

右は、大伴宿禰家持の、椽大伴宿禰池主に贈れる。四月三十日

忽に京に入らむとして懐を述ぶる作を見る。生別の悲、
腸を斷つこと萬廻、怨緒禁め難し。聊所心を奉る一首
并に二絕

安遠途与之奈良乎伎波奈礼阿麻射可流比奈尒波安
礼登和賀勢故乎見都追志乎礼婆於毛比夜流許等母
安利之乎於保伎美乃美許等可之古美乎須久尒能許
等登理毛知豆和可久佐能安由比多豆久利無良等理
能安佐太知伊奈婆於久礼多流阿礼也可奈之伎多妣
夫子を　見つつし居れば　思ひ遣る　事もありしを　大王の
命かしこみ　食國の　事執り持ちて　若草の　脚帶手裝り
群鳥の　朝立ち去なば　後れたる　我や悲しき　旅に行く
君かも戀ひむ　念ふそら　安くあらねば　歎かくを　止めも

小由久伎美可母孤悲無於毛布蘇良夜須久安良祢婆
奈氣可久乎等騰米毛可祢氏見和多勢婆宇能婆奈夜
麻乃保等登藝須祢能未之奈可由安佐疑理能美太流
〻許己呂許登小伊泥豆伊波婆由遊思美刀奈美夜麻
多牟氣能可味小奴佐麻都里安我許比能麻久波之家
夜之吉美賀多太可乎麻佐吉久毛安里多母等保利都
奇多〻婆等伎毛可波佐受奈泥之故我波奈乃佐可里
小阿比見之米等曾
多麻保許乃美知能可未多知麻比波勢牟安賀於毛布
伎美乎奈都可之美勢余
宇良故非之和賀勢能伎美波奈泥之故我波奈小毛我
母奈安佐奈〻〻見牟

右大伴宿祢池主報贈和歌 五月二日

思放逸鷹夢見感悦作歌一首 并短歌

大王乃等保能美可度曾美雪落越登名小於敞流安麻
射可流比奈小之安礼婆山高美河登保之呂思野乎比
呂美久佐許曾之既吉安由波之流奈都能左加利等之
麻都等里鵜養我登母波由久加波乃伎欲吉瀬其等小

四〇〇九玉梓の道の神たち幣はせむ我が念ふ君をなつかしみせよ

四〇一〇うら戀し我が夫の君は瞿麥が花にもがもな朝朝見む

右は、大伴宿禰池主の報へ贈り和ふる歌 五月二日

放逸せる鷹を思ひ、夢に見て感悦して作れる歌一首 并に短歌

四〇一一大王の 遠の朝廷ぞ み雪降る 越と名に負へる 天ざかる
鄙にしあれば 山高み 河とほしろし 野を廣み 草こそ茂
き 鮎走る 夏の盛と 鳥つ鳥 鵜養が伴は 行く河の 清
き瀬ごとに 篝さし なづさひ上る 露霜の 秋に至れば

三四

かねて 見渡せば 卯の花山の 霍公鳥 哭のみし泣かゆ
朝霧の 亂るる心 言に出でて 言はばゆゆしみ 礪波山
手向の神に 幣奉り 我が乞ひ祈まく 愛しけやし 君が正
香を ま幸くも 在り徘徊り 月立たば 時もかはさず 瞿
麥が 花の盛に 相見しめとぞ

箏騰米毛可祢氏
宇能婆奈夜麻乃
祢能未之奈可由
（元神）「於能未之奈可由」
許登小伊泥豆
伊波婆由遊思美
（元細）「伊婆〻由遊思美」

多麻保許乃（元）
「多麻保許能」
美知能可未多知
（元神）「美知能可味多知」

越登名小於敞流
奈都能左加利等
（元神）「奈都能左可利等」
伎欲吉瀬其等小
（元類）「伎欲吉瀬其登小」

可賀里左之奈豆左比能保流露霜乃安伎小伊多礼波
野毛佐波小等里須太家里等麻須良乎能登母伊射奈
比豆多加波之母安麻多安礼等母矢形尾乃安我大黒
小 大黒者蒼鷹之名也 之良奴里能鈴登里都氣豆朝獵小伊保都登
里多氏暮獵小知登理布美多氏於敞其等途由流須許
等奈久手放毛乎知母可夜須伎許礼乎於伎氏麻多波
安里我多之左奈良敞流多可波奈家牟等情小波於毛
比保許里豆惠麻比都追和多流安比太小多夫礼多流
之許都於吉奈乃許等太小母吾小波都氣受等乃具母
利安米能布流日乎等我理須等名乃未乎能里豆三嶋
野乎曾我比小見都追二山上登妣古要氏久母我久理
可氣理伊小伎等可敞理伎豆之波夫礼都具礼呼久餘
思乃曾許小奈家礼婆伊敷須敞能多騰伎乎之良小心
小波火佐倍毛要都追於母比孤悲伊伎豆吉安麻利氣
太之久毛安布許等安里也等安之比奇能乎氏母許乃
毛小等奈美波里母利敞乎須惠氏知波夜夫流神社小
氏流鏡之都小等里蘇倍己比能美豆安我麻都等吉小
乎登賣良我伊米小都具良久奈我古敷流曾能保追多

野も多に 鳥多集けりと ますらをの 伴いざなひて 鷹は
しも 數多あれども 矢形尾の 我が大黒に 大黒は蒼鷹の名なり 白塗の
鈴取り附けて 朝獵に 五百つ鳥立て 夕獵に 千鳥踏み立
て 追ふ毎に 発すことなく 手放れも 還來もか易き こ
れを除きて 又はあり難し さならへる 鷹は無けむと 情
には 思ひ誇りて 笑ひつつ 渡る間に 狂れたる 醜つ翁
の 言だにも 吾には告げず との曇り 雨の降る日を 鷹
獵すと 名のみを告りて 三島野を 背向に見つつ 二山の
上飛び越えて 雲隱り 翔り去にきと 歸り來て 咳れ告ぐ
れ 招くよしの そこに無ければ 言ふすべの たどきを知
らに 心には 火さへ燃えつつ 思ひ戀ひ 息衝き餘り け
だしくも 逢ふことありやと あしひきの 彼面此面に 鳥
網張り 守部を居ゑて ちはやぶる 神の社に 照る鏡 倭
文に取り添へ 乞ひ祈みて 吾が待つ時に 嬢子らが 夢に
告ぐらく 汝が戀ふる その秀つ鷹は 松田江の 濱行き暮

登母伊射奈比豆
之良奴里能（元神）「之良奴里奴」
鈴登里都氣豆
伊保都登里多氏
知登理布美多氏
於敞其等途
許祇乎於伎氏
左奈良敞流
於毛比保許祇里豆

名乃未乎能里豆
二山上登妣古要氏（元）「二上山登妣古要氏」
可敞理伎豆
伊敷須敞能

伊伎豆吉安麻利（類神）「伊岐豆吉安麻利」
乎氏母許乃毛小
母利敞乎須惠氏

氏流鏡
己比能美豆

加波麻都太要乃波麻由伎具良之都奈之等流比美乃
江過豆多古能之麻等妣多毛登保里安之我母乃須太
久舊江尒乎等都日毛伎能敷母安里追知加久安良婆
伊麻布都可太米等保久安良婆奈奴可乃乎知波須疑
米也母伎奈牟和我勢故祢毛許呂尒奈孤悲曾余等曾
伊麻尒都氣都流

矢形尾能多加乎手尒須惠美之麻野尒可良奴日麻祢
久都奇曾倍尒家流

二上能乎豆母許能母尒安美佐之豆安我麻都多可乎
伊米尒都氣追母

麻追我儛里之比尒豆安礼可母佐夜麻太乃乎治我其
日尒母等米安波受家牟

情尒波由流布許等奈久須加能夜麻須加奈久能未也
孤悲和多利奈牟

右射水郡古江村取獲蒼鷹形容美麗鷙雉秀群也於
時養吏山田史君麿調試失節野獐乖候搏風之翅高
翔匿雲腐鼠之餌呼留靡驗於是張設羅網窺乎非常
奉幣神祇恃乎不虞也臭以夢裏有娘子喻曰使君勿
作苦念空費精神放逸彼鷹獲得未幾矣哉須臾覺寤
有悦於懐因作却恨之歌式旌感信守大伴宿祢家持
九月廿六日作也

高市連黒人歌一首 年月不審

賣比能野能須〻吉於之奈倍布流由伎尒夜度加流家
敷之可奈之久於毛倍遊

右傳誦此歌三國眞人五百國是也

東風（越俗語東風謂之安由乃可是也）伊多久布久良之奈與乃安麻能都利
須流乎夫祢許藝可久流見由

美奈刀可是佐牟久布久良之奈與乃江尒都麻欲妣可
波之多豆左波尒奈久 一云多豆佐和久奈里

安麻射可流比奈等毛之流久許己太久母之氣伎孤悲
可毛奈具流日毛奈久

故之能宇美能信濃（濱名也）乃波麻乎由伎久良之奈我伎
波流比毛和須礼豆於毛倍也

右四首廿年春正月廿九日大伴宿禰家持

礪波郡雄神河邊作歌一首

乎加未河伯久礼奈爲尒保布乎等賣良之葦附（水松之類）等
し鯛漁る 氷見の江過ぎて 多古の島 飛び徘徊り 葦鴨
の 多集く舊江に 一昨日も 昨日も在りつ 近くあらば
今二日だめ 遠くあらば 七日のをちは 過ぎめやも 來な
む吾が夫子 懇に な戀ひそよとぞ いまに告げつる

三六

矢形尾の鷹を手に据ゑ三島野に獵らぬ日まねく月ぞ經にける

二上の彼面此面に網さして吾が待つ鷹を夢に告げつる

松反りしひにてあれかもさ山田の翁が其の日に求め逢はずけむ

情にはゆるぶことなく須加の山すがなくのみや戀ひ渡りなむ

右は、射水の郡古江の村に蒼鷹を取り獲たり。形容美麗にして雉を鷙ること群に秀でたり。時に養吏山田史君麻呂、調試節を失ひ、野獐候に乖く。搏風の翅高く翔りて雲に匿れ、腐鼠の餌呼び留むるに驗靡し。ここに羅網を張り設けて非常を窺ひ、神祇に奉幣して不虞を恃む。粤に夢の裏に娘子あり。喩して曰はく、使君苦念を作して空しく精神を費すこと勿れ、放逸せる彼の鷹、獲り得むこと近からむかといふ。須臾に覺き寤め、懐に悦あり。因りて恨を却くる歌を作りて、式ちて感信を旌す。守大伴宿禰家持 九月二十六日作れる

高市連黒人の歌一首 年月審らず

婦負の野の薄押し靡べ降る雪に宿借る今日し悲しく思はゆ

右は、此の歌を傳へ誦めるは、三國眞人五百國なり。

東風（越の俗語に東風をあゆのかぜといへり）伊多久布久良之奈與乃安麻能都利
いたく吹くらし奈與の海人の釣する小舟榜ぎ隱る見ゆ

美奈刀可是佐牟久布久良之奈與乃江尒都麻欲妣可
みなと風寒く吹くらし奈與の江に妻喚び交し鶴さはに鳴く

一に云ふ、たづさわくなり

安麻射可流比奈等毛之流久許己太久母之氣伎孤悲
可毛奈具流日毛奈久
天ざかる鄙とも著くここだくも繁き戀かも和ぐる日も無く

故之能宇美能信濃（濱名也）乃波麻乎由伎久良之奈我伎
波流比毛和須礼豆於毛倍也
越の海の信濃の名の濱を行き暮し長き春日も忘れて念へや

右の四首は、二十年春正月二十九日、大伴宿禰家持

礪波の郡、雄神河の邊にて作れる歌一首

乎加未河伯久礼奈爲尒保布乎等賣良之葦附（水松之類）採ると瀬に立たすらし

麻都太要乃（元神）「麻追太要乃」
比美乃江過豆
等妣多毛登保里（類）「等比多毛登保里」
安之我母乃（元類）「安之我母能」
知加久安良婆
伊麻布都可太米（類温）「伊麻布都可太未」
奈奴可乃乎知波（元類）「奈奴可乃宇知婆」
伊麻尒都氣都流
乎豆母許能母尒
安美佐之豆
麻追我儛里
之比尒豆安礼可母
形容（元神）「形」
秀群也
乖候
搏風之翅
腐鼠之餌（元神）
「腐鼠之餌」
張設（神類）「恨設」
奉幣
恃乎不虞也
臭以
喩曰
空費精神（元類）「空費情邪」
彼鷹（元神）
覺寤（元類）「覺寐」
此歌
謂之（元細）「謂」
美奈刀可是
都麻欲妣可波之（元類）「都麻欲比可波之」
和須礼豆於毛倍也
廿年（元）「天平廿年」
乎加未河伯

流登湍尒多〻須良之

婦負郡鸕坂河邊作歌一首

宇佐可河伯和多流瀨於保美許乃安我馬乃安我枳乃
美豆尒伎奴〻礼尒家里

見潛鸕入作歌一首

賣比河波能波夜伎瀨其等尒可我里佐之夜蘇登毛乃
乎波宇加波多知家里

新川郡渡延槻河時作歌一首

多知夜麻乃由吉之久良之毛波比都奇能可波能和多
理瀨安夫美都加須毛

赴參氣太神宮行海邊之時作歌一首

之乎路可良多太古要久礼婆波久比能海安佐奈藝思
多理船梶母我毛

能登郡從香嶋津發船射熊來村往時作歌二首

登夫佐多氏船木伎流等伊布能登乃嶋山今日見者許
太知之氣思物伊久代神備曾

香嶋欲里久麻吉乎左之氏許具布祢能可治等流間奈
久京師之於母保由

四〇二三 鸕坂河渡る瀬多みこの我が馬の足掻の水に衣ぬれにけり

四〇二三 婦負の郡、鸕坂河の邊にて作れる歌一首

四〇二三 婦負河の早き瀨ごとに簀さし八十伴の男は鵜河立ちけり

四〇二四 立山の雪し來らしも延槻の河の渡瀨鐓浸かすも

四〇二四 文 多知夜麻乃由吉之久良之毛波比都奇能可波能和多

新川の郡、延槻河を渡る時作れる歌一首

四〇二五 之乎路から直越え來れば羽咋の海朝なぎしたり船楫もがも

氣太の神宮に赴き參り海邊を行きし時作れる歌一首

四〇二六 鳥總立て船木伐るといふ能登の島山今日見れば木立繁しも幾代神びぞ

能登の郡、香島の津より發船して、熊來の村を射して往きし時作れる歌二首

四〇二七 香島より熊來をさして榜ぐ船の楫取る間なく京師し念ほゆ

射熊來村

登夫佐多氏

船木伎流等伊布能登乃嶋山今日見者許太知之氣思物伊久代神備曾

香嶋欲里久麻吉乎左之氏許具布祢能可治等流間奈久京師之於母保由

氣太神宮（元）「氣比太神宮」

新川郡

鸕坂河邊（元）「渡鸕坂河邊時」

作歌一首（元細）「作一首」

宇佐可河伯伎奴〻礼尒家里（元神）「伎努〻礼尒家里」

鳳至郡渡饒石河之時作歌一首

伊毛尒安波受比左思久奈里奴尒藝之河波伎欲吉瀨
其登尒美奈宇良波倍豆奈

從珠洲郡發船還治布之時泊長濱灣仰見月光作歌一首

珠洲能宇美尒安佐奴良伎之豆許藝久礼婆奈我波麻
能宇良尒都奇氏理尒家里

右件歌詞者依春出擧巡行諸郡當時當所屬目作之

大伴宿祢家持

怨鶯晩哢歌一首

宇具比須波伊麻波奈可牟等可多麻氏婆可須美多奈
妣吉都奇波倍尒都追

造酒歌一首

奈加等美乃敷刀能里等其等伊比波良倍安賀布伊能
知毛多我多米尒奈礼

右大伴宿祢家持作之

萬葉集卷第十七

四〇二八 妹に逢はず久しくなりぬ饒石河清き瀨ごとに水占はへてな

鳳至の郡、饒石河を渡りし時作れる歌一首

四〇二九 珠洲の郡より發船して治布に還りし時、長濱の灣に泊てて月光を仰ぎ見て作れる歌一首

珠洲の海に朝びらきして榜ぎ來れば長濱の灣に月照りにけり

右は、件の歌詞は、春の出擧に依りて諸郡を巡行す。當時當所屬目して作れる。大伴宿禰家持

四〇三〇 鶯は今は鳴かむと片待てば霞たなびき月は經につつ

鶯の晩く哢くを怨む歌一首

酒を造る歌一首

四〇三一 中臣の太祝詞言ひ祓へ贖ふ命も誰がために汝

敷刀能里等其等伊比波良倍安賀布伊能知毛多我多米尒奈礼

右は、大伴宿禰家持の作れる。

萬葉集卷の第十七

治布（元）「太沼郡」

安佐妣良伎之豆（元類）「安佐比良伎之豆」

奈我波麻能宇良尒（元神）「奈我婆麻能宇良尒」

都奇氏理尒家里當時當所（元）「當時所」

屬目（元神）「屬自」

可多麻氏婆（元類）「可多麻氏波」

美奈宇良波倍豆奈

仰見

安佐妣良伎之豆（元類）「安佐比良伎之豆」

奈我波麻能宇良尒（元神）「奈我婆麻能宇良尒」

都奇氏理尒家里當時當所（元）「當時所」

屬目（元神）「屬自」

敷刀能里等其等（元神）

安賀布伊能知毛（元神）「安加布伊能知毛」

天平廿年春三月廿三日左大臣橘卿使田邊史福麻呂饗越中守大伴家持舘時新作幷誦古詠各述心緒歌四首

于時期之明日將遊覽布勢水海仍述懷各作歌八首

廿五日大伴宿祢家持往布勢水海道中馬上口号二首

至水海遊覽時各述懷作歌六首

椽久米朝臣廣縄舘宴饗田邊史福麻呂歌四首

太上皇御在於難波宮時歌七首

左大臣橘宿祢歌一首

御製和歌一首

御製歌一首

河內女王奏歌一首

粟田女王奏歌一首

御船以綱手泝江遊宴時史福麻呂傳誦歌二首

後追和橘大伴家持歌二首

山上臣射水郡驛舘之屋柱題着歌一首

萬葉集卷の第十八

天平二十年春三月二十三日、左大臣橘卿の使田邊史福麻呂を、越中守大伴宿禰家持の館に饗せし時、新しく作り幷せて古き詠を誦みて各心緒を述ぶる歌四首

時に明日を期りて布勢の水海に遊覽せむとし、仍りて懷を述べて各作れる歌八首

二十五日、大伴宿禰家持の、布勢の水海に往く道中に、馬の上にて口號せる二首

水海に至りて遊覽せし時、各懷を述べて作れる歌六首

太上皇の難波の宮に御在しし時の歌七首

椽久米朝臣廣縄の館の宴に、田邊史福麻呂を饗せる歌四首

左大臣橘宿禰の歌一首

御製の、和へ給へる歌一首

御製の歌一首

河內女王の奏する歌一首

粟田女王の奏する歌一首

御船の綱手を以ちて江を泝りて遊宴し給ひし時、史福麻呂の傳へ誦める歌二首

後に橘に追ひて和ふる大伴家持の歌二首

山上臣の、射水の郡の驛館の屋の柱に題し著けたる歌一首

天平廿年
于時期之明日
至水海
椽久米朝臣廣縄
御製和歌
御製歌
山上臣（神細）「山上目」

四月一日橡久米朝臣廣縄館宴歌四首

先國師從舘欲入京設飲饌饗宴時主人大伴家持詠庭中牛麥花歌一首

大伴家持重作歌二首

三月十五日越前國椽大伴池主來贈歌三首

十六日越中守大伴家持報贈歌四首

姑大伴氏坂上郎女來贈越中守大伴家持歌二首

大伴家持報歌二首

又別所心歌一首

天平感寶元年五月五日饗東大寺占墾地使僧平榮時守大伴家持送酒歌一首

同九日諸僚會少目秦伊美吉石竹舘飲宴時造白合花縵捧贈賓客各賦此縵歌三首

十日大伴家持獨居幄裏遙聞霍公鳥喧作歌一首　并短歌

行英遠浦之日作歌一首

賀陸奥出金詔書歌一首　并短歌

幸行芳野離宮時儲作歌一首　并短歌

十四日大伴家持爲贈京家願眞珠歌一首　并短歌

十五日大伴家持教喩史生尾張少咋歌一首　并短歌

十七日大伴家持先妻不待夫君使自來時歌一首

廿三日大伴家持橘歌一首　并短歌

廿六日大伴家持詠庭中花作歌一首　并短歌

椽久米朝臣廣縄天平廿年附朝集使入京天平感寶元年閏五月廿七日還本任時守大伴家持作歌一首　并短歌

霍公鳥歌一首

廿八日大伴家持爲向京見貴人及相美人飲宴日述懷儲作歌二首

六月朔日晩頭守犬伴家持忽見雨雲氣作歌一首　短歌一絕

四日大伴家持賀雨落歌一首

七月七日大伴家持七夕歌一首　并短歌

越前國大椽大伴池主來贈戲歌四首

更來贈歌二首

天平勝寶元年十二月大伴家持詠雪月梅花歌一首

少目秦伊美吉石竹舘宴守大伴家持作歌一首

同二年正月二日於國廳給饗諸郡司時大伴家持作歌一首

敎喩
不待夫君使自來時歌　廿三日
守大伴家持
白合花縵　各賦此縵（神細）「賦此縵」
英遠浦（神細）「芙蓉浦」
賀陸奥出金詔書歌

五日、判官久米朝臣廣縄の館にて宴せし時、大伴家持の作れる歌一首

二月十一日、守大伴家持の、忽に風雨起りて、辭去することを得ずして作れる歌一首

天平廿年春三月廿三日左大臣橘家之使者造酒司令史田邊福麻呂饗于守大伴宿祢家持館爰作新歌幷便誦古詠各述心緒

奈呉乃宇美尓布祢之麻志可勢於伎尓伊泥旦奈美多知久夜等見底可敞利許牟

奈美多旦波奈呉能宇良未尓余流可比乃末奈伎孤悲尓曾等之波倍尓家流

奈呉能宇美尓之保能波夜非波安佐里之尓伊泥牟等多豆波伊麻曾奈久奈流

保等登藝須伊等布登伎奈之安夜賣具左加豆良尓藝武日許由奈伎和多礼

右四首田邊史福麻呂

于時期之明日將遊覽布勢水海仍述懷各作歌

伊可尓安安流布勢能宇良曾毛許己太久尓吉民我旅世武等和礼乎等登牟流

右一首田邊史福麻呂

乎敷乃佐吉許藝多母等保里比祢毛須尓美等母安久倍伎宇良尓安良奈久尓 一云伎美我等波須母

右の一首は、田邊史福麻呂

天平二十年春三月二十三日、左大臣橘家の使者造酒司令史田邊福麻呂を守大伴宿禰家持の館に饗しき。爰に新しき歌を作り幷せて便に古き詠を誦みて各心緒を述ぶる。

奈呉の海に船しまし借せ沖に出でて波立ち來やと見て歸り來む

波立てば奈呉の浦廻に寄る貝の間無き戀にぞ年は經にける

奈呉の海に潮のはや干ば求食しに出でむと鶴は今ぞ鳴くなる

霍公鳥厭ふ時なし菖蒲草蔓にきむ日此ゆ鳴き渡れ

右の四首は、田邊史福麻呂

時に明日を期りて布勢の水海に遊覽せむとし、仍りて懷を述べて各作れる歌

如何にある布勢の浦ぞも許多に君が見せむと我を留むる

右の一首は、田邊史福麻呂

乎敷の埼榜ぎ徘徊り終日に見とも飽くべき浦にあらなくに

一に云ふ、君が間はするに

田邊福麿（元）「田邊史福麿」
爰作新歌幷便誦古詠

奈美多旦波
奈呉能宇良未尓

之保能波夜非波
伊泥牟等多豆波（元神）「伊但牟等多豆波」
安夜賣具左
加豆良尓藝武日

伊可尓安安流

右一首守大伴宿祢家持

多麻久之氣伊都之可安氣牟布勢能宇美能宇良乎由
伎都追多麻母比利波牟
於等能未尒伎吉底目尒見奴布勢能宇良乎見受波能
保良自等之波倍奴等母
布勢能宇良乎由吉底之見弖婆毛母之綺能於保美夜
比等尒可多利都藝底牟
宇梅能波奈佐伎知流曾能尒和礼由可牟伎美我都可
比乎可多麻知我底良
敷治奈美能佐伎由久見礼婆保等登藝須奈久倍吉登
伎尒知可豆伎尒家里

右五首田邊史福麿

安須能比能敷勢能宇良未能布治奈美尒氣太之伎奈
可受知良之底牟可母 一頭云保等登藝須

右一首大伴宿祢家持和之

前件十首歌者廿四日宴作之

廿五日往布勢水海道中馬上口号二首

波萬部余里和我宇知由可波宇美邊欲里牟可倍母許

右の一首は、守大伴宿禰家持

四〇三八 玉くしげいつしか明けむ布勢の海の浦を行きつつ玉藻拾はむ

四〇三九 音のみに聞きて目に見ぬ布勢の浦を見ずば上らじ年は經ぬとも

四〇四〇 布勢の浦を行きてし見てばももしきの大宮人に語り繼ぎてむ

四〇四一 梅の花咲き散る園にわれ行かむ君が使を片待ちがてら

四〇四二 藤浪の咲き行く見れば霍公鳥鳴くべき時に近づきにけり

右の五首は、田邊史福麻呂

四〇四三 明日の日の布勢の浦廻の藤浪に蓋し來鳴かず散らしてむかも 一に頭に云ふ、ほととぎす

右の一首は、大伴宿禰家持の和ふる。

前の件の十首の歌は、二十四日の宴に作れる。

二十五日、布勢の水海に往く道中に、馬の上に口號せる二首

四〇四四 濱邊より我がうち行かば海邊より迎へも來ぬか海人の釣舟

由吉底之見弖婆（元類）「由伎底之見弖婆」

保等登藝須（元神）「保等登伎須」

奈久倍吉登伎尒（元細）「奈久倍伎登伎尒」

氣太之伎奈可受（元類）「氣太之伎奈可須」

波萬部余里

宇美邊欲里（元類）「宇美邊欲利」

奴可安麻能都里夫祢

於伎敞欲里美知久流之保能伊也麻之尒安我毛布支
見我旆不根可母加礼

至水海遊覽之時各述懷作歌

可牟佐夫流多流比女能佐吉許支米具利見礼登裳安
可受伊加尒和礼世牟

右一首田邊史福麿

多流比賣野宇良乎許藝都追介敷乃日波多努之久安
曾敞移比都支尒勢牟

右一首遊行女婦土師

多流比女能宇良乎許具不祢可治末尒母奈良野和藝
弊乎和須礼氐於毛倍也

右一首大伴家持

於呂可尒曾和礼波於母比之乎不乃宇良能安利蘇野
米具利見礼度安可須介利

右一首田邊史福麿

米豆良之伎吉美我伎麻佐婆奈家等伊比之夜麻保登
等藝須奈尒加伎奈可奴

四〇四五 沖邊より滿ち來る潮のいや増しに我が念ふ君が御船かも彼

水海に至りて遊覽せし時、各懷を述べて作れる歌

四〇四六 神さぶる垂姫の埼榜ぎめぐり見れども飽かず如何に我せむ

右の一首は、田邊史福麻呂

四〇四七 垂姫の浦を榜ぎつつ今日の日は樂しく遊べ言繼にせむ

右の一首は、遊行女婦土師

四〇四八 垂姫の浦を榜ぐ船楫間にも奈良の我家を忘れて念へや

右の一首は、大伴家持

四〇四九 おろかにぞ我は念ひし乎不の浦の荒礒のめぐり見れど飽かずけり

右の一首は、田邊史福麻呂

四〇五〇 めづらしき君が來まさば鳴けと言ひし山霍公鳥何か來鳴かぬ

安我毛布支見我

至水海

許支米具利

見礼登裳安可受

介敷乃日波

多努之久安曾敞

移比都支尒勢牟

宇良乎許具不祢

奈良野和藝弊乎（元神）「奈良野和藝敞乎」

吉美我伎麻佐婆

夜麻保登等藝須（元類）「夜麻保等登藝須」

右一首椽久米朝臣廣縄

多胡乃佐伎許能久礼之氣尓保登等藝須伎奈伎等余
米婆波太古非米夜母

右一首大伴宿祢家持

前件十五首歌者廿五日作之

椽久米朝臣廣縄之舘饗田邊史福麻呂宴歌四首

保登等藝須伊麻奈可受之旦安須古要牟夜麻尓奈久
等母之流思安良米夜母

右一首田邊史福麻呂

許能久礼尓奈里奴流母能乎保等登藝須奈尓加伎奈
可奴伎美尓安敞流等吉

右一首久米朝臣廣縄

保等登藝須許欲奈枳和多礼登毛之備乎都久欲尓奈
蘇倍曾能可氣母見牟

可敞流未能美知由可牟日波伊都波多野佐可尓蘇泥
布礼和礼乎事於毛波婆

右二首大伴宿祢家持

前件歌者廿六日作之

右一首、椽久米朝臣廣縄

四〇五一　多胡の埼木の暗茂に霍公鳥來鳴き響めばはだ戀ひめやも

四〇五二　霍公鳥今鳴かずして明日越えむ山に鳴くとも驗あらめやも

右の一首は、田邊史福麻呂

四〇五三　木の暗になりぬるものを霍公鳥何か來鳴かぬ君に逢へる時

右の一首は、久米朝臣廣縄

四〇五四　霍公鳥此よ鳴き渡れ燈火を月夜に比へその影も見む

四〇五五　可敞流廻の道行かむ日は五幡の坂に袖振れ吾をし念はば

右の二首は、大伴宿祢家持

前の件の歌は、二十六日作れる。

伎奈伎等余米婆（元）「伎奈伎等余米波」
波太古非米夜母

伊都婆多野（元類）「伊都波多野」
佐可尓蘇泥布礼（元類）「佐加尓蘇泥布礼」
和礼乎事於毛波婆（元神）「和礼乎事於毛婆婆」
前件歌者（元神）「前伴歌者」

太上皇御在於難波宮之時歌七首　清足姫天皇也

左大臣橘宿祢歌一首

保里江尓波多麻之可麻之乎大皇乎美敷祢許我牟登
可年旦之里勢婆

御製歌一首　和へ給へる

多萬之賀受伎美我久伊旦伊布保理江尓波多麻之伎
美旦〻都藝旦可欲波牟

或云多麻古伎之伎旦

右一首件歌者御船泝江遊宴之日左大臣奏并御製
御製歌一首

多知婆奈能登乎能多知婆奈夜都代尓母安礼波和須
礼自許乃多知婆奈乎

河內女王歌一首

多知婆奈能之多泥流尓波尓等能多旦天佐可旅豆伎
伊麻須和我於保伎美可母

粟田女王歌一首

都奇麻知旦伊敞尓波由可牟和我佐世流安加良多知
婆奈可氣尓見要都追

太上皇の難波の宮に御在しし時の歌七首　清足姫の天皇なり

左大臣橘宿祢の歌一首

保里江尓波多麻之可麻之乎大皇乎美敷祢許我牟登
可年旦之里勢婆

御製の歌一首　和へ給へる

多萬之賀受伎美我久伊旦伊布保理江尓波多麻之伎
美旦〻都藝旦可欲波牟

或は云ふ、玉きしきて

右の一首。件の歌は、御船の江を泝りて遊宴せし日、左大臣の奏せる并せて御製なり。

御製の歌一首

多知婆奈能登乎能多知婆奈夜都代尓母我礼波和須
礼自許乃多知婆奈乎

河內女王の歌一首

多知婆奈能之多泥流尓波尓等能多旦天佐可旅豆伎
伊麻須和我於保伎美可母

粟田女王の歌一首

都奇麻知旦伊敞尓波由可牟和我佐世流安加良多知
婆奈可氣尓見要都追

太上皇　清足姫天皇也

右一首

等乎能多知婆奈（類）「等乎能多知波奈」

右件歌者在於左大臣橘卿之宅肆宴御歌幷奏歌也

保里江欲里水乎妣吉之都追美布祢左須之津乎能登
母波加波能瀬麻宇勢
奈都乃欲波美知多豆多都之布祢尒能里可波乃瀬其
等尒佐乎左指能保礼

右件歌者　御船以綱手泝江遊宴之日作也傳誦之人田邊史福麻呂是也

後追和橘歌二首

等許余物能己能多知婆奈能伊夜日里尒和期大皇波
伊麻毛見流其等
大皇波等吉波尒麻佐牟多知婆奈能等能乃多知婆奈
比多底里尒之豆

右二首大伴宿祢家持作之

射水郡驛館之屋柱題着歌一首

安佐妣良伎伊里江許具奈流可治能於登乃都波良都
波良尒吾家之於母保由

右一首山上臣作不審名或云憶良大夫之男但其正名未詳也

右の件の歌は、左大臣橘卿の宅に在して、肆宴きこしめしし時の御歌幷せて奏せる歌なり。

四〇六一 堀江より水脈引きしつつ御船さす賤男の徒は河の瀬申せ

四〇六二 夏の夜は道たづたづし船に乗り河の瀬ごとに棹さし上れ

右の件の歌は、御船綱手を以ちて江を泝り遊宴し給ひし日作れる。傳へ誦める人は田邊史福麻呂なり。

後に追ひて和ふる橘の歌二首

四〇六三 常世物この橘のいや照りに我ご大皇は今も見る如

四〇六四 大皇は常磐に在さむ橘の殿のたちばな直照りにして

右の二首は、大伴宿禰家持の作れる。

射水の郡の驛館の屋の柱に題し著けたる歌一首

四〇六五 朝びらき入江榜ぐなる楫の音のつばらつばらに吾家し思ほゆ

右の一首は、山上臣の作れる。名を審にせず。或は云ふ、憶良大夫の男といへり。但し其の正名はいまだ詳ならず。

奏歌也（神福）「奏歌」

等能乃多知婆奈

都波良都波良尒

四月一日椽久米朝臣廣縄之舘宴歌四首

宇能花能佐久都奇多知奴保等登藝須伎奈吉等与米
余敷布美多里登母

右一首守大伴宿祢家持作之

敷多我美能夜麻尒許母礼流保等登藝須伊麻母奈加
奴香伎美尒伎可勢牟

右一首遊行女婦土師作之

乎里安加之母許余比波能麻牟保等登藝須安氣牟安
之多波奈伎和多良牟曾　二日は立夏の節に應る。故明旦喧かむといへり。

右一首守大伴宿祢家持作之

安須欲里波都藝豆伎許要牟保登等藝須比登欲能可
良尒古非和多流加母

右一首羽咋郡擬主帳能登臣乙美作

詠庭中牛麥花歌一首

比登母等能奈泥之故宇惠之曾能許己呂多礼尒見世
牟等於母比曾米家牟

右先國師從僧清見可入京師因設飲饌饗宴于時主人大伴宿祢家持作此歌詞送酒清見也

四〇六六 卯の花の咲く月立ちぬ霍公鳥來鳴き響めよ含みたりとも

右の一首は、守大伴宿禰家持の作れる。

四〇六七 二上の山にこもれる霍公鳥今も鳴かぬか君に聞かせむ

右の一首は、遊行女婦土師の作れる。

四〇六八 居り明しも今宵は飲まむ霍公鳥明けむあしたは鳴き渡らむぞ　二日は立夏の節に應る。故明旦喧かむといへり。

右の一首は、守大伴宿禰家持の作れる。

四〇六九 明日よりは繼ぎて聞えむ霍公鳥一夜の故に戀ひ渡るかも

右の一首は、羽咋の郡の擬主帳能登臣乙美の作れる。

庭中の牛麥の花を詠める歌一首

四〇七〇 一本のなでしこ植ゑし其の心誰に見せむと思ひ初めけむ

右は、先の國師の從僧清見京師に入らむとす。因りて飲饌を設けて餞宴しき。時に主人大伴宿禰家持、此の歌詞を作りて、酒を清見に送れるなり。

敷布美多里登母

伎美尒伎可勢牟（類京）「伎美尒妓可勢牟」

乎里安加之母

保等登藝須

安須欲里波

擬主帳能登臣乙美作

牛麥花歌

因設飲饌（元神）「日設飲饌」

之奈射可流故之能吉美良等可久之許曾楊奈疑可豆
良枳多努之久安蘇婆米
右郡司已下子弟已上諸人多集此會因守大伴宿祢
家持作此歌也
奴婆多麻能欲和多流都奇乎伊久欲布等余美都追伊
毛波和礼麻都良牟曾
右此夕月光遲流和風稍扇卽因屬目聊作此歌也
越前國椽大伴宿祢池主來贈歌三首
以今月十四日到來深見村望拜彼北方常念芳德何日能
休兼以隣近忽增戀□加以先書云暮春可惜促膝未期生
別悲兮夫復何言臨紙悽斷奉狀不備
三月十五日大伴宿祢池主
一古人云
都奇見礼婆於奈自久尒奈里夜麻許曾婆伎美我安多
里乎敞太弖多里家礼
一屬物發思
櫻花今曾盛等雖人云我佐不之毛支美止之不在者
一所心歌

四〇七一 しなざかる越の君らとかくしこそ楊蘰き樂しく遊ばめ
右は、郡司已下子弟已上諸人多く此の會に集ひき。因りて守大伴宿禰家持此の歌を作れり。
四〇七二 ぬばたまの夜渡る月を幾夜經と數みつつ妹は我待つらむぞ
右は、此の夕、月の光遲く流れて和風稍扇ぐ。卽屬目に因りて、聊此の歌を作れり。
越前の國の椽大伴宿禰池主の、來贈れる歌三首
今月十四日を以ちて深見の村に到來し、彼の北方を望拜す。常に芳德を念ふこと、いづれの日か能く休まむ。兼ねて隣近なるを以ちて、忽に戀緒を增す。加以先の書に云ふ。暮春惜む可し。膝を促くることいまだ期せずといへり。生別の悲、それ復何とか言はむ。紙に臨みて悽斷、狀を奉ること不備なり。
三月十五日、大伴宿禰池主
一、古人の云へる
四〇七三 月見れば同じ國なり山こそは君が邊を隔てたりけれ
一、物に屬きて思を發せる
四〇七四 櫻花今ぞ盛と人は云へど我はさぶしも君とし在らねば
一、所心の歌

故之能吉美良等
子弟
奴婆多麻能（元類）「奴波多麻能」
忽增戀□（古義）「忽增戀」
生別悲兮（矢京）「生別悲号」
夜麻許曾婆
我佐不之毛
一所心歌

安必意毛波受安流良牟伎美乎安夜思苦毛奈氣伎和
多流香比登能等布麻泥
越中國守大伴家持報贈歌四首
一答古人云
安之比奇能夜麻波奈久毛我都奇見礼婆於奈自伎佐
刀乎許己呂敞太底都
一答屬目發思兼詠云遷任舊宅西北隅櫻樹
和我勢故我布流伎可吉都能佐久良婆奈伊麻太敷布
賣利比等目見尒許祢
一答所心卽以古人之跡代今日之意
故敷等伊布波衣毛名豆氣多理伊布須敞能多豆伎母
奈吉波安賀未奈里家利
一更矚目
美之麻野尒可須美多奈妣伎之可須我尒伎乃敷毛家
布毛由伎波敷里都追
三月十六日
姑大伴氏坂上郎女來贈越中守大伴宿祢家持歌二首
都祢比等能故布登伊敷欲利波安麻里尒弖和礼波之

四〇七五 相思はずあるらむ君をあやしくも嘆き渡るか人の問ふまで
越中の國の守大伴家持の、報へ贈れる歌四首
一、古人の云へるに答ふる
四〇七六 あしひきの山は無くもが月見れば同じき里を心隔てつ
一、目を屬けて思を發せるに答へ、かねて遷任せる舊宅の西北の隅の櫻樹を詠み云へる
四〇七七 我が夫子が古き垣内の櫻花いまだ含めり一目見に來ね
一、所心に答ふる。卽古人の跡を以ちて今日の意に代ふ
四〇七八 戀ふといふはえも名づけたり言ふすべのたづきも無きは我が身なりけり
一、更に目を矚くる
四〇七九 三島野に霞たなびきしかすがに昨日も今日も雪は降りつつ
三月十六日
姑大伴氏坂上郎女の、越中守大伴宿禰家持に來贈れる歌二首
四〇八〇 常人の戀ふといふよりは餘りにて我は死ぬべくなりにたらず

夜麻波奈久毛我
佐久良婆奈（元類）「佐具良婆奈」
安賀未奈里家利

奴倍久奈里尒多良受也

可多於毛比遠宇万尒布都麻尒於保世母天故事部尒

夜良波比登加多波牟可母

越中守大伴宿祢家持報歌幷所心三首

安万射可流比奈能都夜故尒安米比度之可久古非須

良波伊家流思留事安里

都祢乃孤悲伊麻太夜麻奴尒美夜古欲里宇麻尒古非

許婆尒奈比安倍牟可母

別所心一首

安可登吉尒名能里奈久奈流保登等藝須伊夜米豆良

之久於毛保由流香母

右四日附使贈上京師

天平感寶元年五月五日饗東大寺之占墾地使僧平榮等

于時守大伴宿祢家持送酒僧歌一首

夜伎多知乎刀奈美能勢伎尒安須欲里波毛利敞夜里

蘇倍伎美乎等登米牟

同月九日諸僚會少目秦伊美吉石竹之舘飲宴於時主人

造白合花縵三枚疊置豆器捧贈賓客各賦此縵作三首

や

四〇八一 片思を馬に太馬に負せ持て越邊に遣らば人衒はむかも

越中守大伴宿禰家持の報ふる歌幷せて所心三首

四〇八二 天ざかる鄙の都に天人しかく戀ひすらは生けるしるしあり

四〇八三 常の戀いまだ止まぬに都より馬に戀來ば荷ひ堪へむかも

別に所心一首

四〇八四 曉に名告り鳴くなる霍公鳥いやめづらしく思ほゆるかも

右は四日、使に附けて京師に贈り上せる。

天平感寶元年五月五日、東大寺の占墾地の使僧平榮等を饗しき。時に守大伴宿禰家持の、酒を僧に送れる歌一首

四〇八五 燒刀を礪波の關に明日よりは守部遣り副へ君を留めむ

同じ月九日、諸僚、少目秦伊美吉石竹の館に會ひて飲宴しき。時に主人、白合の花蘰三枚を造り、豆器に疊ね置きて、賓客に捧げ贈る。各此の蘰を賦して作れる三首

比奈能都夜故尒

都祢乃孤悲（元類）「都祢能孤悲」

美夜古欲里（元類）「美夜古欲利」

占墾地使

大伴宿祢家持

夜伎多知乎

波美乎等登米牟（元細）「伎美乎登等米牟」

白合花縵

安夫良火乃比可里尒見由流和我可豆良佐由利能波

奈能惠麻波之伎香母

右一首守大伴宿祢家持

等毛之火能比可里尒見由流佐由理婆奈由利毛安波

牟等於母比曾米弖伎

右一首介內藏伊美吉繩麿

左由理婆奈由里毛安波牟等於毛倍許曾伊末能麻左

可母宇流波之美須礼

右一首大伴宿祢家持 和

獨居幄裏遙聞霍公鳥喧作歌一首 幷短歌

高御座安麻乃日繼登須賣呂伎能可未能美許登能伎

己之乎須久尒能麻保良尒山乎之毛佐波尒於保美等

百鳥能來居弖奈久許惠春佐礼婆伎吉乃可奈之母伊

豆礼乎可和枳弖之努波无宇能花乃佐久月多弖婆米

都良之久鳴保等登藝須安夜女具佐珠奴久麻泥尒比

流久良之欲和多之伎氣騰伎久其等尒許己呂都吳枳

弖宇知奈氣伎安波礼能登里等伊波奴登枳奈思

由久敞奈久安里和多流登毛保等登藝須奈枳之和多

四〇八六 あぶら火の光に見ゆる我が蘰さ白合の花の笑まはしきかも

右の一首は、守大伴宿禰家持

四〇八七 燈火の光に見ゆるさ白合花後も逢はむと思ひ初めてき

右の一首は、介內藏伊美吉繩麿

四〇八八 さ白合花後も逢はむと思へこそ今のまさかも愛しみすれ

右の一首は、大伴宿禰家持、和ふる

獨幄の裏に居て、遙に霍公鳥の喧くを聞きて作れる歌一首 幷に短歌

四〇八九 高御座 天の日嗣と 天皇の 神の命の 聞し食す 國のま

ほらに 山をしも さはに多みと 百鳥の 來居て鳴く聲

春されば 聞の愛しも、いづれをか 別きてしのばむ 卯の

花の 咲く月立てば めづらしく 鳴く霍公鳥 菖蒲草 珠

貫くまでに 晝暮らし 夜渡し聞けど 聞くごとに 心つご

きて うち嘆き あはれの鳥と 言はぬ時なし

四〇九〇 行方なくあり渡るとも霍公鳥鳴きし渡らばかくやしのばむ

安夫良火乃（元類）「安夫良火能」

左由理婆奈（元類）「佐由理波奈」

左由理婆奈（元）「左由理波奈」

由里毛安波牟等（元類）「由利毛安波牟等」

伊末能麻左可母（元神）「伊麻能麻左可母」

安麻乃日繼登（元類）「安麻能日繼登」

可未能美許登能（元神）「可美能美許登能」

伎吉乃可奈之母（元類）「伎吉能可奈之母」

和枳弖之努波无（元神）「和枳弖之努波無」

許己呂都吳枳弖

由久敞奈久（元）「反歌由久敞奈久」

良婆可久夜思努波牟

宇能花能登閇尓之奈氣婆保等登藝須伊夜米豆良之

毛名能里奈久奈倍

保登等藝須伊登祢多家口波橘乃播奈治流等吉尓伎

奈吉登余牟流

右四首十日大伴宿祢家持作之

行英遠浦之日作歌一首

安乎能宇良尓餘須流之良奈美伊夜末之尓多知之伎

与世久安由乎伊多美可聞

右一首大伴宿祢家持作之

賀陸奥國出金詔書歌一首 并短歌

葦原能美豆保國乎安麻久太利之良志賣之家流須賣

呂伎能神乃美許等能御代可佐祢天乃日嗣等之良志

久流伎美能御代〻〻之伎麻世流四方國尓波山河乎

比呂美安都美等多弖麻都流御調寶波可蘇倍衣受都

久之毛可祢都之加礼騰母吾大王乃毛呂比登乎伊射

奈比多麻比善事乎波自米多麻比弖久我祢可毛多之

氣久安良牟登於母保之弖之多奈夜麻須尓鷄鳴東國

四〇九一 卯の花の共にし鳴けば雀公鳥いやめづらしも名告り鳴くなべ

四〇九二 雀公鳥いとねたけくは橘の花散る時に來鳴き響むる

右の四首は、十日、大伴宿禰家持の作れる。

英遠の浦に行きし日作れる歌一首

四〇九三 英遠の浦に寄する白波いや増しに立ち重き寄せ來東風を疾みかも

右の一首は、大伴宿禰家持の作れる。

陸奥の國より金を出せる詔書を賀ぐ歌一首 并に短歌

四〇九四 葦原の 瑞穂の國を 天降り しらしめしける 天皇の 神の命の 御代重ね 天の日嗣と しらし來る 君の御代御代 敷きませる 四方の國には 山河を 廣み淳みと 奉る 御調寶は 數へ得ず 盡しも乗ねつ 然れども 吾が大王の 諸人を 誘ひ給ひ 善き事を 始め給ひて 金かも たしけくあらむと 思ほして 下悩ますに 鶏が鳴く 東の國の

登閇尓之奈氣婆（元）「開尓之奈氣婆」
保等登藝須
保登等藝須（元神）「保等登藝須」
橘乃（元類）「橘能」
播奈治流等吉尓（元神）「幡奈治流等吉尓」
天乃日嗣等（細矢）「天乃日飼等」
多弖麻都流
吾大王乃（元類）「吾大王能」
多之氣久安良牟登（元）「多能之氣久安良牟登」
東國乃（元類）「東國能」

乃美知能久乃小田在山尓金有等麻宇之多麻敞礼御

心乎安吉良米多麻比天地乃神安比宇豆奈比皇御祖

乃御靈多須氣弖遠代尓可〻里之許登乎肹御世尓安

良波之弖安礼婆御食國波左可延牟物能等可牟奈我

良於毛保之賣之弖毛能乃布能八十伴雄乎麻都呂倍

乃牟氣乃麻尓〻〻老人毛女童兒毛之我願心太良比

尓撫賜治賜婆許己乎之母安夜尓多敷刀美宇礼之家

久伊余与於母比弖大伴乃遠都神祖乃其名乎婆大來

目主等於比母知弖都加倍之官海行者美都久屍山行

者草牟須屍大皇乃敞尓許曾死米可敞里見波勢自等

許等太弖大夫乃伎欲吉彼名乎伊尓之敞欲伊麻乃乎

追通尓奈我佐敞流於夜乃子等毛曾大伴等佐伯乃氏

者人祖乃立流辞立人子者祖名不絶大君尓麻都呂布

物能等伊比都雅流許等能都可左曾梓弓手尓等里母

知弖劔大刀許之尓等里波伎安佐麻毛利由布能麻毛

利余大王乃三門乃麻毛利和礼乎於吉弖且比等波安

良自等伊夜多氏於毛比之麻左流大皇乃御言能左吉

乃乎 一云 聞者貴美 一云貴久之安礼婆

陸奥の 小田なる山に 金ありと 奏し賜へれ 御心を 明め給ひ 天地の 神相納受ひ 皇御祖の 御靈助けて 遠き代に かかりし事を 肹が御世に 顯してあれば 食國は 榮えむものと 神ながら 思ほしめして ものの ふの 八十伴の雄を まつろへの むけのまにまに 老人も 女童兒も 其が願ふ 心足ひに 撫で給ひ 治め給へば 此をしも あやに貴み うれしけく 愈思ひて 大伴の 遠つ神祖の その名をば 大來目主と 負ひ持ちて 仕へし官 海行かば 水浸く屍 山行かば 草生す屍 大皇の 邊にこそ死なめ 顧みは 爲じと言立て 丈夫の 清き彼の名を 古よ 今の現に 流さへる 祖の子等ぞ 大伴と 佐伯の氏は 人の祖の 立つる言立 人の子は 祖の名絶たず 大君に 奉仕ふものと 言ひ繼げる 言の職ぞ 梓弓 手に取り持ちて 劔大刀 腰に取り佩き 朝守り 夕の守りよ 大王の 御門の守護 我をおきて また人はあらじと 彌立て 思ひし増る 大皇の 御言の幸の 一云 聞けば貴み 一に云ふ、貴くしあれば

御食國波

大伴乃（元類）「大伴能」
大來目主等（類）「大來目主登」
可敞里見波
勢自等許等太弖
於夜乃子等毛曾（元類）「於夜能子等毛曾」
佐伯乃氏者
許等能都可左曾
由布能麻毛利余
大王乃（元類）「大王能」

反歌三首

大夫能許己呂於毛保由於保伎美能美許登乃佐吉乎
一云能　聞者多布刀美　一云貴久之安礼婆

大伴乃等保追可牟於夜能於久都奇波之流久之米多
且比等能之流倍久

須賣呂伎能御代佐可延牟等阿頭麻奈流美知乃久夜
麻尒金花佐久

天平感寶元年五月十二日於越中國守舘大伴宿祢家持作之

爲幸行芳野離宮之時儲作歌一首　并短歌

多可美久良安麻乃日嗣等天下志良之賣師家類須賣
呂伎乃可未能美許等能可之古久母波自米多麻比且
多不刀久母左太米多麻儛流美与之努能許乃於保美
夜尒安里我欲比賣之多麻布良之毛能乃敷能夜蘇等
母能乎毛於能我於弊流於能我名負大王乃麻氣能麻
久〻〻此河能多由流許等奈久此山能伊夜都藝都藝
尒可久之許曾都可倍麻都良米伊夜等保奈我尒
伊尒之儛乎於母保須良之母和期於保伎美余思努乃
美夜乎安里我欲比賣須
物能乃布能夜蘇氏人毛与之努河波多由流許等奈久
都可倍追通見牟

爲贈京家願眞珠歌一首　并短歌

珠洲乃安麻能於伎都美可未尒伊和多利且可都伎等
流登伊布安波妣多麻伊保知毛我母波之吉餘之都麻
乃美許登能許呂毛泥乃和可礼之等吉欲奴婆玉乃夜
床加多古里安佐祢我美可伎母氣頭良受伊泥氏許之
月日余美都追奈氣久良牟心奈具佐余保登等藝須伎
奈久五月能安夜女具佐波奈多知婆奈尒奴吉麻自倍
可頭良尒世餘等都追美氏夜良牟
白玉乎都〻美氏夜良婆安夜女具佐波奈多知婆奈尒
安倍母奴久我祢

於伎都之麻伊由伎和多里且可豆久知布安波妣多麻
母我都〻美且夜良牟
和伎母故我許己呂奈久佐尒夜良無多米於伎都之麻
奈流之良多麻母我毛
思良多麻能伊保都追度比乎手尒牟須妣於許世牟安

反歌三首

四〇九六丈夫の心思ほゆ大君の御言の幸を一に云ふ聞けば貴み一に云ふ貴くしあれば

四〇九八大伴の遠つ神祖の奥津城はしるく標立て人の知るべく

四〇九七天皇の御代榮えむと東なるみちのく山に金花咲く

天平感寶元年五月十二日、越中の國の守の舘にて大伴宿禰家持の作れる。

芳野の離宮に幸行さむ時の爲に、儲けて作れる歌一首　并に短歌

四〇九八高御座　天の日嗣と　天の下　知らしめしける　天皇の　神の命の　畏くも　始め給ひて　貴くも　定め給へる　み吉野の　この大宮に　あり通ひ　見し給ふらし　もののふの　八十伴の雄も　己が負へる　己が名負ひ　大王の　任のまくま
く　此の河の　絶ゆることなく　此の山の　彌つぎつぎに
かくしこそ　仕へ奉らめ　いや遠永に

四〇九九いにしへを思ほすらしも我ご大君吉野の宮をあり通ひ見す

美許登乃佐吉乎（元＊）「美許登能佐吉乎」

大伴乃（元類）「大伴能」

之流久之米多且

美知乃久夜麻尒（元類）「美知能久夜麻尒」

安麻乃日嗣等（類）「安麻能日嗣等」

於能我於樂流

於能我名負（類）「於能我名負〻」

伊尒之儛乎（元）「反歌伊尒之儛乎」

四一〇〇もののふの八十氏人も吉野河絶ゆることなく仕へつつ見む

京の家に贈らむ爲に、眞珠を願ふ歌一首　并に短歌

四一〇二珠洲の海人の　沖つ御神に　い渡りて　潜き採ると云ふ　鰒珠　五百箇もがも　はしきよし　妻の命の　衣手の　別れし時よ　ぬばたまの　夜床片こり　朝髪の　掻きも梳らず　出でて來し　月日數みつつ　歎くらむ　心悲よ　霍公鳥　來鳴く五月の　菖蒲草　花橘に　貫き交へ　薬にせよと　包みて遣らば菖蒲草花橘に合へも貫くがね

四一〇三沖つ島い行き渡りて潜くちふ鰒珠もが包みて遣らむ

四一〇四吾妹子が心悲に遣らむため沖つ島なる白玉もがも

四一〇五白玉の五百箇集を手に結び遣せむ海人はむかしくもあるか

都麻乃美許登能（元神）「都麻乃美許登能」

夜床加多古里

波奈多知婆奈尒（元類）「波奈多知波奈尒」

都〻美氏夜良婆（元＊）「都々美氏夜良波」

可豆久知布（類）「可豆具知布」

許己呂奈久佐尒（元藍）「許己呂奈具左尒」

伊保都追慶比乎

麻波牟賀思久母安流香 一云我家牟伎波母

右五月十四日大伴宿祢家持依興作

敎喩史生尾張少咋歌一首 幷短歌

七出例云

但犯一條卽合出之無七出輙弃者徒一年半

三不去云

雖犯七出不合弃之違者杖一百唯犯姧惡疾得弃之

兩妻例云

有妻更娶者徒一年女家杖一百離之

詔書云

愍賜義夫節婦

謹案先件數條建法之基化道之源也然則義夫之道情存無別一家同財豈有忘舊愛新之志哉所以綴作數行之歌令悔弃舊之惑其詞曰

於保奈牟知須久奈比古奈野神代欲里伊比都藝家良之父母乎見波多布刀久妻子見波可奈之久米具之宇都世美能余乃許等和利止可久佐末尒伊比家流物能乎世人能多都流許等太旦知左能花佐家流沙加利尒

一に云ふ我家むきはも

右は五月十四日、大伴宿禰家持の、興に依りて作れる。

史生尾張小咋に敎へ喩す歌一首 幷に短歌

七出の例に云ふ

但し一條を犯せらば、卽出すべし。七出無くて輙く棄つる者は、徒一年半。

三不去に云ふ

七出を犯すとも棄つべからず。違へる者は杖一百。唯姧を犯せると惡疾とは棄つることを得。

兩妻の例に云ふ

妻有り更に娶る者は、徒一年、女家は杖一百して離て。

詔書に云ふ

義夫節婦を愍み賜ぶ。

謹みて案ふるに、先の件の數條は、法を建つる基、道に化くる源なり。然らば則、義夫の道は、情、別なきに存す。一家同財、豈舊を忘れ新を愛づる志有らめや。所以に數行の歌を綴り作し、舊を棄つる惑を悔いしむ。其の詞に曰はく

四一〇六 大己貴 少彦名の 神代より 言ひ繼ぎけらし 父母を 見れば尊く 妻子見れば 愛しく愍し うつせみの 世の理と かく様に 言ひけるものを 世の人の 立つる言立 ちさの花 咲ける盛に はしきよし その妻の兒と 朝夕に 笑み

我家牟伎波母

尾張少咋

輙弃者（元神）「輙奇者」

不合弃之（元神）「不合奇之」

得弃之（元神）「得奇之」

弃舊之惑（神矢）「奇舊之惑」

多都流許等太旦

波之吉余之曾能都末能古等安沙余比尒惠美〻惠末須毛宇知奈氣支可多里家末久波等己之部尒可久之母安良米也天地能可未許等余勢天春花能佐可里裳安良牟等末多之家牟等吉能沙加利曾波奈利居旦奈介可須移母我何時可毛都可比能許牟等末多須良無心左夫之苦南吹雪消益而射水河流水沫能余留弊奈美左夫流其兒尒比毛能緒能移都我利安比旦尒保騰里能布多理雙坐那吳能宇美能於支乎布可米天左度波世流支美我許己呂能須敞母須敞奈佐 言佐夫流者遊行女婦之字也

反歌三首

安乎尒与之奈良尒安流伊毛我多可〻〻尒麻都良牟許己呂之可尒波安良司可

左刀妣等能見流目波豆可之左夫流兒尒佐度波須伎美我美夜泥之理夫利

久礼奈爲波宇都呂布母能曾都流波美能奈礼尒之伎奴尒奈保之可米夜母

右五月十五日守大伴宿祢家持作之

先妻不待夫君之喚使自來時作歌一首

み笑まずも うち歎き 語りけまくは 永久に かくしもあらめや 天地の 神こと寄せて 春花の 盛もあらむと 待たしけむ 時の盛ぞ 離り居て 嘆かす妹が 何時しかも 使の來むと 待たすらむ 心さぶしく 南風吹き 雪消まさりて 射水河 流る水沫の よるべ無み 左夫流その兒に 紐の緒の いつがり合ひて 鳰鳥の 二人雙び坐 奈呉の海の 沖を深めて 惑はせる 君が心の 術もすべ無さ 佐夫流といふは、遊行女婦の字なり

反歌三首

四一〇七 あをによし奈良に在る妹が高高に待つらむ心然にはあらじか

四一〇八 里人の見る目はづかし左夫流兒に惑はす君が宮出後風

四一〇九 紅はうつろふものぞ椽のなれにし衣になほ若かめやも

右は五月十五日、守大伴宿禰家持の作れる。

先の妻、夫の君の喚使を待たず、みづから來りし時作れる歌一首

宇知奈氣支

佐可里裳安良牟等末多之家牟（京赭）「佐可里裳安良多之家牟」

波奈利居旦（意改）「波居旦」

那吳能宇美能

於支乎布可米天

支美我許己呂能

須敞母須敞奈佐

夫君之喚使（元神）「夫君之愛使」

左夫流兒我伊都伎之等乃尒須受可氣奴婆由麻久太
礼利佐刀毛等騰呂尒

同月十七日大伴宿祢家持作之

橘歌一首　并短歌

可氣麻久母安夜尒加之古思皇神祖乃可見能大御世
尒田道間守常世尒和多利夜保許毛知麻爲泥許之登
吉時支能香久乃菓子乎可之古久母能許之多麻敞礼
國毛勢尒於非多知左加延波流左礼婆孫枝毛伊都追
保登等藝須奈久五月尒波波都波奈乎延太尒多乎理
旦乎登女良尒都刀尒母夜里美之路多倍能蘇泥尒毛
古伎礼香具播之美於枳旦可良之美安由流實波多麻
尒奴伎都追手尒麻吉旦見礼騰毛安加受秋豆氣婆之
具礼乃雨零阿之比奇能夜麻能許奴礼波久礼奈爲尒
仁保比知礼止毛多知波奈乃成流其實者比太照尒伊
夜見我保之久美由伎布流冬尒伊多礼婆霜於氣騰母
其葉毛可礼受常磐奈須伊夜佐加波延尒之可礼許曾
神乃御代欲理与呂之奈倍此橘乎等伎自久能可久能
木實等名附家良之母

四二〇左夫流兒がいつきし殿に鈴掛けぬ驛馬下れり里もとどろに

同じ月十七日、大伴宿禰家持の作れる。

橘の歌一首　并に短歌

四二一かけまくも　あやにかしこし　皇神祖の　神の大御代に　田
道間守　常世に渡り　八矛持ち　參出來し　時じきの　香の
木の實を　かしこくも　遺したまへれ　國も狹に　生ひ立ち
榮え　春されば　孫枝萌いつつ　霍公鳥　鳴く五月には　初
花を　枝に手折りて　嬢子等に　裏にも遣りみ　白栲の　袖
にも扱入れ　香細しみ　措きて枯らしみ　あゆる實は　玉に
貫きつつ　手に纏きて　見れども飽かず　秋づけば　時雨の
雨零り　あしひきの　山の木末は　紅に　にほひ散れども
橘の　成れる其の實は　直照りに　彌見が欲しく　み雪降る
冬に到れば　霜置けども　その葉も枯れず　常盤なす　いや
榮はえに　然れこそ　神の御代より　宜しなべ　この橘を
時じくの　香の木の實と　名づけけらしも

伊都伎之等乃尒（元類）「伊都伎之等能尒」

皇神祖乃（元類）「皇神祖能」

波都波奈乎

香具播之美（元神）「香具幡之美」

於枳旦可良之美之具礼乃雨零（元類）之具礼能雨零」

久礼奈爲尒

多知波奈乃（元類）「多知波奈能」

冬尒伊多礼婆之可礼許曾

反歌一首

橘波花尒毛實尒母美都礼騰母移夜時自久尒奈保之
見我保之

閏五月廿三日大伴宿祢家持作之

庭中花作歌一首　并短歌

於保支見能等保能美可等ゝ末支太末不官乃末尒末
美由支布流古之尒久多利來安良多末能等之乃五年
之吉多倍乃手枕末可受比毛等可須末呂宿乎須礼波
移夫勢美等情奈具左尒奈泥之故乎屋戸尒末枳於保
之夏能ゝ之佐由利比伎宇惠天開花乎移旦見流其等
尒那泥之古我曾乃波奈豆末尒左由理花由利母安波
無等奈具佐無流許己呂之奈久波安末射可流比奈尒
一日毛安流部久母安礼也

反歌二首

奈泥之故我花見流其等尒乎登女良我惠末比能尒保
比於母保由流可母
佐由利花由利母相等之多波布流許己呂之奈久波今
日母倍米夜母

反歌一首

閏五月二十三日、大伴宿禰家持の作れる。

庭中の花を見て作れる歌一首　并に短歌

庭中の　遠の朝廷と　任き給ふ　官のまにま　み雪降る　越
の下り來　あらたまの　年の五年　敷栲の　手枕纏かず　紐
解かず　丸寢をすれば　いぶせみと　情慰に　瞿麥を　屋戸
に蒔き生し　夏の野の　さ白合引き植ゑて　咲く花を　出で
見る毎に　瞿麥が　其の花妻に　さ白合花　後も逢はむと
慰むる心し無くば　天ざかる　鄙に一日も　在るべくもあ
れや

反歌二首

瞿麥が花見る毎に孃子らがゑまひのにほひ思ほゆるかも

さ白合花後も逢はむと下延ふる心しなくば今日も經めやも

庭中花作歌

於保支見能
末支太末不
美由支布流
古之尒久多利來
等之乃五年（无類）
「等之能五年」
屋戸尒末枳於保之（元神）「屋戸尒末於保之」
移旦見流其等尒（元類）「伊但見流其等尒」
安末射可流

同閏五月廿六日大伴宿祢家持作

國椽久米朝臣廣繩以天平廿年附朝集使入京其事畢而天平感寶元年閏五月廿七日還到本任仍長官之舘設詩酒宴樂飲於時主人守大伴宿祢家持作歌一首 幷短歌

於保支見能末支能末尒〻〻等里毛知氐都可布流久尒能年內能許登可多祢母知多末保許能美知尒伊天多知伊波祢布美也末古衣野由支旂夜故敞尒末爲之和我世乎安良多末乃等之由吉我弊理月可佐祢美奴日佐末祢美故敷流曾良夜須久之安良祢波保止〻支須支奈久五月能安夜女具佐余母疑可豆良伎左加美都伎安蘇比奈具礼止射水河雪消溢而逝水能伊夜末思尒乃未多豆我奈久奈吳江能須氣能根毛己呂尒於母比牟須保礼奈介伎都〻安我末川君我許登乎波里可敞利末可利天夏野能佐由利能波奈能花咲尒〻布夫尒惠美天阿波之多流今日乎波自米氐鏡奈須可久之都祢見牟於毛我波利世須

反歌二首

許序能秋安比見之末尒末今日見波於毛夜目都良之

同じ閏五月二十六日、大伴宿禰家持の作れる。

國の椽久米朝臣廣繩、天平二十年を以ちて朝集使に附きて京に入り、其の事畢りて、天平感寶元年閏五月二十七日本任に還り到りき。仍りて長官の館に詩酒の宴を設けて樂飲せり。時に主人守大伴宿禰家持の作れる歌一首 幷に短歌

四一一六 大君の 任のまにまに 執り持ちて 仕ふる國の 年の內の 事かたね持ち 玉桙の 道に出で立ち 岩根踏み 山越え野行き 都べに 參ゐし我が夫を あらたまの 年往き還り 月累ね 見ぬ日さまねみ 戀ふるそら 安くしあらねば 霍公鳥 來鳴く五月の 菖蒲草 蓬蘰き 酒宴 遊び慰ぐれど 射水河 雪消溢りて 逝く水の いや增しにのみ 鶴が鳴く 奈吳江の菅の 懃に 思ひ結ぼれ 歎きつつ 我が待つ君が 事畢り 歸り罷りて 夏の野の さ白合の花の 花咲に に ふぶに笑みて 逢はしたる 今日を始めて 鏡なす かくし 常見む 面變りせず

反歌二首

四一一七 去年の秋相見しまにま今日見れば面やめづらし都方人

長官之舘

於保支見能末支能末尒〻〻等里毛知氐

也末古衣野由支等之由吉我弊理

安我末川君我（元神）「安我末津君我」

美夜古可多比等

可久之天母安比見流毛乃乎須久奈久母年月經礼波古非之家礼夜母

聞霍公鳥喧作歌一首

伊尒之敞欲之怒比尒家礼婆保等登伎須奈久許惠伎吉旦古非之吉物乃乎

爲向京之時見貴人及相美人飲宴之日述懷儲作歌二首

見麻久保里於毛比之奈倍尒賀都良賀氣香具波之君乎安比見都流賀母

朝參乃伎美我須我多乎美受比左尒比奈尒之須米婆安礼故非尒家里 一云波之吉与思伊毛我須我多乎

同閏五月廿八日大伴宿祢家持作之

天平感寶元年閏五月六日以來起小旱百姓田畝稍有凋色也至于六月朔日忽見雨雲之氣仍作雲歌一首 短歌一絕

須賣呂伎能之伎麻須久尒能安米能之多四方能美知尒波宇麻乃都米伊都久須伎波美布奈乃倍能伊波都流麻泥尒伊尒之敞欲伊麻乃乎都頭尒万調麻都流都可佐等都久里多流曾能奈里波比乎安米布良受日能

四一一八 かくしても相見るものを少くも年月經れば戀しけれやも

霍公鳥の喧くを聞きて作れる歌一首

四一一九 いにしへよ偲びにければ霍公鳥鳴く聲聞きて戀しきものを

京に向はむ時、貴人を見、及美人に相ひて、飲宴せむ日の爲に、懷を述べて、儲けて作れる歌二首

四一二〇 見まく欲り思ひしなべに蘰掛けかぐはし君を相見つるかも

四一二一 朝參の君が姿を見ず久に鄙にし住めば吾戀ひにけり 一に云ふ、はしきよし妹が姿を

同じ閏五月二十八日、大伴宿禰家持の作れる。

天平感寶元年閏五月六日以來、小旱を起して、百姓の田畝稍凋める色あり。六月朔日に至りて、忽に雨雲の氣を見る。仍りて作れる雲の歌一首 短歌一絕

四一二三 天皇の 敷きます國の 天の下 四方の道には 馬の蹄 い盡す極 船の舳の い泊つるまでに 古よ 今の現に 萬調 奉る長上と 作りたる 其の農業を 雨降らず 日の重れば 植ゑし田も 蒔きし畠も 朝ごとに 凋み枯れ行く

安比見流毛乃乎（元藍）「安比見流毛能乎」

年月經礼波

之怒比尒家礼婆（元類）「之奴比尒家礼婆」

保等登伎須（元神）「保等登藝須」

古非之吉物乃乎（元類）「古非之吉物能乎」

及相美人（元細）「乃相美人」

賀都良賀氣

一云（元類）「一頭云」

百姓田畝

稍有凋色也（細）「稍有彫色」

日能可左奈礼婆

可左奈礼婆宇惠之田毛麻吉之波多氣毛安佐其登尓
之保美可礼由苦曾乎見礼婆許己呂乎伊多美旅騰里
兒能知許布我其登久安麻都美豆安布藝豆曾麻都安
之比奇能夜麻能多乎理尓許能見油流安麻能之良久
母和多都美能於枳都美夜敞尓多知和多里等能具毛
利安比豆安米母多麻波祢

反歌一首

許能美由流久毛保妣許里豆等能具毛理安米毛布良
奴可己許呂太良比尓

右二首六月一日晩頭守大伴宿祢家持作之

賀雨落歌一首

和我保里之安米波布里伎奴可久之安良波許登安氣
世受杼母登思波佐可延牟

右一首同月四日大伴宿祢家持作之

七夕歌一首 并短歌

安麻泥良須可未能御代欲里夜洲能河波奈加尓敞太
豆ゝ牟可比太知蘇泥布利可波之伊吉能乎尓奈氣加
須古良和多里母理布祢毛麻宇氣受波之太尓母和多

其を見れば　心を痛み　緑兒の　乳乞ふがごとく　天つ水
仰ぎてぞ待つ　あしひきの　山のたをりに　この見ゆる　天
の白雲　海神の　沖つ宮邊に　立ち渡り　との曇り合ひて
雨も賜はね

反歌一首

四二三この見ゆる雲ほびこりてとの曇り雨も降らぬか心足ひに

右の二首は、六月一日の晩頭に、守大伴宿禰家持の作れる。

雨の落るを賀ぐ歌一首

四二四我が欲りし雨は降り來ぬかくしあらば言擧せずとも年は榮えむ

右の一首は、同じ月四日、大伴宿禰家持の作れる。

七夕の歌一首 并に短歌

四二五天照らす　神の御代より　安の河　中に隔てて　向ひ立ち
袖振り交し　いきの緒に　歎かす子ら　渡守　船も設けず
橋だにも　渡してあらば　その上ゆも　い行き渡らし　携は

許能見油流

己許呂太良比尓（類）「許己呂太良比尓」

可久之安良波

和多里母理

之豆安良波曾乃倍由母伊由伎和多良之多豆佐波利
宇奈我既里爲豆於毛保之吉許登母加多良比奈具左
牟流許己呂波安良牟乎奈尓之可母安吉尓之安良祢
波許等騰比能等毛之伎古良宇都世美能代人和礼毛
許己乎之母安夜尓久須之旅徃更年乃波其登尓安麻
乃波良布里左氣見都追伊比都藝尓須礼

反歌二首

安麻能我波ゝ志和多世良波曾能倍由母伊和多良佐
牟乎安吉尓安良受得物

夜須能河波許牟可比太知豆等之乃古非氣奈我伎古
良河都麻度比能欲曾

右七月七日仰見天漢大伴宿祢家持作

越前國掾大伴宿祢池主來贈戲歌四首

忽辱恩賜驚欣已深心中含唉獨座稍開表裏不同相違何
異推量所由率尓作策歟明知加言豈有他意乎凡貿易本
物其罪不輕正贓倍贓宜急幷滿今勒風雲發遣徵使早速
返報不須延廻

勝寶元年十一月十二日物所貿易下吏

りうながけり居て　思ほしき　ことも語らひ　慰むる　心
はあらむを　何しかも　秋にしあらねば　言問の　ともしき
子ら　うつせみの　世の人我も　此處をしも　あやにくすし
み　往き更る　毎年ごとに　天の原　ふり放け見つつ　言ひ
繼ぎにすれ

反歌二首

四二六天の河橋渡せらば其の上ゆもい渡らさむを秋にあらずとも

四二七安の河こ向ひ立ちて年の戀け長き子らが妻問の夜ぞ

右は七月七日、天漢を仰ぎ見て大伴宿禰家持の作れる。

越前の國の掾大伴宿禰池主の來り贈れる戲の歌四首

忽に恩賜を辱くし、驚欣已に深し。心の中に唉を含みて、
獨座りて稍開けば、表裏同じからず、相違何ぞ異れる。所
由を推し量るに率爾に策を作せる歟。明に知る、言を加ふ
ること、豈他意有らめや。およそ本物を貿易するは、其の
罪輕からず。正贓倍贓、宜急に幷せ滿たすべし。今風雲に
勒して徵使を發遣す。早速に返報して、延廻すべからず。

勝寶元年十一月十二日、物を貿易せらえし下吏、謹みて

曾乃倍由母（元類）「曾能倍由母」
宇奈我既里爲豆於毛保之吉（元類）「於母保之吉」
奈具左牟流（元類）「那具左牟流」
代人和礼毛（元類）「代人和礼母」
許己乎之母（代匠記）「許己乎之母」
年乃波其登尓（元類）年能波其等尓」
安麻乃波良（類）「安麻能波良」
等之乃古非（元類）「等之能古非」
大伴宿祢家持作
宜急幷滿（元神）「宜忽幷滿」
徵使（元細）「徵使」

謹訴　貿易人斷官司　廳下

別白可怜之意不能默止聊述四詠准擬睡覺

久佐麻久良多比乃於伎奈等於母保之天波里曾多麻
敞流奴波牟物能毛賀

芳理夫久路等利安宜麻敞尒於吉可邊佐倍波於能等
母於能夜宇良毛都藝多利

波利夫久路應婢都〻氣奈我良佐刀其等迩天良佐比
安流氣騰比等毛登賀来授

等里我奈久安豆麻乎佐之天布佐倍之尒由可牟等於
毛倍騰与之母佐祢奈之

右歌之返報歌者脫漏不得探求也

更來贈歌二首

依迎驛使事今月十五日到來部下加賀郡境面蔭見射水
之郷戀緒結深海之村身異胡馬心悲北風乘月俳徊曾無
所爲稍開來封其辭云〻著者先所奉書返畏度疑歟僕作
囑羅且惱使君夫乞水得酒從來能口論時合理何題強吏
乎尋誦針袋詠詞泉酌不渴抱膝獨唉能屬旅愁陶然遣日
何慮何思短筆不宣

勝寶元年十二月十五日徵物下司、謹みて
謹上　不伏使君記室

別に奉る云々。歌二首

多〻佐尒毛可尒母与己佐母夜都故等曾安礼波安利
家流奴之能等乃度尒

波里夫久路己礼波多婆利奴須理夫久路伊麻波衣天
之可於吉奈佐備勢牟

宴席詠雪月梅花歌一首

由吉乃宇倍尒天礼流都久欲尒為梅能播奈乎理天於
久良牟波之故伎毛我母

右一首十二月大伴宿祢家持作

和我勢故我許登等流奈倍尒都祢比登乃伊布奈宜吉
思毛伊夜之伎麻須毛

右一首少目秦伊美吉石竹舘宴守大伴宿禰家持作

天平勝寶二年正月二日於國廳給饗諸郡司等宴歌一首

安之比奇能夜麻能許奴礼能保与等理天可射之都良
久波知等世保久等曾

右一首守大伴宿祢家持作

貿易人を斷る官司の廳下に訴ふ。

別に白す。可怜の意、默止をること能はず、聊四詠を述べて睡覺に准擬す。

四二六草枕旅の翁と思ほして針ぞ賜へる縫はむ物もが

敞流奴波牟物能毛賀

芳理夫久路等利安宜麻敞尒於吉可邊佐倍波於能等
母於能夜宇良毛都藝多利

四一三〇針袋帶び續けながら里ごとにてらさひ歩けど人も咎めず

波利夫久路應婢都〻氣奈我良佐刀其等迩天良佐比
安流氣騰比等毛登賀来授

四一三一雞が鳴く東を指してふさへしに行かむと思へど由も實なし

等里我奈久安豆麻乎佐之天布佐倍之尒由可牟等於
毛倍騰与之母佐祢奈之

右の歌の返報の歌は、脫漏して探り求むることを得ず。

更に來贈れる歌二首

驛使を迎ふる事に依りて、今月十五日、部下の加賀の郡の境に到來せり。面蔭に射水の郷を見、戀緒を深海の村に結ぶ。身は胡馬に異なれど、心は北風に悲ぶ。月に乘じて徘徊し、かつて爲す所無し。稍來封を開く。其の辭云々。著者先に奉る所の書、返りて畏る、疑に度れる歟。僕囑羅を作り、且使君を惱す。それ水を乞ひて酒を得。從來能口、論時理に合はば、何ぞ强吏と題せめや。尋ぎて針袋の詠を誦するに、詞の泉酌めども渴ず、膝を抱きて獨唉ひ、能く旅の愁を屬く。陶然として日を遣る。何をか慮らむ、何をか思はむ。短筆不宣

勝寶元年十二月十五日、物を徵りし下司、謹みて
不伏の使君の記室に上る。

別に奉る云々。歌二首

四一三二竪様にもかにも横様も奴とぞ吾はありける主の殿門に

多〻佐尒毛可尒母与己佐母夜都故等曾安礼波安利
家流奴之能等乃度尒

四一三三針袋これは賜りぬすり袋今は得てしか翁さびせむ

波里夫久路己礼波多婆利奴須理夫久路伊麻波衣天
之可於吉奈佐備勢牟

宴席に雪月梅花を詠める歌一首

四一三四雪の上に照れる月夜に梅の花折りて贈らむ愛しき兒もがも

由吉乃宇倍尒天礼流都久欲尒為梅能播奈乎理天於
久良牟波之故伎毛我母

右の一首は、十二月、大伴宿禰家持の作れる。

四一三五我が夫子が琴取るなべに常人の云ふ歎しもいや重き益すも

和我勢故我許登等流奈倍尒都祢比登乃伊布奈宜吉
思毛伊夜之伎麻須毛

右の一首は、少目秦伊美吉石竹の舘の宴に、守大伴宿禰家持の作れる。

天平勝寶二年正月二日、國の廳に饗を諸郡司等に給ふ宴の歌一首

安之比奇能夜麻能許奴礼能保与等理天可射之都良
久波知等世保久等曾

四一三六あしひきの山の木末の寄生取りて挿頭しつらくは千年壽ぐとぞ

右の一首は、守大伴宿禰家持の作れる。

別白（元）「別日」
不能默止（元神）「不能點止」
准擬
多比乃於伎奈等（元類）「多比能於伎奈等」
奴波牟物能毛賀

由可牟等於毛倍騰（元類）「由可牟登於毛倍騰」

面蔭見（元神）「面蔭見見」
心悲北風

稍開來封（細）「稍開來對」
云〻（元）「云」
囑羅

不伏使君記室

安礼波安利家流（元類）「安礼婆安利家流」
奴之能等乃度尒（元古葉）「奴之能等能度尒」
伊麻波衣天之可

由吉乃宇倍尒（元類）「由吉能宇倍尒」
乎理天於久良牟（元神）「乎天於久良牟」
大伴宿祢家持作
都祢比等乃（元類）「都祢比等能」

宴歌一首（元神）「歌一首」
保与等理天（元類）「保与等里天」

判官久米朝臣廣繩之舘宴歌一首

牟都奇多都波流能波自米尒可久之都追安比之惠美

四一三七 止月たつ春のはじめにかくしつつ相し笑みてば時じけめやも

天婆等枳自家米也母

同月五日守大伴宿祢家持作之

緣檢察墾田地事宿礪波郡主帳多治比部北里之家于時忽起風雨不得辞去作歌一首

夜夫奈美能佐刀尒夜度可里波流佐米尒許母理都追

牟等伊母尒都宜都夜

四一三八 やぶなみの里に宿借り春雨に隱り障むと妹に告げつや

二月十八日守大伴宿祢家持作

萬葉集卷第十八

二月十八日、守大伴宿禰家持の作れる。

主帳

大伴宿祢家持作

天平勝寶二年三月一日之暮詠桃李花歌二首

見飜翔鴫作歌一首

二日攀柳黛思京師歌一首

攀折堅香子草花歌一首

見歸鴈歌二首

夜裏聞千鳥喧歌二首

聞曉鳴鶏歌二首

遙聞泝江船人之唱歌一首

三日越中守大伴家持之舘宴歌三首

八日詠白大鷹歌一首 并短歌

潜鷗歌一首 并短歌

過澁谿埼見巖上樹歌一首

悲世間無常歌一首 并短歌

豫作七夕歌一首

慕振勇士之名歌一首 并短歌

萬葉集卷の第十九

天平勝寶二年三月一日の暮に、桃李の花を詠める歌二首

飜び翔る鴫を見て作れる歌一首

二日、柳黛を攀ぢて京師を思ふ歌一首

堅香子草の花を攀ぢ折る歌一首

歸る雁を見る歌二首

夜の裏に千鳥の喧くを聞く歌二首

曉に鳴く雉を聞く歌二首

遙に江を泝る船人の唱を聞く歌一首

三日、越中守大伴家持の舘に宴せる歌三首

八日、白き大鷹を詠める歌一首 并に短歌

鷗を潜くる歌一首 并に短歌

澁谿の埼を過ぎて巖の上の樹を見る歌一首

世間の常無きを悲む歌一首 并に短歌

かねて作れる七夕の歌一首

勇士の名を振ふを慕ふ歌一首 并に短歌

天平勝寶二年
詠桃李花（文神）
「桃李花」
見飜翔鴫

船人之唱

大伴家持之舘

白大鷹（文神）「太鷹」

澁谿埼

豫作

慕振勇士之名

詠霍公鳥幷時花歌一首 幷短歌
爲家婦贈在京尊母所誂作歌一首 幷短歌
廿三日詠霍公鳥作歌二首
贈京丹比家歌一首
廿七日追和筑紫大宰之時春花梅歌一首
詠霍公鳥歌二首
四月三日贈越前判官大伴池主霍公鳥歌不勝感舊述懷歌一首 幷短歌
不飽感霍公鳥之情述懷作歌一首 幷短歌
四月五日從京師贈來歌一首
詠山振花歌一首 幷短歌
六日遊覽布勢水海作歌一首 幷短歌
九日贈水烏越前判官大伴池主歌一首 幷短歌
詠霍公鳥幷藤花一首 幷短歌
更怨霍公鳥哢晩歌三首
贈京人歌二首
十二日遊覽布勢水海望見藤花各述懷歌四首
恨霍公鳥不喧歌一首

霍公鳥幷せて時の花を詠める歌一首 幷に短歌

家婦が京に在す尊母に贈らむ爲に、誂へらえて作れる歌一首 幷に短歌

二十三日、霍公鳥を詠みて作れる歌二首

京なる丹比家に贈れる歌一首

二十七日、筑紫の大宰の時の春の花の梅の歌に追ひて和ふる一首

霍公鳥を詠める歌二首

四月三日、越前判官大伴池主に贈れる霍公鳥の歌、舊りにしを感づるに勝へずして懷を述ぶる歌一首 幷に短歌

霍公鳥を感づる情に飽かずして、懷を述べて作れる歌一首 幷に短歌

四月五日、京師より贈り來れる歌一首

山振の花を詠める歌一首 幷に短歌

六日、布勢の水海に遊覽して作れる歌一首 幷に短歌

九日、水烏を越前の判官大伴池主に贈れる歌一首 幷に短歌

霍公鳥幷せて藤の花を詠める一首 幷に短歌

更に霍公鳥の哢くこと晩きを怨むる歌三首

京の人に贈れる歌二首

十二日、布勢の水海に遊覽して、藤の花を望み見て各懷を述ぶる歌四首

霍公鳥の喧かざるを恨むる歌一首

時花

大宰之時（文神）「太宰之時」

春花

不勝感舊之意

感霍公鳥之情

哢晩歌（文神）「哢晩」

見攀折保寶葉歌二首
守大伴家持仰見月光歌一首
廿二日大伴家持贈判官久米廣繩霍公鳥怨恨歌一首 幷短歌
廿三日椽久米廣繩和家持作歌一首 幷短歌
五月六日大伴家持同處女墓歌一首 幷短歌
贈京丹比家歌一首
廿七日大伴宿祢家持弔尋南右大臣家藤原二郎之喪慈母挽歌一首 幷短歌
霖雨晴日作歌一首
見漁夫火光歌一首
六月十五日見芽子早花歌一首
大伴氏坂上郎女從京師來賜女子大孃歌一首 幷短歌
九月三日宴歌二首
幸芳野宮時藤原皇后御作歌一首
十月十六日饌朝集使少目秦伊美吉石竹時大伴家持作歌一首
十二月大伴家持雪日作歌一首

攀ぢ折れる保寶葉を見る歌二首

守大伴家持の、月の光を仰ぎ見る歌一首

二十二日、大伴家持の、判官久米廣繩に贈れる霍公鳥の怨恨の歌一首 幷に短歌

二十三日、椽久米廣繩の、家持の作れる歌に和ふる一首 幷に短歌

五月六日、大伴家持の、處女墓の歌に同ふる一首 幷に短歌

京なる丹比家に贈れる歌一首

二十七日、大伴宿禰家持の、尋南の右大臣家の藤原二郎が慈母を喪へるを弔ふ挽歌一首 幷に短歌

霖雨の晴るる日に作れる歌一首

漁夫の火光を見る歌一首

六月十五日、芽子の早花を見る歌一首

大伴氏坂上郎女の、京師より女子大孃に來賜へる歌一首 幷に短歌

九月三日、宴の歌二首

吉野の宮に幸しし時、藤原皇后の作りませる歌一首

十月十六日、朝集使少目秦伊美吉石竹を餞せし時、大伴家持の作れる歌一首

十二月、大伴家持の、雪の日に作れる歌一首

丹比家（文神）「舟比家」

霖雨晴日

幸芳野宮時藤原皇后

三形沙弥贈左大臣歌二首

天平勝寶三年正月二日雾雪殊多守大伴宿祢家持館宴歌一首

三日介内藏忌寸繩麿館宴樂時大伴家持作歌一首

同日椽久米朝臣廣繩作歌一首

遊行女婦蒲生娘子歌一首

同日酒酣更深鶏鳴内藏伊美吉繩麿作歌一首

守大伴家持和歌一首

太政大臣藤原家之縣犬養命婦奉　天皇歌一首

悲傷死妻歌一首　并短歌

二月二日判官久米廣繩以正税帳應入京師仍大伴家持作歌一首

四月十六日大伴家持詠霍公鳥歌一首

春日祭神之日藤原太后賜入唐大使藤原朝臣清河御作歌一首

大使藤原朝臣清河歌一首

大納言藤原家餞入唐使歌三首

天平五年贈入唐使歌一首　并短歌

三形沙彌の、左大臣に贈れる歌二首

天平勝寶三年正月二日、雾れる雪殊に多し。守大伴宿禰家持の館にて宴せる歌一首

三日、介内藏忌寸繩麻呂の館に宴樂せし時、大伴家持の作れる歌一首

同じ日、椽久米朝臣廣繩の作れる歌一首

遊行女婦蒲生娘子の歌一首

同じ日、酒酣にして更深け鶏鳴くに、内藏伊美吉繩麻呂の作れる歌一首

守大伴家持の和ふる歌一首

太政大臣藤原家の縣犬養命婦の、天皇に奉れる歌一首

死ぎにし妻を悲み傷む歌一首　并に短歌

二月二日、判官久米廣繩、正税帳を以ちて京師に入らむとす。仍りて大伴家持の作れる歌一首

四月十六日、大伴家持の霍公鳥を詠める歌一首

春日にて神を祭りし日、藤原太后の、入唐大使藤原朝臣清河に賜ひて作りませる歌

大使藤原朝臣清河の歌一首

大納言藤原家にて入唐使を餞する歌三首

天平五年、入唐使に贈れる歌一首　并に短歌

天平勝寶三年

春日祭神之日

阿倍朝臣老人遣唐時奉母悲別歌一首

七月十七日越中守家持遷任少納言作悲別歌贈貽朝集使椽久米廣繩之舘二首

八月四日内藏伊美吉繩麿館設國厨之餞大帳使大伴家持時家持作歌一首

五日平旦大帳使大伴家持和内藏伊美吉繩麿捧盞歌一首

正税使椽久米朝臣廣繩事畢退任遇越前國椽大伴池主舘時久米廣繩詠芽子花作歌一首

大伴家持和歌一首

向京路上依興預作侍宴應　詔歌一首　并短歌

爲壽左大臣橘卿預作歌一首

十月廿二日於左大辨紀飯麿朝臣家宴歌三首

壬申年乱平定以後歌二首

閏三月於衛門督古慈悲宿祢家餞之入唐副使同胡麿等歌二首

高麗朝臣福信遣於難波賜肴酒入唐使藤原朝臣清河等御歌一首　并短歌

阿倍朝臣老人の唐に遣さえし時、母に奉りて別を悲む歌一首

七月十七日、越中守家持の、少納言に遷任せらえて別を悲む歌を作り、朝集使椽久米廣繩の舘に贈り貽せる二首

八月四日、内藏伊美吉繩麻呂の館に國厨を設けて、大帳使大伴家持を餞せし時、家持の作れる歌一首

五日平旦、大帳使大伴家持の、内藏伊美吉繩麻呂の盞を捧ぐるに和ふる一首

正税使椽久米朝臣廣繩の、事畢へて任に退り、越前の國の椽大伴池主の館に遇ひし時、久米廣繩の、芽子の花を詠めて作れる歌一首

大伴家持の和ふる歌一首

京に向ふ路上にして、興に依りて、かねて作れる宴に侍して詔に應ふる歌一首　并に短歌

左大臣橘卿を壽がむ爲にかねて作れる歌一首

十月二十二日、左大辨紀飯麻呂朝臣の家に宴せる歌三首

壬申の年の亂の平定せし以後の歌二首

閏三月、衛門督古慈悲宿禰の家にて、入唐の副使同じ胡麻呂等を餞せる歌二首

高麗朝臣福信を難波に遣して、肴酒を入唐使藤原朝臣清河等に賜へる御歌一首　并に短歌

越中守家持

椽久米廣繩之舘

國厨之餞

椽久米朝臣廣繩

椽大伴池主

向京路上依興預作

侍宴

預作歌

餞之入唐副使

遣於難波

大伴家持爲應　詔儲作歌一首 幷短歌

天皇太后共幸於大納言藤原卿家之時賜黃葉澤蘭於大納言藤原卿幷陪從大夫御歌一首

十一月八日　太上天皇於左大臣橘朝臣宅肆宴歌四首

廿五日新嘗會肆宴應　詔歌六首

廿七日林王宅餞之但馬按察使橘奈良麿朝臣宴歌三首

五年正月四日於治部少輔石上朝臣宅嗣家宴歌三首

十一日大雪述拙懷歌三首

十二日侍內裏聞千鳥喧歌一首

二月十九日於左大臣橘家宴見攀折柳條歌一首

廿三日依興作歌二首

廿五日詠鶬鶊歌一首

大伴家持の、詔に應へむ爲に、儲けて作れる歌一首 幷に短歌

天皇、太后、共に大納言藤原卿の家に幸しし時、黃葉せる澤蘭を、大納言藤原卿幷せて陪從の大夫に賜へる御歌一首

十一月八日、太上天皇の、左大臣橘朝臣の宅にて、肆宴きこしめせる歌四首

二十五日、新嘗會の肆宴に、詔に應ふる歌六首

二十七日、林王の宅にて、但馬按察使橘奈良麻呂朝臣を餞せる宴の歌三首

五年正月四日、治部少輔石上朝臣宅嗣の家にて宴せる歌三首

十一日、大雪ふりしに、拙き懷を述ぶる歌三首

十二日、內裏に侍ひて千鳥の喧くを聞く歌一首

二月十九日、左大臣橘家の宴にて、攀ぢ折れる柳の條を見る歌一首

二十三日、興に依りて作れる歌二首

二十五日、鶬鶊を詠める歌一首

藤原卿家之時
黃葉澤蘭
陪從大夫

餞之但馬按察使

拙懷

天平勝寶二年三月一日之暮眺矚春苑桃李花作二首

春苑紅尒保布桃花下照道尒出立嫛嬬

吾園之李花可庭尒落波太礼能未遺在可母

見飜翔鴫作歌一首

春儲而物悲尒三更而羽振鳴志藝誰田尒加須牟

二日攀柳黛思京師歌一首

春日尒張流柳乎取持而見者京之大路所念

攀折堅香子草花歌一首

物部乃八十嫛嬬等之挹乱寺井之於乃堅香子之花

見歸鴈歌二首

燕來時尒成奴等鴈之鳴者本鄕思都追雲隱喧

春設而如此歸等母秋風尒黃葉山乎不超來有米也

一云春去者歸此鴈

夜裏聞千鳥喧歌二首

夜具多知尒寐覺而居者河瀨尋情毛之努尒鳴知等理賀毛

夜降而鳴河波知登里宇倍之許曾昔人母之努比來尒家礼

天平勝寶二年三月一日の暮に、春の苑の桃李の花を眺矚めて作れる二首

四一三九 春の苑紅にほふ桃の花下照る道に出で立つ嫛嬬

四一四〇 吾が園の李の花か庭に落るはだれのいまだ殘りたるかも

飜び翔る鴫を見て作れる歌一首

四一四一 春まけて物がなしきにさ夜更けて羽ぶき鳴く鴫誰が田にか住む

二日、柳黛を攀ぢて京師を思ぶ歌一首

四一四二 春の日に萌れる柳を取り持ちて見れば京の大路おもほゆ

堅香子草の花を攀ぢ折る歌一首

四一四三 もののふの八十嫛嬬等が挹みまがふ寺井の上の堅香子の花

歸る雁を見る歌二首

四一四四 燕來る時になりぬと雁がねは本鄕思びつつ雲隱り喧く

四一四五 春設けてかく歸るとも秋風に黃葉の山を超え來ざらめや 一に云ふ、春されば歸るこの雁

夜の裏に千鳥の喧くを聞く歌二首

四一四六 夜ぐたちに寐覺めて居れば河瀨尋め情もしのに鳴く千鳥かも

四一四七 夜ぐたちて鳴く河千鳥うべしこそ昔の人もしのび來にけれ

作二首（元文）「作歌二首」

下照道尒（元文）「下昭道尒」

遺在可母

見飜翔鴫

物悲尒（元文）「悲尒」

大路所念（元類）「大路所思」

物部乃（元類）「物部能」

八十嫛嬬等之（元古葉＊）「八十乃嫛嬬等之」

不超來有米也（元文）「不越來有米也」

聞千鳥喧歌（元類）「聞千鳥鳴歌」

寐覺而居者

情毛之努尒（元類）「情母之奴尒」

之努比來尒家礼（元）「之奴比來尒家礼」

聞曉鳴雉歌二首

四一四八 楢の野にさ躍る雉いちじろく啼にしも哭かむ隱妻かも
楢野尒左乎騰流鳰灼然啼尒之毛將哭己母利豆麻可母

四一四九 あしひきの八峯の雉なき響む朝明の霞見ればかなしも
足引之八峯之鳰鳴響朝開之霞見者可奈之母

遙聞泝江船人之唱歌一首

四一五〇 朝床に聞けば遙けし射水河朝漕ぎしつつ唱ふ船人
朝床尒聞者遙之射水河朝己藝思都追唱船人

三日、守大伴宿禰家持之舘宴歌三首

四一五一 今日の爲と思ひて標めしあしひきの峯の上の櫻かく咲きにけり
今日之爲等思標之足引乃峯上之櫻如此開尒家里

四一五二 奥山の八峯の椿つばらかに今日は暮らさね丈夫のとも
奥山之八峯乃海石榴都婆良可尒今日者久良佐祢大夫之徒

漢人毛桟浮而遊云今日曾和我勢故花縵世余

四一五三 漢人も桟浮べて遊ぶとふ今日ぞ我が夫子花縵せよ
八日、白き大鷹を詠める歌一首 幷に短歌

安志比奇乃山坂超而去更年緒奈我久科坂在故志尒之須米婆大王之敷座國者京師乎母此間毛於夜自等心尒波念毛能可良語左氣見左久流人眼乏等於毛比志繁曾己由惠尒情奈具也等秋附婆芽子開尒保布石瀬野尒馬太伎由吉氏乎知許知尒鳥布美立白塗之小鈴毛由良尒安波勢也理布里左氣見都追伊伎騰保流

四一五四 あしひきの 山坂越えて 去き更る 年の緒長く しなざかる 越にし住めば 大王の 敷きます國は 都をも 此間も同じと 心には 思ふものから 語り放け 見放くる人眼乏しみと 思し繁し 其ゆゑに 情和ぐやと 秋づけば 芽子咲きにほふ 石瀬野に 馬だき行きて 遠近に 鳥踏み立て 白塗の 小鈴もゆらに 合せ遣り ふり放け見つつ いきどほる 心の中を 思ひ伸べ うれしびながら 枕づく 妻屋のうちに 鳥座結ひ 据ゑてぞ我が飼ふ 眞白節の鷹

四一五五 矢形尾の眞白の鷹を屋戸に据ゑ掻き撫で見つつ飼はくし好しも

鸕を潜くる歌一首 幷に短歌

四一五六 あらたまの 年往き更り 春されば 花のみにほふ あしひきの 山下響み 落ち激ち 流る辟田の 河の瀬に 年魚兒さ走る 島つ鳥 鸕養伴なへ 篝さし なづさひ行けば 吾妹子が 形見がてらと 紅の 八入に染めて おこせたる 衣の裾も 徹りて濡れぬ

四一五七 紅の衣にほはし辟田河絕ゆることなく吾かへりみむ

四一五八 毎年に鮎し走らば辟田河鸕八頭潜けて河瀬たづねむ

季春三月九日、出擧の政せむとして蒼江の村に行く。道の上に、目を物花に屬くる詠、幷せて興の中に作れる歌

滋谿の埼を過ぎて巖の上の樹を見る歌一首 樹の名は未詳

四一五九 磯の上の都萬麻を見れば根を延へて年深からし神さびにけり
磯上之都萬麻乎見者根乎延而年深有之神左備尒家里

船人之唱

思標之

桃浮而（文）「桟浮而」

花縵世余（細）「花縵世奈」

白大鷹（元細）「白太鷹」

安志比奇乃（元類）「安志比奇能」

山坂超而（元文）「山坂越而」

安波勢也理（類）「安波勢也里」

矢形尾乃

井短歌

奈頭佐比由氣婆（元類）「奈頭佐比由氣波」

紅乃（元）「紅」

吾等脊牟

神左備尒家里（元類）「神佐備尒家里」

悲世間無常歌一首 幷短歌

天地之遠始欲俗中波常無毛能等語續奈我良倍伎多
礼天原振左氣見婆照月毛盈具之家里安之比奇能山
之木末毛春去婆花開尒保比秋都氣婆露霜負而風交
毛美知落家利宇都勢美母如是能未奈良之紅能伊呂
母宇都呂比奴婆多麻能黑髮變朝之咲暮加波良比吹
風能見要奴我其登久逝水能登麻良奴其等久常毛奈
久宇都呂布見者尒波多豆美流滯等騰未可祢都母
言等波奴木尙春開秋都氣婆毛美知遲良久波常乎奈
美許曾 一云常無牟等曾
宇都世美能常無見者世間尒情都氣受弖念日曾於保
伎 一云嘆日曾於保吉

豫作七夕歌一首

妹之袖和礼枕可牟河湍尒霧多知和多礼左欲布氣奴
刀尒

慕振勇士之名歌一首 幷短歌

知智乃實乃父能美許等波播蘇葉乃母能美己等於保
呂可尒情盡而念良牟其子奈礼夜母大夫夜無奈之久

世間の常無きを悲む歌一首 幷に短歌

四一六〇 天地の 遠き始よ 俗中は 常無きものと 語り續ぎ ながらへ來れ 天の原 ふり放け見れば 照る月も 盈昃しけり あしひきの 山の木末も 春されば 花咲きにほひ 秋づけば 露霜負ひて 風交り 黃葉散りけり、うつせみも かくのみならし 紅の 色もうつろひ ぬばたまの 黑髮變り 朝の咲 暮變らひ 吹く風の 見えぬが如く 逝く水の 留らぬ如く 常も無く 移ろふ見れば 行潦 流るる涙 止みかねつも

四一六一 言問はぬ木すら春咲き秋づけば黃葉散らくは常を無みこそ
一に云ふ、常なけむとぞ

四一六二 うつせみの常無き見れば世のなかに情つけずて念ふ日ぞ多き
一に云ふ、嘆く日ぞ多き

かねて作れる七夕の歌一首

四一六三 妹が袖我まくらかむ河の瀨に霧立ち渡れさ夜ふけぬとに

勇士の名を振ふを慕ふ歌一首 幷に短歌

四一六四 ちちの實の 父の命 柞葉の 母の命 おほろかに 情盡して 念ふらむ その子なれやも 丈夫や 空しくあるべき

盈具之家里（文矢）「盈興之家里」

等騰未可祢都母（元）「等騰米可祢都母」

言等波奴

秋都氣婆

知智乃實乃

可在梓弓須惠布理於許之投矢毛知千尋射和多之劒
刀許思尒等理波伎安之比奇能八峯布美越左之麻久
流情不障後代乃可多利都具倍久名乎多都倍志母
大夫者名乎之立倍之後代尒聞繼人毛可多里都具我
祢

右二首追和山上憶良臣作歌

詠霍公鳥幷時花歌一首 幷短歌

每時尒伊夜目都良之久八千種尒草木花左伎喧鳥乃
音毛更布耳尒聞眼尒視其等尒宇知嘆之奈要宇良夫
礼之努比都追有爭波之尒許能久礼罷四月之立者欲
其母理尒鳴霍公鳥從古昔可多里都藝都流鷽之宇都
之眞子可母菖蒲花橘乎嬾嬬良我珠貫麻泥尒赤根刺
晝波之賣良尒安之比奇乃八丘飛超夜干玉乃夜者須
我良尒曉月尒向而往還喧等余牟礼杼何如將飽足

反歌二首

每時旅米頭良之久咲花乎折毛不折毛見良久之余志
母

每年尒來喧毛能由惠霍公鳥聞婆之努波久不相日乎

梓弓 末振り起し 投矢以ち 千尋射渡し 劍刀 腰に取り 佩き あしひきの 八峯踏み越え さし任くる 情障らず 後の代の 語り繼ぐべく 名を立つべしも

四一六五 丈夫は名をし立つべし後の代に聞き繼ぐ人も語り續ぐがね

右の二首は、山上憶良臣の作れる歌に追ひ和ふる。

霍公鳥幷せて時の花を詠める歌一首 幷に短歌

四一六六 時ごとに いやめづらしく 八千種に 草木花咲き 喧く鳥の 音もかはらふ 耳に聞き 眼に視るごとに うち嘆き 萎えうらぶれ 偲びつつ あらそふ間に 木の晩闇 四月し立てば 夜ごもりに 鳴く霍公鳥 古昔ゆ 語り繼ぎつる 鶯の うつし眞子かも 菖蒲 花橘を 孃子等が 珠貫くまでに 茜さす 晝はしめらに あしひきの 八丘飛び越え ぬばたまの 夜はすがらに 曉の 月に向ひて 往き還り 喧き響むれど 何如飽き足らむ

反歌二首

四一六七 時ごとにいやめづらしく咲く花を折りも折らずも見らくし好しも

四一六八 每年に來喧くものゆゑ霍公鳥聞けばしのばく逢はぬ日を多み

大夫者

宇知嘆

可多里都藝都流（元類）「可多理都藝都流」

野干玉乃（元類）「野干玉之」

見良久之余志母（元類）「見良久之余志毛」

於保美（毎年謂之等之乃波）

右廿日雖未及時依興預作也

爲家婦贈在京尊母所誂作歌一首（幷短歌）

霍公鳥來喧五月尒咲尒保布花橘乃香吉於夜能御言
朝暮尒不聞日麻祢久安麻射可流夷尒之居者安之比
奇乃山乃多乎里尒立雲乎余曾能未見都追嘆蘇良夜
須家奈久尒念蘇良苦伎毛能乎奈吳乃海部之潛取云
眞珠乃見我保之御面多太向將見時麻泥波松柏乃佐
賀延伊麻佐祢尊安我吉美（御面謂之美於毛和）

反歌

白玉之見我保之君乎不見久尒夷尒之乎礼婆伊家流
等毛奈之

廿四日應立夏四月節也因此廿三日之暮忽思霍公鳥曉
喧聲作歌二首

常人毛起都追聞曾霍公鳥此曉尒來喧始音

霍公鳥來喧響者草等良牟花橘乎屋戸尒波不殖而

贈京丹比家歌一首

妹乎不見越國敞尒經年婆吾情度乃奈具流日毛無

（毎年はとしのはと謂ふ）

右は二十日、いまだ時に及らねども、興に依りかねて作れり。

家婦が京に在す尊母に贈らむ爲に、誂へらえて作れる

歌一首（幷に短歌）

四一六九 霍公鳥　來鳴く五月に　咲きにほふ　花橘の　香ぐはしき
親の御言　朝暮に　聞かぬ日まねく　天ざかる　夷にし居れ
ば　あしひきの　山のたをりに　立つ雲を　外のみ見つつ
歎くそら　安けなくに　念ふそら　苦しきものを　奈吳の海
人の　潛き取るとふ　眞珠の　見が欲し御面　直向ひ　見む
時までは　松柏の　榮えいまさね　尊き吾が君（御面はみおもわと謂ふ）

反歌

四一七〇 白玉の見が欲し君を見ず久に夷にし居れば生けるともなし

二十四日は、立夏四月の節に應れり。これに因りて二十
三日の暮に、忽に霍公鳥の曉に喧かむ聲を思ひて作れる

歌二首

四一七一 常人も起きつつ聞くぞ霍公鳥この　曉に來喧く初聲

四一七二 霍公鳥來鳴き響まば草取らむ花橘を屋戸には植ゑずて

京なる丹比家に贈れる歌一首

四一七三 妹を見ず越の國邊に年經れば吾が情神の和ぐる日もなし

預作也

咲尒保布

余曾能未見都追
夜須家奈久尒（元）「夜須家久奈久尒」

御面謂之美於毛和

反歌（元）「反歌一首」

來喧響者（元類）「來鳴響者」

追和筑紫大宰之時春苑梅歌一首

春裏之樂終者梅花手折乎伎都追遊尒可有

右一首廿七日依興作之

詠霍公鳥二首

霍公鳥今來喧曾無菖蒲可都良久麻泥尒加流〻日安
良米也（毛能波三箇辭闕之）

我門從喧過度霍公鳥伊夜奈都可之久雖聞飽不足（毛能波氐尒乎六箇辭闕之）

四月三日贈越前判官大伴宿祢池主霍公鳥歌不勝感舊
之意述懷一首（幷短歌）

和我勢故等手携而曉來者出立向暮去者振放見都追
念暢見奈疑之山尒八峯尒波霞多奈婢伎谿敞尒波海
石榴花咲宇良悲春之過者霍公鳥伊也之伎喧奴獨耳
聞婆不怜毛君与吾隔而戀流利波山飛超去而明立者
松之狹枝尒暮去者向月而菖蒲玉貫麻泥尒鳴等余米
安寐不令宿君乎奈夜麻勢

吾耳聞婆不怜毛霍公鳥丹生之山邊尒伊去鳴尒毛

霍公鳥夜喧乎爲管和我世兒乎安宿勿令寐由米情在

筑紫の大宰の時の春の苑の梅の歌に追ひて和ふる一首

四一七四 春の裏の樂しき終は梅の花手折りをきつつ遊ぶにあるべし

右の一首は、二十七日、興に依りて作れる。

霍公鳥を詠める二首

四一七五 霍公鳥今來喧き始む菖蒲蘰くまでに離るる日あらめや（毛能波三箇の辭を闕く）

四一七六 我が門ゆ喧き過ぎ渡る霍公鳥いや懷しく聞けど飽き足らず（毛能波氐尒乎六箇の辭を闕く）

四月三日、越前の判官大伴宿禰池主に贈れる霍公鳥の歌、
舊りにしを感づる意に勝へずして懷を述ぶる一首（幷に短歌）

四一七七 我が夫子と　手携はりて　曉け來れば　出で立ち向ひ　暮さ
れば　ふり放け見つつ　念ひ暢べ　見和ぎし山に　八峯には
霞たなびき　谿邊には　椿花咲き　うらがなし　春し過ぐれ
ば　霍公鳥　彌しき喧きぬ　獨のみ　聞けばさぶしも　君と
吾　隔てて戀ふる　礪波山　飛び越え行きて　明け立たば
松のさ枝に　暮さらば　月に向ひて　菖蒲　玉貫くまでに
鳴き響め　安寐宿しめず　君を惱ませ

四一七八 吾のみ聞けばさぶしも霍公鳥丹生の山邊にい行き鳴くにも

四一七九 霍公鳥夜喧をしつつ我が夫子を安宿な寐しめゆめ情あれ

大宰之時（元文）「太宰之時」

春苑（略）「春花」

念暢（元類）「念鴨」

松之狹枝尒

安寐不令宿

吾耳

丹生之山邊尒（元文）

伊去鳴尒毛

和我世兒乎（元類）「我世兒乎」

安宿勿令寐

不飽感霍公鳥之情述懷作歌一首 并短歌

春過而夏來向者足檜木乃山呼等余米左夜中尒鳴霍
公鳥始音乎聞婆奈都可之菖蒲花橘乎貫交可頭良久
麻泥尒里響喧渡礼騰母尚之努波由

反歌三首

左夜深而曉月尒影所見而鳴霍公鳥聞者夏借

霍公鳥雖聞不足網取尒獲而奈都氣奈可礼受鳴金

霍公鳥飼通良婆今年經而來向夏波麻豆將喧乎

從京師贈來歌一首

山吹乃花執持而都礼毛奈久可礼尒之妹乎之努比都
流可毛

右四月五日從留女之女郎所送也

詠山振花歌一首 并短歌

宇都世美波戀乎繁美登春麻氣氏念繁波引攀而折毛
不折毛每見情奈疑牟等繁山之谿敞尒生流山振乎屋
戸尒引殖而朝露尒仁保敞流花乎每見念者不止戀志
繁母

山吹乎屋戸尒殖豆波見其等尒念者不止戀已曾益礼

霍公鳥を感づる情に飽かず、懐を述べて作れる歌一首 并に短歌

春過ぎて 夏來向へば あしひきの 山よび響め さ夜中に
鳴く霍公鳥 初聲を 聞けば懐し 菖蒲 花橘を 貫き交へ
蘰くまでに 里響め 喧き渡れども 尚ししのばゆ

反歌三首

左夜ふけて 曉月に影見えて 喧く霍公鳥聞けばなつかし

霍公鳥聞けども飽かず網取りに獲りて懐けな離れず鳴くがね

霍公鳥飼ひ通せらば今年經て來向ふ夏はまづ喧きなむを

京師より贈り來れる歌一首

山吹乃花執持而都礼毛奈久可礼尒之妹乎之努比都
流可毛

右は四月五日、郷に留れる女郎より送れるなり。

山振の花を詠める歌一首 并に短歌

宇都世美波戀乎繁美登春設而 念繁者 引攀而
折りも折らずも 見る毎に 情和ぎむと 繁山の 谿邊に生
ふる 山振を 屋戸に引き植ゑて 朝露に にほへる花を
見る毎に 念は止まず 戀し繁しも

山吹を屋戸に植ゑては見るごとに念ひは止まず戀こそ益れ

四一八〇 春過ぎて
鳴く霍公鳥 初聲を 聞けば懐し 菖蒲 花橘を 貫き交へ
蘰くまでに 里響め 喧き渡れども 尚ししのばゆ

四一八一 さ夜ふけて 曉月に影見えて 喧く霍公鳥聞けばなつかし

四一八二 霍公鳥聞けども飽かず網取りに獲りて懐けな離れず鳴くがね

四一八三 霍公鳥飼ひ通せらば今年經て來向ふ夏はまづ喧きなむを

京師より贈り來れる歌一首

四一八四 山吹乃花執持而都礼毛奈久可礼尒之妹乎之努比都
流可毛

右は四月五日、郷に留れる女郎より送れるなり。

四一八五 うつせみは 戀を繁みと 春設けて 念繁けば 引き攀ぢて
折りも折らずも 見る毎に 情和ぎむと 繁山の 谿邊に生
ふる 山振を 屋戸に引き植ゑて 朝露に にほへる花を
見る毎に 念は止まず 戀し繁しも

四一八六 山吹を屋戸に植ゑては見るごとに念ひは止まず戀こそ益れ

菖蒲
可頭良久麻泥尒（類）「可頭良久麻而尒」

霍公鳥
來向夏波（元文）「來向夏婆」

留女之女郎

屋戸尒引殖而

戀志繁母

山吹乎

六日遊覽布勢水海作歌一首 并短歌

念度知大夫能許乃久礼繁思乎見明良米情也良牟等
布勢乃海尒小船都良奈米眞可伊可氣伊許藝米具礼
婆乎布能浦尒霞多奈婢伎垂姫尒藤浪喫而濱淨久白
波左和伎及〻尒戀波末佐礼杼今日耳飽足米夜母如
是已曾旅年乃波尒春花之繁盛尒秋葉能黃色時尒安
里我欲比見都追思努波米此布勢能海乎

藤奈美能花盛尒如此許曾浦已藝廻都追年尒之努波
米

贈水烏越前判官大伴宿祢池主歌一首 并短歌

天離夷等之在者彼所此間毛同許己呂曾離家等之乃
經去者宇都勢美波物念之氣思曾許由恵尒情奈具左
尒霍公鳥喧始音乎橘珠尒安倍貫可頭良伎氏遊波之
母麻須良乎〻等毛奈倍立而舛羅河奈頭左比泝平瀬
尒波左泥刺渡早湍尒水烏乎潜都追月尒日尒之可志
安蘇婆祢波之伎和我勢故
舛羅河湍乎尋都追和我勢故波宇可波多〻佐祢情奈
具左尒

六日、布勢の水海に遊覽して作れる歌一首 并に短歌

念ふどち 丈夫の 木の暗の 繁き思を 見明め 情遣ら
むと 布勢の海に 小船連竝め 眞櫂懸け い漕ぎ廻れば
乎布の浦に 霞たなびき 垂姫に 藤浪咲きて 濱淨く 白
浪騒き しくしくに 戀は益れど 今日のみに 飽き足らめ
やも かくしこそ いや毎年に 春花の 繁き盛に 秋の葉
のもみつる時に 在り通ひ 見つつ偲ばめ この布勢の海
を

水烏を越前の判官大伴宿禰池主に贈れる歌一首 并に短歌

天ざかる 夷としあれば 彼所此間も 同じ心ぞ 家離り
年の經ぬれば うつせみは 物念繁し 其故に 情慰に
霍公鳥 喧く初聲を 橘の 珠に合へ貫き 蘰きて 遊ばく
はしも 丈夫を 伴へ立ちて 舛羅河 なづさひ泝り 本瀬
には 小網指し渡し 早き瀬に 水烏を潜けつつ 月に日に
然し遊ばね 愛しき我が夫子

舛羅河瀬を尋ねつつ我が夫子は鵜河立たさね情慰に

許乃久礼（元類）「許能久礼」

白波左和伎

旅年乃波尒（元類）「旅年能波尒」

藤奈美能

等毛奈倍立而

舛羅河

早湍尒

水烏乎潜都追

波之伎和我勢故

宇可波多〻佐祢

情奈具左尒

鸕河立取左牟安由能之我波多波吾等尒可伎無氣念之念婆

右九日附使贈之

詠霍公鳥幷藤花一首 幷短歌

桃花紅色尒丹保比多流面輪乃宇知尒青柳乃細眉根乎咲麻我理朝影見都追孋嬬良我手尒取持有眞鏡蓋上山尒許能久礼乃繁谿邊乎呼等余米旦飛渡暮月夜可蘇氣伎野邊遙々尒喧霍公鳥立久久等羽觸尒知良須藤浪乃花奈都可之美引攀而袖尒古伎礼都染婆染等母

霍公鳥鳴羽觸尒毛落尒家利盛過良志藤奈美能花

一云落奴倍美袖尒古伎納都藤浪乃花也

同九日作之

更怨霍公鳥晩喧歌三首

霍公鳥喧渡奴等告礼騰毛吾聞都我受花波須疑都追吾幾許斯努波久不知尒霍公鳥伊頭敞能山乎鳴可將超

月立之日欲里乎伎都追敲自努比麻泥騰伎奈可奴霍公鳥可母

贈京人歌二首

妹尒似草等見之欲里吾標之野邊之山吹誰可手乎里之

都礼母奈久可礼尒之毛能登人者雖云不相日麻祢美念曾吾爲流

右爲贈留女之女郎所誂家婦作也 女郎者卽大伴家持之妹

十二日遊覽布勢水海船泊於多祜灣望見藤花各述懷作歌四首

藤奈美乃影成海之底清美之都久石乎毛珠等曾吾見流

守大伴宿祢家持

多祜乃浦能底左倍尒保布藤奈美乎加射之氏將去不見人之爲

次官內藏忌寸繩麿

伊佐左可尒念而來之乎多祜乃浦尒開流藤見而一夜可經

判官久米朝臣廣繩

四一九一 鸕河立ち取らさむ鮎の其が鰭は吾に掻き向け念ひし念はば

右は九日、使に附けて贈れる。

霍公鳥幷せて藤の花を詠める一首 幷に短歌

四一九二 桃の花 紅色に にほひたる 面輪のうちに 青柳の 細き眉根を 咲みまがり 朝影見つつ 蘰子等が 手に取り持たる まそ鏡 二上山に 木の暗の 繁き谿邊を 呼び響め 朝飛び渡り 夕月夜 かそけき野邊に はろばろに 喧く霍公鳥 立ち潜くと 羽觸に散らす 藤浪の 花なつかしみ 引き攀ぢて 袖に扱入れつ 染まば染むとも

四一九三 霍公鳥鳴く羽觸にも散りにけり盛過ぐらし藤浪の花

一に云ふ、ちりぬべみ 袖にこきれつ藤浪の花

同じ九日に作れる。

更に霍公鳥の喧くこと晩きを怨むる歌三首

四一九四 霍公鳥鳴き渡りぬと告ぐれども吾聞き繼がず花は過ぎつつ

四一九五 吾が幾許慕ばく知らに霍公鳥何方の山を鳴きか超ゆらむ

四一九六 月立ちし日より招きつつうち慕び待てど來鳴かぬ霍公鳥かも

之我波多波

面輪乃宇知尒(元)「面輪能宇知尒」

咲麻我理

繁谿邊乎呼等余米(元・代初書入)「呼等米尒」

袖尒古伎納都

斯努波久不知尒(元類)「斯奴波久不知尒」

敲自努比(細)「敲自努比」

麻泥騰伎奈可奴霍公鳥可母

四一九七 妹に似る草と見しより吾が標めし野邊の山吹誰か手折りし

四一九八 つれも無く離れにしものと人はいへど逢はぬ日まねみ念ひぞ吾がする

右は、郷に留れる女郎に贈らむ爲に、家婦に誂へらえて作れり 女郎は卽大伴家持の妹

四一九九 十二日、布勢の水海に遊覽し、船を多祜の灣に泊てて、藤の花を望み見て各懷を述べて作れる歌四首

藤奈美の影なす海の底清み沈著く石をも珠とぞ吾が見る

守大伴宿禰家持

四二〇〇 多祜の浦の底さへにほふ藤浪を挿頭して行かむ見ぬ人の爲

次官內藏忌寸繩麻呂

四二〇一 いささかに念ひて來しを多祜の浦に咲ける藤見て一夜經ぬべし

判官久米朝臣廣繩

留女之女郎

大伴家持

多祜灣(元文)「多祜灣」

望見藤花(元文)「望見藤花」

藤奈美乃(元類)「藤奈美能」

多祜乃浦能

多祜乃浦尒

藤奈美乎借廬小造灣廻爲流人等波不知小海部等可見良牟

久米朝臣繼麻呂

恨霍公鳥不喧歌一首

家小去而奈小乎將語安之比奇能山霍公鳥一音毛奈家

判官久米朝臣廣繩

見攀折保寶葉歌二首

吾勢故我捧而持流保寶我之婆安多可毛似加青蓋

講師僧惠行

皇神祖之遠御代三世波射布折酒飲等伊布曾此保寶我之波

守大伴宿祢家持

還時濱上仰見月光歌一首

之夫多小乎指而吾行此濱小月夜安伎氏牟馬之末時停息

守大伴宿祢家持

廿二日贈判官久米朝臣廣繩霍公鳥怨恨歌一首　并短歌

四二〇二藤浪を假廬に造り灣廻する人とは知らに海人とか見らむ

四二〇三家に行きて何を語らむあしひきの山霍公鳥一音も鳴け

四二〇四吾が夫子が捧げて持たる厚朴あたかも似るか青き蓋

四二〇五皇神祖の遠御代御代はい布き折り酒飲むといふぞ此の厚朴

四二〇六澁谿をさして吾が行くこの濱に月夜飽きてむ馬暫し停め

四二〇七此間にして背向に見ゆる我が夫子が垣内の谿に明けされば榛のさ枝に夕されば藤の繁みに

四二〇八吾が幾許待てど來鳴かぬ霍公鳥獨聞きつつ告げぬ君かも

四二〇九谿近く家は居れども木高くて里はあれども霍公鳥いまだ來鳴かず鳴く聲を聞かまく欲りと朝には門に出で立ち夕には谷を見渡し戀ふれども一聲だにもいまだ聞えず

四二一〇藤浪の繁りは過ぎぬあしひきの山霍公鳥などか來鳴かぬ

右は二十三日、椽久米朝臣廣繩の和ふる。

處女墓の歌に追ひて同ふる一首　并に短歌

皇神祖之

霍公鳥

此間小之氐曾我比小所見和我勢故我垣都能谿小安氣左礼婆榛之狹枝小暮左礼婆藤之繁美小遙〻小鳴霍公鳥吾屋戸能殖木橘花小知流時乎麻太之美伎奈加奈久曾許波不怨之可礼杼毛谷可多頭伎氐家居有君之聞都〻追氣奈久毛宇之

反歌一首

吾幾許麻氐騰來不鳴霍公鳥比等里聞都追不告君可母

詠霍公鳥歌一首　并短歌

多小知可久伊敞波乎礼騰母許太加久氐佐刀波安礼騰母保登等藝須伊麻太伎奈加受奈久許惠乎伎可麻久保理登安志多小波可度小伊氐多知由布敞小波多小乎美和多之古布礼騰毛比等已惠太小母伊麻太伎己要受

敷治奈美乃志氣里波須疑奴安志比紀乃夜麻保登等藝須奈騰可伎奈賀奴

右廿三日椽久米朝臣廣繩和

追同處女墓歌一首　并短歌

時乎麻太之美（類）「時乎麻多之美」

安志多小波

椽久米朝臣廣繩和（元文）「椽久米朝臣廣繩和」

追同處女墓歌

古尒有家流和射乃久須婆之伎事跡言繼知努乎登古
宇奈比壯子乃宇都勢美能名乎競爭登玉剋壽毛須底
弖相爭尒嬬問爲家留嫵嬬等之聞者悲左春花乃尒太
要盛而秋葉之尒保比尒照有惜身之壯尙大夫之語勞
美父母尒啓別而離家海邊尒出立朝暮尒滿來潮之八
隔浪尒靡珠藻乃節間毛惜命乎露霜之過麻之尒家礼
奥墓乎此間定而後代之聞繼人毛伊也遠尒思努比尒
勢餘等黃楊小櫛之賀左志家良之生而靡有
乎等女等之後乃表跡黃楊小櫛生更生而靡家良思母

右五月六日依興大伴宿祢家持作之

安由乎疾奈吳乃浦廻尒与須流浪伊夜千重之伎尒戀
度可母

右一首贈京丹比家

挽歌一首 幷短歌

天地之初時從宇都曾美能八十伴男者大王尒麻都呂
布物跡定有官尒之在者天皇之命恐夷放國乎治等足
日木山河阻風雲尒言者雖通正不遇日之累者思戀氣
衝居尒玉桙之道來人之傳言尒吾尒語良久波之伎餘

四二一 古に ありけるわざの くすばしき 事と言ひ繼ぐ 血沼
壯士 菟原壯士の うつせみの 名を爭ふと たまきはる
壽も捨てて 爭に 嬬問しける 孃子等が 聞けば悲しさ
春花の にほえさかえて 秋の葉の にほひに照れる あた
らしき 身の壯すら 丈夫の 語いたはしみ 父母に 啓し
別れて 家離り 海邊に出で立ち 朝暮に 滿ち來る潮の
八重浪に 靡く珠藻の 節の間も 惜しき命を 露霜の 過
ぎましにけれ 奥墓を 此處と定めて 後の代の 聞き繼ぐ
人も いや遠に しのびにせよと 黃楊小櫛 しか刺しけら
し 生ひて靡けり

四二二 孃子等が後のしるしと黃楊小櫛生ひ更り生ひて靡きけらしも

右は五月六日、興に依りて大伴宿禰家持の作れる。

四二三 東風を疾み奈吳の浦廻に寄する浪いや千重しきに戀ひ渡るか
も

右の一首は、京なる丹比家に贈れる。

挽歌一首 幷に短歌

四二四 天地の 初の時ゆ うつそみの 八十伴の男は 大王に 服
從ふものと 定まれる 官にしあれば 天皇の 命かしこみ
夷ざかる 國を治むと あしひきの 山河へなり 風雲に
言は通へど 正に遇はず 日の累れば 思ひ戀ひ 氣衝き居

宇奈比壯子乃（元文）「宇奈比牡子乃」
名乎競爭登（元文）「名乎競爭等」
身之壯尙（文）「身之莊尙」
生而靡有
後乃表跡（元類）「後能表跡」
安由乎疾
奈吳乃浦廻尒（元類）「奈吳能浦廻尒」
戀度可母（元類）「戀渡可母」
正不遇

之君者比來宇良佐備弖嘆息伊麻須世間之猒家口都
良家苦開花毛時尒宇都呂布宇都勢美毛無常阿里家
利足千根之御母之命何如可毛時之波將有乎眞鏡見
礼杼母不飽珠緒之惜盛尒立霧之失去如久置露之消
去之如玉藻成靡許伊臥逝水之留不得常枉言哉人之
云都流逆言乎人之告都流梓弧爪夜音之遠音尒毛聞
者悲旅庭多豆水流涕留可祢都母

反歌二首

遠音毛君之痛念跡聞都礼婆哭耳所泣相念吾者
世間之無常事者知良牟乎情盡莫大夫尒之氐

右大伴宿祢家持弔聟南右大臣家藤原二郎之喪慈
母患也 五月廿七日

霖雨晴日作歌一首

宇能花乎令腐霖雨之始水逝緣木積成將因兒毛我母
見漁夫火光歌一首

鮪衝等海人之燭有伊射里火之保尒可將出吾之下念
乎

右二首五月

るに 玉桙の 道來る人の 傳言に 吾に語らく 愛しきよ
し 君はこのごろ うらさびて 嘆かひ坐す 世のなかの
憂けく辛けく 開く花も 時にうつろふ うつせみも 常無
くありけり たらちねの 御母の命 何しかも 時しはあら
むを まそ鏡 見れども飽かず 珠の緒の 惜しき盛に 立
つ霧の 失せぬる如く 置く露の 消ぬるが如 玉藻なす
靡き反倒し 逝く水の 留みかねつと 枉言や 人の云ひつ
る 逆言を 人の告げつる 梓弓 爪ひく夜音の 遠音にも
聞けば悲み 庭潦 流るる涕 留みかねつも

反歌二首

四二五 遠音にも君が嘆くと聞きつれば哭のみし泣かゆ相念ふ吾は

四二六 世のなかの常無きことは知るらむを情盡すな丈夫にして

右は、大伴宿禰家持の、聟南右大臣家の藤原二郎が慈母を喪へる患を弔へるなり 五月二十七日。

霖雨の晴るる日に作れる歌一首

四二七 卯の花を腐す霖雨の始水逝き緣る木糞如す緣らむ兒もがも

漁夫の火光を見る歌一首

四二八 鮪衝くと海人の燭せる漁火のほにか出でなむ吾が下念を

右の二首は、五月

宇都勢美毛
消去之如
枉言哉
五月廿七日
霖雨晴日

吾屋戸之芽子開尓家理秋風之將吹乎待者伊等遠旅
可母

右一首六月十五日見芽子早花作之

従京師來贈歌一首　并短歌

和多都民能可味能美許等乃美久之宜尓多久波比於
伎氏伊都久等布多麻尓末佐里氏於毛倣里之安我故
尓波安礼騰宇都世美乃与能許等和利等麻須良乎能
比伎能麻尓麻仁之奈謝可流古之地乎左之氏波布都
多能和可礼尓之欲理於吉都奈美等乎牟麻欲妣伎於
保夫祢能由久良々々々耳於毛可宜尓毛得奈民延都
々可久古非婆意伊豆久安我未氣太志安倍牟可母

反歌一首

可久婆可里古非之久安良婆末蘇可我美旅奴比等吉
奈久安良麻之母能乎

右二首大伴氏坂上郎女賜女子大孃也

九月三日宴歌二首

許能之具礼伊多久奈布里曾和藝毛故尓美勢牟我多
米尓母美知等里氏牟

四二九 吾が屋戸の芽子咲きにけり秋風の吹かむを待たばいと遠みかも

右の一首は、六月十五日、芽子の早花を見て作れる。

京師より來り贈れる歌一首　并に短歌

四二〇 海神の　神の命の　御櫛笥に　貯ひ置きて　齋くとふ　珠に
勝りて　思へりし　吾が子にはあれど　うつせみの　世の理
と　丈夫の　引のまにまに　級ざかる　越路を指して　延ふ
蔦の　別れにしより　沖つ浪　撓む眉引　大船の　ゆくらゆ
くらに　面影に　もとな見えつつ　かく戀ひば　老づく吾が
身　蓋し堪へむかも

反歌一首

四二一 かくばかり戀しくあらばまそ鏡見ぬ日時なくあらましものを

右の二首は、大伴氏坂上郎女の、女子の大孃に賜へる。

九月三日宴の歌二首

四二二 この時雨いたくな降りそ吾妹子に見せむが爲に黄葉採りてむ

比伎能麻尓麻仁之奈謝可流古之地乎左之氏波布都
和可礼尓之欲理於吉都奈美等乎牟麻欲妣伎於
古非之久安良婆末蘇可我美旅奴比等吉奈久安良婆
末蘇可我美旅奴比
等乎牟麻欲妣伎

右一首椽久米朝臣廣縄作之

安乎尓与之奈良比等美牟登和我世故我之米家牟毛
美知都知尓於知米也毛

右一首守大伴宿祢家持作之

朝霧之多奈引田爲尓鳴鴈乎留得哉吾屋戸能波義

右一首歌者幸於芳野宮之時藤原皇后御作但年月
未審詳十月五日河邊朝臣東人傳誦云尓

足日木之山黄葉尓四頭久相而將落山道乎公之超麻
久

右一首同月十六日饌之朝集使少目秦伊美吉石竹
時守大伴宿祢家持作之

雪日作歌一首

此雪之消遺時尓去來歸奈山橘之實光毛將見

右一首十二月大伴宿祢家持作之

大殿之此廻之雪莫踏祢數毛不零雪曾山耳尓零之雪
曾由米緣勿人哉莫履祢雪者

反歌一首

有都々毛御見多麻波牟曾大殿乃此母等保里能雪奈

右の一首は、椽久米朝臣廣縄の作れる。

四二三 あをによし奈良人見むと我が夫子が標めけむ黄葉地に落ちめやも

右の一首は、守大伴宿禰家持の作れる。

四二四 朝霧のたなびく田居に鳴く鴈を留み得むかも吾が屋戸の芽子

右の一首の歌は、芳野の宮に幸しし時、藤原皇后の作らせる。但し年月いまだ審詳ならず。十月五日、河邊朝臣東人が傳へ誦みて云へり。

四二五 あしひきの山の黄葉に雫合ひて散らむ山道を公が越えまく

右の一首は、同じ月十六日、朝集使少目秦忌寸石竹を餞せし時、守大伴宿禰家持の作れる。

雪の日に作れる歌一首

四二六 この雪の消遺る時にいざ行かな山橘の實の光るも見む

右の一首は、十二月、大伴宿禰家持の作れる。

四二七 大殿の　この廻の　雪な蹈みそね　しばしばも　零らざる雪ぞ　山のみに　零りし雪ぞ　ゆめ緣るな　人や　な履みそね　雪は

反歌一首

四二八 在りつつも見し給はむぞ大殿の此の廻の雪な履みそね

椽久米朝臣廣縄
（元文）「椽久米朝臣廣縄」
都知尓於知米也毛

芳野宮
藤原皇后（元文）

公之超麻久

布美曾祢

右二首歌者三形沙弥承贈左大臣藤原北卿之語依誦之也聞之傳者笠朝臣子君復後傳讀者越中國椽久米朝臣廣縄是也

天平勝寶三年

新年之初者旧年小雪踏平之常如此小毛我

右一首歌者正月二日守舘集宴於時零雪殊多積有四尺焉卽主人大伴宿祢家持作此歌也

落雪乎腰小奈都美已參來之印毛有香年之初小

右一首三日會集介内藏忌寸縄麿之舘宴樂時大伴宿祢家持作之

于時積雪彫成重巖之起奇巧綵發草樹之花屬此椽久米朝臣廣縄作歌一首

奈泥之故波秋咲物乎君宅之雪巖小左家理家流可母

遊行女婦蒲生娘子歌一首

雪嶋巖小殖有奈泥之故波千世小開奴可君之揷頭小

于是諸人酒酣更深鶏鳴因此主人内藏伊美吉縄麿作歌一首

右の二首の歌は、三形沙彌の、贈左大臣藤原北卿の語を承け、依りて誦めるなり。聞きて傳ふるは、笠朝臣子君なり。復後に傳へ讀むは、越中の國の椽久米朝臣廣縄なり。

天平勝寶三年

新しき年のはじめは彌年に雪踏み平し常かくにもが

右の一首の歌は、正月二日、守の舘に集宴しき。時に零れる雪殊に多く、積みて四尺あり。卽主人大伴宿禰家持、此の歌を作れり。

降る雪を腰になづみて參り來し驗もあるか年の初に

右の一首は、三日、介内藏忌寸縄麿の舘に會集ひて宴樂せし時、大伴宿禰家持の作れる。

時に雪を積みて、重巖の起てるを彫り成し、奇巧に草樹の花を綵め發く。此に屬きて椽久米朝臣廣縄の作れる歌一首

奈泥は秋咲くものを君が家の雪の巖に咲けりけるかも

遊行女婦蒲生娘子の歌一首

雪の島巖に植ゑたる瞿麥は千世に咲かぬか君が揷頭に

ここに諸人、酒酣に夜更け鶏鳴く。此に因りて主人内藏伊美吉縄麿呂の作れる歌一首

藤原北卿 依誦之也（元）「作誦之也」

年之初者 零雪

打羽振鶏者鳴等母如此許零敷雪小君伊麻左米也母

守大伴宿祢家持和歌一首

鳴鶏者旧及鳴杼落雪之千重小積許曾吾等立可氐

祢

太政大臣藤原家之縣犬養命婦奉　天皇歌一首

天雲乎富呂小布美安太之鳴神毛今日小益而可之古

家米也母

右一首傳誦椽久米朝臣廣縄也

悲傷死妻歌一首　并短歌　作主未詳

天地之神者無可礼也愛吾妻離流光神鳴波多嬬嬬携

手共將有等念之小情違奴將言爲便將作爲便不知小

木綿手次肩小取挂倭文幣乎手小取持氐勿令離等和

礼波雖禱卷而寐之妹之手本者雲小多奈妣久

反歌一首

寐小等念氐之可毛夢耳小手本卷寐等見者須便奈之

右二首傳誦遊行女婦蒲生是也

二月二日會集于守舘宴作歌一首

君之往若久小有婆梅柳誰与共可吾縵可卒

打羽振鶏者鳴等母如此許零敷雪小君伊麻左米也母

守大伴宿祢家持和歌一首

鳴鶏者旧及鳴杼落雪之千重小積許曾吾等立可氐

祢

太政大臣藤原家之縣犬養命婦奉　天皇歌一首

天雲乎富呂小布美安太之鳴神毛今日小益而可之古

家米也母

右一首傳誦椽久米朝臣廣縄也

悲傷死妻歌一首　并短歌　作主未詳

天地之神者無可礼也愛吾妻離流光神鳴波多嬬嬬携

手共將有等念之小情違奴將言爲便將作爲便不知小

木綿手次肩小取挂倭文幣乎手小取持氐勿令離等和

礼波雖禱卷而寐之妹之手本者雲小多奈妣久

反歌一首

寐小等念氐之可毛夢耳小手本卷寐等見者須便奈之

右二首傳誦遊行女婦蒲生是也

二月二日會集于守舘宴作歌一首

君之往若久小有婆梅柳誰与共可吾縵可卒

縣犬養命婦 富呂小布美安太之

作主未詳 吾妻離流

肩小取挂（元類）「肩小取掛」 倭文幣乎（元・類）「倭父幣乎」 手小取持氐 卷而寐之

寐小等 手本卷寐等（元文）「手本卷寐等」

二月二日 守舘 吾縵可卒

右判官久米朝臣廣繩以正稅帳應入京師仍守大伴
宿祢家持作此歌也但越中風土梅花柳絮三月初唉
耳

詠霍公鳥歌一首

二上之峯於乃繁尒許毛□尒之彼霍公鳥待騰來奈賀
受

右四月十六日大伴宿祢家持作之

春日祭神之日藤原太后御作歌一首卽賜入唐大使藤原
朝臣清河

大舶尒眞楫繁貫此吾子乎韓國邊遣伊波敞神多智

大使藤原朝臣清河歌一首

春日野尒伊都久三諸乃梅花榮而在待還來麻泥

大納言藤原家餞之入唐使等宴日歌一首 卽主人卿作之

天雲乃去還奈牟毛能由惠尒念曾吾爲流別悲美

民部少輔多治眞人土作歌一首

住吉尒伊都久祝之神言等行得毛來等毛舶波早家無

大使藤原朝臣清河歌一首

荒玉之年緒長吾念有兒等尒可戀月近附奴

右は、判官久米朝臣廣繩、正稅帳を以ちて京師に入らむとす。
仍りて守大伴宿禰家持、此の歌を作れり。但し越中の風土、
梅花柳絮三月に初めて咲くのみ。

霍公鳥を詠める歌一首

二上の峯の上の繁に籠りにしその霍公鳥待てど來鳴かず

右は四月十六日、大伴宿禰家持の作れる。

春日にて神を祭りし日に、藤原太后の作りませる歌一首、
卽入唐大使藤原朝臣清河に賜へる。

大船尒眞楫繁貫き此の吾子を韓國へ遣る齋へ神たち

大使藤原朝臣清河の歌一首

春日野に齋く三諸の梅の花榮えて在り待て還り來るまで

大納言藤原家にて入唐使等を餞する宴の日の歌一首 卽主人卿の作れる

天雲の去き還りなむもの故に念ひぞ吾がする別かなしみ

民部少輔多治眞人土作の歌一首

住吉に齋く祝が神言と行くとも來とも船は早けむ

大使藤原朝臣清河の歌一首

荒玉の年緒長く吾が念へる兒らに戀ふべき月近づきぬ

許毛□尒之彼霍公鳥待騰來奈賀受（四二三九）
（元）「許毛尒之彼霍公鳥待騰未來奈賀受」

卽主人卿作之（四二四〇）

多治眞人土作（四二四一）

清河（元細）「清河參議從四位下遣唐使」（四二四二）

青丹与之（元文）平城京師由三津尒舶能利（元文）「三津尒船能利」（四二四三）

礒乃埼〻（四二四四）

反歌（元）「反歌一首」（四二四五）

忽値（四二四六）

何以能旱（四二四七）

あらたまの（四二四八）

天平五年贈入唐使歌一首 并短歌 作主未詳

虛見都山跡乃國青丹与之平城京師由忍照難波尒久
太里住吉乃三津尒舶能利直渡日入國尒所遣和我勢
能君乎懸麻久乃由〻志恐伎墨吉乃吾大御神舶乃倍
尒宇之波伎座舶騰毛尒御立座而佐之与良牟礒乃埼
〻許藝波底牟泊〻尒荒風浪尒安波世受平久率而可
敞理麻世毛等能國家尒

反歌

奥浪邊波莫越君之舶許藝可敞里來而津尒泊麻泥

阿倍朝臣老人遣唐時奉母悲別歌一首

天雲能曾伎伎敞能伎波美吾念有伎美尒將別日近成奴

右件歌者傳誦之人越中大目高安倉人種麻呂是也但
年月次者隨聞之時載於此焉

以七月十七日遷任少納言仍作悲別之歌贈貽朝集使椽
久米朝臣廣繩之舘二首

既滿六載之期忽値遷替之運於是別舊之悽心中鬱結拭
滋之袖何以能旱因作悲歌二首式遺莫忘之志其詞曰

荒玉乃年緒長久相見氏之彼心引將忘也毛

天平五年、入唐使に贈れる歌一首 并に短歌 作主いまだ詳ならず

天平五年、入唐使に贈れる歌一首 并に短歌 作主未詳

虛見都山跡乃國青丹与之平城京師由忍照難波尒久
太里住吉乃三津尒舶乘り直渡り日の入る國に
遣さる 吾が夫の君を 懸けまくの ゆゆしかしこき 住吉
の 吾が大御神 舶の舳に 領き坐し 船艫に 御立いまし
て さし寄らむ 礒の埼埼 榜ぎ泊てむ 泊泊に 荒き風
浪に遇はせず 平けく 率て歸りませ 本の國家に

反歌

奥浪邊波莫越君之舶許藝可敞里來而津尒泊つるまで

阿倍朝臣老人遣唐時奉母悲別歌一首

天雲の曾伎伎敞の遠隔の極わが念へる君に別れむ日近くなりぬ

右の件の歌は、傳へ誦める人、越中大目高安倉人種麻呂なり。
但し年月の次は聞きし時のままにまに此に載す。

七月十七日を以ちて、少納言に遷任せらえ、仍りて別を
悲む歌を作りて、朝集使椽久米朝臣廣繩の舘に贈り貽せ
る二首

既に六載の期に滿ち、忽に遷替の運に値ふ。ここに舊き
に別るる悽、心中に鬱結す。滋を拭ふ袖、何を以ちてか
能く旱かむ。因りて悲の歌二首を作りて、式ちて忘るる
莫き志を遺す。其の詞に曰はく

荒玉乃年緒長久相見氏之彼心引將忘良延米也毛

伊波世野尒秋芽子之努藝馬並始鷹獵太尒不爲哉將別

右八月四日贈之

便附大帳使取八月五日應入京師因此以四日設國厨之饌於介內藏伊美吉繩麿舘餞之于時大伴宿祢家持作歌一首

之奈謝可流越尒五箇年住〻而立別麻久惜初夜可毛

五日平旦上道仍國司次官已下諸僚皆共視送於時射水郡大領安努君廣嶋門前之林中預設餞饌之宴于此大帳使大伴宿祢家持和內藝伊美吉繩麿捧盞之歌一首

玉桙之道尒出立往吾者公之事跡乎負而之將去

正稅帳使椽久米朝臣廣繩事畢退任適遇於越前國椽大伴宿祢池主之舘仍共飲樂也于時久米朝臣廣繩矚芽子花作歌一首

君之家尒殖有芽子之始花乎折而挿頭奈客別度知

大伴宿祢家持和歌一首

立而居而待登待可祢伊泥氐來之君尒於是相挿頭都流波疑

四二四九 伊波世野に秋芽子凌ぎ馬竝めて始鷹獵だに爲ずや別れむ

右は、八月四日贈れる。

便大帳使に附きて、八月五日を取りて京師に入らむとす。此に因りて、四日を以ちて、國厨の饌を設け、介內藏伊美吉繩麻呂の館に餞しき。時に大伴宿禰家持の作れる歌一首

四二五〇 しなざかる越に五箇年住み住みて立ち別れまく惜しき初夜かも

五日平旦、上道す。仍りて國司の次官已下諸僚、皆共に視送る。時に射水の郡の大領安努君廣島が門前の林の中に、かねて餞饌の宴を設く。時に大帳使大伴宿禰家持の、內藏伊美吉繩麻呂の盞を捧ぐる歌に和ふる一首

四二五一 玉桙の道に出で立ち往く吾は君が言とを負ひてし行かむ

正稅帳使椽久米朝臣廣繩、事畢へて任に退り、適越前の國の椽大伴宿禰池主の舘に遇ひ、仍りて共に飲樂しき。時に久米朝臣廣繩の、芽子の花を矚て作れる歌一首

四二五二 君が家に植ゑたる芽子の初花を折りて挿頭さな旅別るどち

大伴宿禰家持の和ふる歌一首

四二五三 立ちて居て待てど待ちかね出でて來し君に此處に遇ひ挿頭しつる芽子

大帳使

惜初夜可毛（元文）「惜初夜可母」

餞饌之宴（元類）「饌餞之宴」

于此（元類）「于時」

大帳使

折而挿頭奈

挿頭都流波疑

向京路上依興預作侍宴應　詔歌一首 幷短歌

蜻嶋山跡國乎天雲尒磐船浮等母尒倍尒眞可伊繁貫伊許藝都追國看之勢志氐安母里麻之掃平千代累旂嗣繼尒所知來流天之日繼等神奈我良吾皇乃天下治賜者物乃布能八十友之雄乎撫賜等登能倍賜食國之四方之人乎母安夫左波受恨賜者從古昔無利之瑞多婢末祢久申多麻比奴手拱而事無御代等天地日月等登聞仁万世尒記續牟曾八隅知之吾大皇秋花之我色〻尒見賜明米多麻比酒見附榮流今日之安夜尒貴左

反歌一首

秋時花種尒有等色別尒見之明良牟流今日之貴左

爲壽左大臣橘卿預作歌一首

古昔尒君之三代經仕家利吾大主波七世申祢

十月廿二日於左大辨紀飯麿朝臣家宴歌三首

手束弓手尒取持而朝獵尒君者立之奴多奈久良能野尒

右一首治部卿船王傳誦之久迩京都時歌 未詳作主也

明日香河〻戸乎清美後居而戀者京旅遠曾伎奴

京に向ふ路上にして、興に依りてかねて作れる宴に侍ひて詔に應ふる歌一首 幷に短歌

四二五四 秋津島　大倭の國を　天雲に　磐船浮べ　艫に舳に　眞櫂繁貫き　い榜ぎつつ　國見し爲して　天降り坐し　掃ひ平け　千代累ね　いや嗣繼に　知らし來る　天の日嗣と　神ながら　吾が皇の　天の下　治め賜へば　物部の　八十伴の雄を　撫で賜ひ　齊へ賜ひ　食國の　四方の人をも　あぶさはず　愍み賜へば　古昔ゆ　無かりし瑞　遍まねく　申したまひぬ　手拱きて　事無き御代と　天地　日月と共に　萬世に　記し續がむぞ　やすみしし　吾が大皇　秋の花　其がいろいろに　見し賜ひ　明めたまひ　酒宴　榮ゆる今日の　あやに貴さ

反歌一首

四二五五 秋の時花種にあれど色別に見し明むる今日の貴さ

左大臣橘卿を壽がむ爲に、かねて作れる歌一首

四二五六 古に君が三代經て仕へけり吾が大主は七世申さね

十月二十二日、左大辨紀飯麻呂朝臣の家にて宴せる歌三首

四二五七 手束弓手に取り持ちて朝獵に君は立たしぬ棚倉の野に

右の一首は、治部卿船王の傳へ誦める久邇の京都の時の歌。いまだ作主を詳にせず。

四二五八 明日香河河戸を清み後れ居て戀ふれば京いや遠そきぬ

向京路上歌一首

食國之（文細）「食國毛」

安夫左波受（略）「安天左波受」

恨賜者

安夜尒貴左

吾大主波

君者立之奴（元類）「君者立去奴」

未詳作主也（元文）「未詳作至也」

右一首左中辨中臣朝臣清麿傳誦古京時歌也

十月之具礼能常可吾世古河屋戸乃黃葉可落所見

右一首少納言大伴宿祢家持當時矚梨黃葉作此歌也

壬申年之乱平定以後歌二首

皇者神尒之座者赤駒之腹婆布田爲乎京師跡奈之都

右一首大將軍贈右大臣大伴卿作

大王者神尒之座者水鳥乃須太久水奴麻乎皇都常成通 作者未詳

右件二首天平勝寶四年二月二日聞之卽載於玆也

閏三月於衞門督大伴古慈悲宿祢家餞之入唐副使同胡麿宿祢等歌二首

韓國尒由伎多良波之氐可敞里許牟麻須良多家乎尒美伎多弖麻都流

右一首多治比眞人鷹主壽副使大伴胡麿宿祢也

梳毛見自屋中毛波可自久左麻久良多婢由久伎美乎伊波布等毛比氐 作者未詳

右件歌傳誦大伴宿祢村上同清繼等是也

右の一首は、左中辨中臣朝臣清麻呂の傳へ誦める古き京の時の歌なり。

四二五九 十月時雨の常か吾が夫子が屋戸のもみち葉ちりぬべし見ゆ

右の一首は、少納言大伴宿禰家持の、當時梨の黃葉を矚て此の歌を作れる。

壬申の年の亂の平定せし以後の歌二首

四二六〇 皇は神にし坐せば赤駒の匍匐ふ田井を京師となしつ

右の一首は、大將軍贈右大臣大伴卿の作れる。

四二六一 大王は神にし坐せば水鳥の多集く水沼を皇都となしつ 作者いまだ詳ならず

右の件の二首は、天平勝寶四年二月二日聞きて、卽玆に載す。

閏三月、衞門督大伴古慈悲宿禰の家にて、入唐の副使同じ胡麻呂宿禰等を餞せる歌二首

四二六二 韓國に往き足はして歸り來む丈夫武雄に御酒たてまつる

右の一首は、多治比眞人鷹主の、副使大伴胡麻呂宿禰を壽げる。

四二六三 梳も見じ屋中も掃かじ草枕旅行く君を齋ふと思ひて 作者いまだ詳ならず

右の件の歌を傳へ誦めるは、大伴宿禰村上、同じ清繼等なり。

皇都常成通
作者未詳（元文）「作者不詳」

作者未詳（元類）「作主未詳」

314229

勅 從四位上高麗朝臣福信遣於難波賜酒肴入唐使藤原朝臣清河等御歌一首 幷短歌

虛見都山跡乃國波水上波地往如久船上波床座如大神乃鎭在國曾四舶〻能倍奈良倍平安早渡來而還事奏日尒相飮酒曾斯豊御酒者

反歌一首

四舶早還來等白香着朕裳裾尒鎭而將待

右發遣 勅使幷賜酒樂宴之日月未得詳審也

爲應 詔儲作歌一首 幷短歌

安之比奇能八峯能宇倍能都我能木能伊也繼〻尒松根能絕事奈久靑丹余志奈良能京師尒万代尒國所知等安美知之吾大皇乃神奈我良於母保之賣志弖豊宴見爲今日者毛能乃布能八十伴雄能嶋山尒安可流橘宇受尒指紐解放而千年保伎保吉等餘毛之惠良〻〻尒仕奉乎見之貴者

反歌一首

須賣呂伎能御代万代尒如是許曾見爲安伎良目米立年之葉尒

從四位上高麗朝臣福信に勅して、難波に遣し、酒肴を入唐使藤原朝臣清河等に賜へる御歌一首 幷に短歌

四二六四 そらみつ 大倭の國は 水の上は 地往く如く 船の上は 床に坐る如 大神の 鎭へる國ぞ 四の舶 舶の舳竝べ 平安けく 早渡り來て 返言 奏さむ日に 相飮まむ酒ぞ この豐御酒は

反歌一首

四二六五 四の舶はや還り來と白香著け朕が裳の裾に鎭ひて待たむ

右は勅使を發遣し、幷せて酒を賜ひて樂宴せし日月いまだ詳審なることを得ず。

詔に應へむ爲に儲けて作れる歌一首 幷に短歌

四二六六 あしひきの 八峯の上の 樛の木の いや繼繼に 松が根の絕ゆること無く あをによし 奈良の京師に 萬代に 國知らさむと やすみしし 吾が大皇の 神ながら 思ほしめして 豐の宴 見す今日の日は もののふの 八十伴の雄の島山に あかる橘 髻華に刺し 紐解き放けて 千年壽ぎ壽ぎとよもし ゑらゑらに 仕へ奉るを 見るが貴さ

反歌一首

四二六七 天皇の御代萬代にかくしこそ見し明めめ立つ毎年に

虛見都

〻能倍奈良倍

斯豊御酒者（元細）「期豊御酒者」

早還來等

見爲今日者

保吉等餘毛之（元）「保伎吉等餘毛之」

見之貴者

見爲安伎良目米（文類）「見爲安伎良目」

右二首大伴宿祢家持作之

天皇太后共幸於大納言藤原家之日黃葉澤蘭一株拔取令持內侍佐ゝ貴山君遣賜大納言藤原卿幷陪從大夫等御歌一首

命婦誦曰

此里者繼而霜哉置夏野尒吾見之草波毛美知多里家利

十一月八日在於左大臣橘朝臣宅肆宴歌四首

余曾能未尒見者有之乎今日見者年尒不忘所念可母

右一首　太上天皇御歌

牟具良波布伊也之伎屋戶母大皇之座牟等知者玉之可麻思乎

右一首左大臣橘卿

松影乃清濱邊尒玉敷者君伎麻佐牟可清濱邊尒

右一首右大辨藤原八束朝臣

天地尒足之照而吾大皇之伎座婆可母樂伎小里

右一首少納言大伴宿祢家持　未奏

廿五日新嘗會肆宴應　詔歌六首

右の二首は、大伴宿禰家持の作れる。

天皇、太后、共に大納言藤原家に幸しし日、黄葉せる澤蘭一株を抜き取りて、内侍佐佐貴山君に持たしめ、大納言藤原卿幷せて陪従の大夫等に遣賜へる御歌一首

命婦誦みて曰はく

この里は継ぎて霜や置く夏の野に吾が見し草はもみちたりけり

十一月八日、左大臣橘朝臣の宅に在して、肆宴きこしめせる歌四首

外のみに見てはありしを今日見ては年に忘れず念ほゆるかも

右の一首は、太上天皇の御歌

葦はふ賤しき屋戸も大皇の坐さむと知らば玉敷かましを

右の一首は、左大臣橘卿

松蔭の清き濱邊に玉敷かば君來まさむか清き濱邊に

右の一首は、右大辨藤原八束朝臣

天地に足し照して吾が大皇敷き坐せばかも樂しき小里

右の一首は、少納言大伴宿禰家持　いまだ奏さず

二十五日、新嘗會の肆宴に、詔に應ふる歌六首

天地与相左可延牟等大宮乎都可倍麻都礼婆貴久宇礼之伎

右一首大納言巨勢朝臣

天尒波母五百都綱波布万代尒國所知牟等五百都綱延ふ　古歌に似

奈波布　似古歌而未詳

右一首式部卿石川年足朝臣

天地与久万斗尒万代尒都可倍麻都良牟黒酒白酒乎

右一首從三位文室智努眞人

嶋山尒照在橘宇受尒左之仕奉者卿大夫等

右一首右大辨藤原八束朝臣

袖垂而伊射吾苑尒鶯乃木傳令落梅花見尒

右一首大和國守藤原永手朝臣

足日木乃夜麻之多日影可豆良家流宇倍尒也左良尒梅乎之努波牟

右一首少納言大伴宿禰家持

廿七日林王宅餞之但馬按察使橘奈良麻呂朝臣宴歌三首

能登河乃後者相牟之麻之久母別等伊倍婆可奈之久母

母在香

四二七三 天地と相榮えむと大宮を仕へまつれば貴くうれしき

右の一首は、大納言巨勢朝臣

四二七四 天にはも五百つ綱延ふ萬代に國知らさむと五百つ綱延ふ　古歌に似 詳ならず

右の一首は、式部卿石川年足朝臣

四二七五 天地と久しきまでに萬代に仕へまつらむ黒酒白酒を

右の一首は、從三位文室智努眞人

四二七六 島山に照れる橘髻華に挿し仕へまつるは卿大夫等

右の一首は、右大辨藤原八束朝臣

四二七七 袖垂れていざ吾が苑に鶯の木傳ひ散らす梅の花見に

右の一首は、大和の國の守藤原永手朝臣

四二七八 あしひきの山下日蔭蘰ける上にや更に梅を賞ばむ

右の一首は、少納言大伴宿禰家持

二十七日、林王の宅にて但馬按察使橘奈良麻呂朝臣を餞せる宴の歌三首

四二七九 能登河の後には逢はむしましくも別るといへば悲しくもある

巨勢朝臣

久万呂尒

文室智努眞人（元）「文屋知奴麿眞人」

藤原永手朝臣（元文）「藤原永平朝臣」

梅乎之努波牟（元類）梅乎之奴波牟」

右一首治部卿船王

立別君我伊麻左婆之奇嶋能人者和礼自久伊波比弖麻多牟

右一首右京少進大伴宿祢黑麿

白雪能布里之久山乎越由加牟君乎曾母等奈伊吉能乎尒念

左大臣換尾云伊伎能乎尒須流然猶喩曰如前誦之也

右一首少納言大伴宿祢家持

五年正月四日於治部少輔石上朝臣宅嗣家宴歌三首

辞繁不相問尒梅花雪尒之乎礼氐宇都呂波牟可母

右一首主人石上朝臣宅嗣

梅花開有之中尒布敷賣流波戀哉許母礼留雪乎待等可

右一首中務大輔茨田王

新年始尒思共伊牟礼氐乎礼婆宇礼之久母安流可

右一首大膳大夫道祖王

十一日大雪落積尺有二寸因述拙懷歌三首

右の一首は、治部卿船王

四二八〇立ち別れ君が往さば礒城島の人は吾じく齋ひて待たむ

右の一首は、右京少進大伴宿禰黑麻呂

四二八一白雪の降りしく山を越え行かむ君をぞもとな氣の緒に念ふ

左大臣尾を換へて云ふ、いきの緒にする。然れども猶喩して曰はく、前の如く誦めといへり。

右の一首は、少納言大伴宿禰家持

五年正月四日、治部少輔石上朝臣宅嗣の家にて宴せる歌三首

四二八二事繁み相問はなくに梅の花雪に萎れてうつろはむかも

右の一首は、主人石上朝臣宅嗣

四二八三梅の花咲けるが中に含めるは戀や籠れる雪を待つとか

右の一首は、中務大輔茨田王

四二八四新しき年の始に思ふどちい群れて居ればうれしくもあるか

右の一首は、大膳大夫道祖王

十一日、大雪落り、積ること尺有二寸あり。因りて拙き懷を述ぶる歌三首

右京少進

越由加牟

戀哉許母礼留

大宮能内尒毛外尒母米都良之久布礼留大雪莫踏祢乎之

御苑布能竹林尒鷽波之波奈吉尒之乎雪波布利都〻鷽能鳴之可伎都尒尒保敞理之梅此雪尒宇都呂布良牟可

十二日侍於内裏聞千鳥喧作歌一首

河渚尒母雪波布礼〻之宮裏智杼利鳴良之爲牟等己呂奈美

二月十九日於左大臣橘家宴見攀折柳條歌一首

青柳乃保都枝与治等理可豆良久波君之屋戸尒之千年保久等曾

廿三日依興作歌二首

春野尒霞多奈毗伎宇良悲許能暮影尒鷽奈久母

和我屋度能伊佐左村竹布久風能於等能可蘇氣伎許能由布敞可母

廿五日作歌一首

宇良〻〻尒照流春日尒比婆理安我里情悲毛比登里志於母倍婆

四二八五大宮の内にも外にもめづらしく降れる大雪な踏みそね惜し

四二八六御苑生の竹の林に鶯はしば鳴きにしを雪は降りつつ

四二八七鶯の鳴きし垣内ににほへりし梅この雪にうつろふらむか

十二日、内裏に侍ひて千鳥の喧くを聞きて作れる歌一首

四二八八河渚にも雪は降れれし宮の裏に千鳥鳴くらし居む處無み

二月十九日、左大臣橘家の宴にて、攀ぢ折れる柳の條を見る歌一首

四二八九青柳の上つ枝攀ぢ執り蘰くは君が屋戸にし千年壽ぐとぞ

二十三日、興に依りて作れる歌二首

四二九〇春の野に霞たなびきうらがなしこの夕かげに鶯鳴くも

四二九一わが屋戸のいささ群竹吹く風の音のかそけきこの夕かも

二十五日、作れる歌一首

四二九二うらうらに照れる春日に雲雀あがり情悲しも獨しおもへば

宮裏（元類）「宮乃裏」

二月十九日

霞多奈毗伎

比登里志於母倍婆（文細）「比等里志於母倍婆」

春日遲〻鶬鶊正啼悽惆之意非歌難撥耳仍作此歌式展締緒但此卷中不稱作者名字徒錄年月所處緣起者皆大伴宿祢家持裁作歌詞也

萬葉集卷第十九

春日遲遲として、鶬鶊正に啼く。悽惆の意、歌にあらずば撥ひ難きのみ。仍りて此の歌を作り、式ちて締緒を展ぶ。但し此の卷の中、作者の名字を稱はず、徒年月所處緣起を錄せるは、皆大伴宿禰家持の裁作れる歌の詞なり。

萬葉集卷の第十九

春日遲〻
不稱(元文)「不偁」
裁作歌詞也

萬葉集卷第二十

幸行於山村之時先太上天皇詔陪從王賦和歌之時　天皇御口号一首

舍人親王應　詔奉和歌一首

天平勝寶五年八月十二日二三大夫等各提壺酒登高圓野聊述所心作歌三首

同六年正月四日氏族人等賀集于少納言大伴家持之宅宴飲歌三首

同七日　天皇太上天皇皇大后在於東常宮南大殿肆宴歌一首

三月十九日家持之庄門槻樹下宴飲歌二首

同月廿五日左大臣橘卿宴于山田御母之宅時少納言大伴家持矚時花作歌一首

詠霍公鳥歌一首

七夕歌八首

同月廿八日大伴宿祢家持歌一首

萬葉集卷の第二十

山村に幸行しし時、先の太上天皇、陪從の王に詔して和歌を賦ましめ給ひし時、天皇の御口號一首

舍人親王の、詔に應へて和へ奉れる歌一首

天平勝寶五年八月十二日、二三の大夫等、各壺酒を提げて高圓野に登り、聊所心を述べて作れる歌三首

同じ六年正月四日、氏族の人等、少納言大伴家持の宅に賀ぎ集ひて宴飲せる歌三首

同じ七日、天皇、太上天皇、皇大后、東の常の宮の南の大殿に在して肆宴きこしめせる歌一首

三月十九日、家持の庄の門の槻の樹の下にて宴飲せる歌二首

同じ月の二十五日、左大臣橘卿の、山田御母の宅に宴せし時、少納言大伴家持の、時の花を矚て作れる歌一首

霍公鳥を詠める歌一首

七夕の歌八首

同じ月の二十八日、大伴宿禰家持の歌一首

幸行於山村之時
八月十二日(元細)「八月十三日」
大伴家持之宅
皇大后
在於東常宮
肆宴歌
三月十九日
宴飲歌
同月廿五日
詠霍公鳥
大伴宿祢家持歌

兵部少輔大伴宿祢家持獨憶秋野聊述拙懷作歌六首
天平勝寶七歲乙未二月相替遣筑紫諸國防人等歌
二月六日防人部領使遠江國史生坂本朝臣人上進歌七首
二月七日相摸國防人部領使守從五位下藤原朝臣宿奈麿進歌三首
二月八日兵部少輔大伴家持追痛防人悲別之心作歌一首 幷短歌
同九日大伴宿祢家持作歌三首
同七日駿河國防人部領使守從五位下布勢朝臣人主進歌十首
同九日上總國防人部領使少目從七位下茨田連沙弥麿進歌十三首
同十三日兵部少輔大伴家持陳私拙懷歌一首 幷短歌
同十四日常陸國部領防人使大目正七位上息長眞人國嶋進歌十首
同日下野國防人部領使正六位上田口朝臣大戸進歌十一首

兵部少輔大伴宿禰家持の、獨秋の野を憶ひて、聊拙き懷を述べて作れる歌六首
天平勝寶七歲乙未二月、相替りて筑紫に遣さるる諸國の防人等の歌
二月六日、防人部領使遠江の國の史生坂本朝臣人上が進れる歌七首
二月七日、相摸の國の防人部領使守從五位下藤原朝臣宿奈麿が進れる歌三首
二月八日、兵部少輔大伴家持の、追ひて防人の別を悲む心を痛みて作れる歌一首 幷に短歌
同じ九日、大伴家持の作れる歌三首
同じ七日、駿河の國の防人部領使守從五位下布勢朝臣人主が進れる歌十首
同じ九日、上總の國の防人部領使少目從七位下茨田連沙彌麻呂が進れる歌十三首
同じ十三日、兵部少輔大伴家持の、私の拙き懷を陳ぶる歌一首 幷に短歌
同じ十四日、常陸の國の部領防人使大目正七位上息長眞人國嶋が進れる歌十首
同じ日、下野の國の防人部領使正六位上田口朝臣大戸が進れる歌十一首

兵部少輔大伴宿祢家持獨憶秋野
天平勝寶七歲
諸國防人等歌
二月六日
進歌七首
二月七日
進歌三首
二月八日
悲別之心
大伴宿祢家持
部領防人使
進歌十首

同十六日下總國防人部領使少目從七位下縣犬養宿祢淨人進歌十一首
同十七日兵部少輔大伴家持作歌三首
同十九日大伴家持爲防人情陳思作歌一首 幷短歌
同廿二日信濃國防人部領使進歌三首
同廿三日上野國防人部領使大目正六位下上毛野君駿河進歌四首
同廿三日兵部少輔大伴宿祢家持陳防人悲別之情歌一首 幷短歌
同廿日武藏國部領防人使椽正六位上安曇宿祢三國進歌十二首
昔年防人歌八首
三月三日撿挍防人勅使幷兵部使人等同集飲宴作歌三首
昔年相替防人歌一首
先太上天皇御製霍公鳥歌一首
陁妙觀應 詔奉和歌一首
冬日幸于靱負御井之時內命婦石川朝臣應 詔賦雪

同じ十六日、下總の國の防人部領使少目從七位下縣犬養宿祢淨人が進れる歌十一首
同じ十七日、兵部少輔大伴家持の作れる歌三首
同じ十九日、大伴家持の、防人の情に爲りて思を述べて作れる歌一首 幷に短歌
同じ二十二日、信濃の國の防人部領使が進れる歌三首
同じ二十三日、上野の國の防人部領使大目正六位下上毛野君駿河が進れる歌四首
同じ二十三日、兵部少輔大伴宿祢家持の、防人の別を悲む情を陳ぶる歌一首 幷に短歌
同じ二十日、武藏の國の部領防人使椽正六位上安曇宿祢三國が進れる歌十二首
昔年の防人の歌八首
三月三日、防人を撿挍する勅使幷せて兵部使人等の、同に集へる飲宴に作れる歌三首
昔年相替りし防人の歌一首
先の太上天皇の御製の、霍公鳥の歌一首
陁妙觀の、詔に應へて和へ奉れる歌一首
冬の日靱負の御井に幸しし時、內命婦石川朝臣の、詔に應へて

同十九日大伴家持
進歌三首
正六位下
同廿三日兵部少輔
大伴宿祢家持
同廿日
進歌十二首
昔年防人歌八首
陁妙觀
石川朝臣（元神）
「石河朝臣」

歌一首

上總國朝集使大椽大原眞人今城向京之時郡司妻女等餞之歌二首

五月九日兵部少輔大伴宿祢家持之宅集飲歌四首

同月十一日左大臣橘卿宴右大辨丹比國人眞人之宅歌三首

十八日左大臣宴於兵部卿奈良麻朝臣宅歌三首

八月十三日在內南安殿肆宴歌二首

十一月廿八日左大臣集於兵部卿橘奈良麻朝臣宅宴歌一首

天平元年班田之時使葛城王從山背國贈陁妙觀命婦等所歌一首

陁妙觀命婦報贈歌一首

天平勝寶八歲丙申二月朔乙酉廿四日戊申太上天皇太后幸行於河內離宮經信以壬子傳幸於難波宮也三月七日於河內國伎人鄉馬國人之家宴歌三首

廿日大伴宿祢家持依興作歌五首

喩族歌一首 并歌歌

雪を賦める歌一首

上總の國の朝集使大椽大原眞人今城の、京に向ひし時、郡司の妻女等の餞せる歌二首

五月九日、兵部少輔大伴宿禰家持の宅に集飲せる歌四首

同じ月の十一日、左大臣橘卿の、右大辨丹比國人眞人の宅に宴せる歌三首

十八日、左大臣の、兵部卿奈良麻呂朝臣の宅に宴せる歌三首

八月十三日、內の南の安殿に在して肆宴きこしめせる歌二首

十一月二十八日、左大臣の、兵部卿橘奈良麻呂朝臣の宅に集ひて宴せる歌一首

天平元年、班田の時の使葛城王の、山背の國より、陁妙觀命婦等の所に贈れる歌一首

陁妙觀命婦の報へ贈れる歌一首

天平勝寶八歲丙甲二月朔乙酉二十四日戊申、太上天皇、太后、河內の離宮に幸行し、信を經て壬子に難波の宮に傳幸し給ひき。三月七日、河內の國の伎人の鄉の馬國人の家にて宴せる歌三首

二十日、大伴宿禰家持の、興に依りて作れる歌五首

族に喩す歌一首 并に短歌

宅歌三首

肆宴歌二首(元細)

陁妙觀命婦等

陁妙觀命婦

經信(元神)「經」

依興作

大伴宿禰家持臥病悲無常欲脩道作歌二首

同家持願壽作歌一首

冬十一月五日小雷夜兵部少輔大伴宿祢家持作歌一首

八日讃岐守安宿王等集於出雲掾安宿奈杼麿之家宴歌二首

兵部少輔大伴宿祢家持後日追和出雲守山背王作歌一首

廿三日集於式部少丞大伴宿祢池主之宅飲宴歌二首

智努女王卒後圓方女王悲傷作歌一首

大原櫻井眞人行佐保川邊之時作歌一首

藤原夫人歌一首

作者未詳歌一首

三月四日於兵部大丞大原眞人今城之宅宴歌一首

播磨介藤原朝臣執弓赴任悲別歌一首

勝寶九歲六月廿三日於大監物三形王之宅宴歌一首

大伴宿祢家持歌一首

天平寶字元年十一月十八日於內裏肆宴歌二首

大伴宿禰家持の、病に臥して無常を悲み、修道を欲(ほり)して作れる歌二首

同じ家持の、壽を願ひて作れる歌一首

冬十一月五日、少しく雷なる夜、兵部少輔大伴宿禰家持の作れる歌一首

八日、讃岐守安宿王等の、出雲掾安宿奈杼麻呂の家に集ひて宴せる歌二首

兵部少輔大伴宿禰家持の、後の日に出雲守山背王の作れる歌に追ひて和ふる一首

二十三日、式部少丞大伴宿禰池主の宅に集ひて飲宴せる歌二首

智努女王の卒(みまか)りし後、圓方女王の悲み傷みて作れる歌一首

大原櫻井眞人の、佐保川の邊を行きし時作れる歌一首

藤原夫人の歌一首

作者いまだ詳ならざる歌一首

三月四日、兵部大丞大原眞人今城の宅にて宴せる歌一首

播磨介藤原朝臣執弓の、任に赴きし時別を悲める歌一首

勝寶九歲六月二十三日、大監物三形王の宅にて宴せる歌一首

大伴宿禰家持の歌一首

天平寶字元年十一月十八日、內裏にて肆宴きこしめせる歌二首

欲脩道(元)「欲脩道」

小雷夜

飲宴歌二首(元細)「宴歌二首」

出雲掾(元神)「出家掾」

佐保川邊(元神)「佐保河邊」

大伴宿祢家持歌一首(神細)「大伴宿祢家持歌二首」

肆宴歌二首

十二月十八日於大監物三形王之宅宴歌三首
年月未詳歌一首
廿三日於治部少輔大原今城眞人之宅宴歌一首
二年春正月三日王臣等應　詔旨各陳心緒歌二首
六日內庭假植樹木以作林帷而爲肆宴歌一首
二月於式部大輔中臣淸麿朝臣之宅宴歌十首
依興各思高圓離宮處作歌五首
屬目山齋作歌三首
二月十日於內相宅餞渤海大使小野田守朝臣等宴歌一首
七月五日於治部少輔大原今城眞人宅餞因幡守大伴宿祢家持宴歌一首
三年春正月一日於因幡國廳賜饗國郡司等之宴歌一首

十二月十八日、大監物三形王の宅にて宴せる歌三首
年月いまだ詳ならざる歌一首
二十三日、治部少輔大原今城眞人の宅にて宴せる歌一首
二年春正月三日、王臣等の、詔旨に應じて各心緒を陳ぶる歌二首
六日、內庭に假に樹木を植ゑて林帷と作して肆宴きこしめせる歌一首
二月、式部大輔中臣淸麻呂朝臣の宅にて宴せる歌十首
興に依りて各高圓の離宮處を思びて作れる歌五首
山齋に屬目して作れる歌三首
二月十日、內相の宅にて勃海大使小野田守朝臣等を餞する宴の歌一首
七月五日、治部少輔大原今城眞人の宅にて、因幡守大伴宿禰家持を餞する宴の歌一首
三年春正月一日、因幡の國の廳にて、饗を國郡の司等に賜へる宴の歌一首

應詔旨各陳心緒歌二首
以作林帷
渤海大使（神細）「浮海大使」
小野田守
宴歌一首

幸行於山村之時歌二首
先太上天皇詔陪從王臣曰夫諸王卿等宜賦和歌而奏卽御口号曰
安之比奇能山行之可婆山人乃和礼尒依志米之夜麻都刀曾許礼
舍人親王應　詔奉和歌一首
安之比奇能山尒由伎家牟夜麻妣等能情母之良受山人夜多礼
右天平勝寶五年五月在於大納言藤原朝臣之家時依　奏事而請問之間少主鈴山田史土麿語少納言大伴宿祢家持曰昔聞此言卽誦此歌也
天平勝寶五年八月十二日二三大夫等各提壺酒登高圓野聊述所心作歌三首
多可麻刀能乎婆奈布伎故酒秋風尒比毛等伎安氣奈多太奈良受等母
右一首左京少進大伴宿祢池主
安麻久母尒可里曾奈久奈流多加麻刀能波疑乃之多婆波毛美知安倍牟可聞

山村に幸行しし時の歌二首
先の太上天皇、陪從の王臣に詔り給はく、それ諸王卿等、宜和ふる歌を賦みて奏すべしとのりたまひて卽御口號し給へらく
四二九三 あしひきの山行きしかば山人の朕にえしめし山づとぞこれ
舍人親王の、詔に應へて和へ奉れる歌一首
四二九四 あしひきの山に行きけむ山人の心も知らず山人や誰
右は、天平勝寶五年五月、大納言藤原朝臣の家に在りし時、事を奏すに依りて請ひ問ふ間に、少主鈴山田史土麻呂、少納言大伴宿禰家持に語りて曰はく、昔此の言を聞けりといひて卽此の歌を誦みき。
天平勝寶五年八月十二日、二三の大夫等の、各壺酒を提げて高圓野に登り、聊所心を述べて作れる歌三首
四二九五 高圓の尾花吹き越す秋風に紐解き開けな直ならずとも
右の一首は、左京少進大伴宿禰池主
四二九六 天雲に雁ぞ鳴くなる高圓の芽子の下葉はもみち敢へむかも

請問之間
大伴宿祢家持
天平勝寶五年

右一首左中辨中臣清麿朝臣

乎美奈弊之安伎波疑之努藝左乎之可能都由和氣奈加牟多加麻刀能野曾

右一首少納言大伴宿禰家持

六年正月四日氏族人等賀集于少納言大伴宿祢家持之宅宴飲歌三首

霜上尓安良礼多婆之里伊夜麻之尓安礼波麻爲許牟年緒奈我久 古今未詳

右一首左兵衛督大伴宿祢千室

年月波安良多〻〻〻尓安比美礼騰安我毛布伎美波安伎太良奴可母 古今未詳

右一首民部少丞大伴宿祢村上

可須美多都春初乎家布能其等見牟登於毛倍波多努之等曾毛布

右一首左京少進大伴宿禰池主

七日天皇太上天皇皇大后在於東常宮南大殿肆宴歌一首

伊奈美野乃安可良我之波〻等伎波安礼騰伎美乎安

四二九七 をみなへし秋芽子凌ぎさを鹿の露分け鳴かむ高圓の野ぞ

右の一首は、少納言大伴宿禰家持

六年正月四日、氏族の人等の、少納言大伴宿禰家持の宅に賀ぎ集ひて宴飲せる歌三首

四二九八 霜の上に霰たばしりいや増しに吾は參來む年の緒長く 古今いまだ詳ならず

右の一首は、左兵衛督大伴宿禰千室

四二九九 年月はあらたあらたに相見れど我が思ふ君は飽き足らぬかも

右の一首は、民部少丞大伴宿禰村上

四三〇〇 霞立つ春のはじめを今日のごと見むと思へば樂しとぞ思ふ

右の一首は、左京少進大伴宿禰池主

七日、天皇、太上天皇、皇大后の、東の常の宮の南の大殿に在して肆宴きこしめせる歌一首

四三〇一 稻見野のあから柏は時はあれど君を吾が思ふ時は實無し

安良礼多婆之里（元神）「安良礼多波之里」
安礼波麻爲許牟（元神）「安礼婆麻爲許牟」
大伴宿祢千室　安良多〻〻〻尓
皇大后　在於（元）「於」
乎美奈弊之（神類）「乎美奈敝之」

我毛布登伎波佐祢奈之

右一首播磨國守安宿王奏 古今未詳

三月十九日家持之庄門槻樹下宴飲歌二首

夜麻夫伎波奈遅都〻於保佐牟安里都〻母伎美伎麻之之都〻可射之多里家利

右一首置始連長谷

和我勢故我夜度乃也麻夫伎佐吉豆安良婆也麻受可欲波牟伊夜登之能波尓

右一首長谷攀花提壺到來因是大伴宿祢家持作此歌和之

同月廿五日左大臣橘卿宴于山田御母之宅歌一首

夜麻夫伎乃花能左香利尓可久乃其等伎美乎見麻久波知登世尓母我母

右一首少納言大伴宿祢家持、時花作但未出之間大臣罷宴而不攀誦耳

詠霍公鳥歌一首

許乃久礼能之氣伎乎乃倍乎保等登藝須奈伎豆良故由奈理伊麻之久良之母

右の一首は、播磨の國の守安宿王の奏せる 古今いまだ詳ならず

三月十九日、家持の庄の門の槻の樹の下にて宴飲せる歌二首

四三〇二 山吹は撫でつつ生さむ在りつつも君來ましつつ挿頭したりけり

右の一首は、置始連長谷

四三〇三 吾が夫子が屋戸の山吹さきてあらば止まず通はむいや毎年に

右の一首は、長谷花を攀ぢ、壺を提げて到り來。是に因りて大伴宿禰家持この歌を作りて和ふる。

同じ月二十五日、左大臣橘卿の、山田御母の宅に宴せる歌一首

四三〇四 山吹の花の盛にかくの如君を見まくは千年にもがも

右の一首は、少納言大伴宿禰家持、時の花を矚て作れる。但しいまだ出さざりし間、大臣宴を罷めたるにより攀誦せざるのみ。

霍公鳥を詠める歌一首

四三〇五 木の暗の繁き尾の上を霍公鳥鳴きて越ゆなり今し來らしも

伎美伎麻之之都〻
提壺到來（神細）
不攀誦耳
奈伎豆故由奈理

右一首四月大伴宿祢家持作

七夕歌八首

波都秋風須受之伎由布弊等香武等曾比毛波牟須妣之伊母尒安波牟多米

秋等伊閇婆許己呂曾伊多伎宇多弖家尒花仁奈蘇倍弖見麻久保里香聞

波都乎婆奈〻〻尒見牟登之安麻乃可波弊奈里尒家良之年緒奈我久

秋風尒奈妣久可波備能尒故具左能尒古餘可尒之母於毛保由流香母

安吉佐礼婆奇里多知和多流安麻能河波伊之奈旀於可婆都藝弖見牟可母

秋風尒伊麻香伊麻可等比母等伎弖宇良麻知乎流尒月可多夫伎奴

秋草尒於久之良都由能安可受能未安比見流毛乃乎月乎之麻多牟

安乎奈美尒蘇弖佐閇奴礼弖許具布祢乃可之布流保刀尒左欲布氣奈武可

右の一首は、四月、大伴宿禰家持の作れる。

七夕の歌八首

四三〇六 初秋風涼しき夕解かむとぞ紐は結びし妹に逢はむため

四三〇七 秋といへば心ぞ痛きうたて異に花に比へて見まく欲りかも

四三〇八 初尾花花に見むとし天の河隔りにけらし年の緒長く

四三〇九 秋風に靡く河傍の和草のにこよかにしも思ほゆるかも

四三一〇 秋されば霧立ちわたる天の河石竝置かば繼ぎて見むかも

四三一一 秋風に今か今かと紐解きてうら待ち居るに月かたぶきぬ

四三一二 秋草に置く白露の飽かずのみ相見るものを月をし待たむ

四三一三 青波に袖さへ濡れて漕ぐ船の戕舸振る程にさ夜ふけなむか

秋等伊閇婆 花仁奈蘇倍弖

〻〻尒見牟登之（元）「波名尒見牟登之」

伊之奈旀於可婆（元細）「伊之奈旀於可波」

右大伴宿祢家持獨仰天漢作之

八千種尒久佐奇乎宇惠弖等伎其等尒佐加牟波奈乎之見都追思努波奈

右一首同月廿八日大伴宿祢家持作之

宮人乃蘇泥都氣其呂母安伎波疑尒仁保比与呂之伎多加麻刀能美夜

多可麻刀能宮乃須蘇未乃努都可佐尒伊麻左家流良武乎美奈弊之波母

秋野尒波伊麻己曾由可米母能乃布能乎等古乎美奈能波奈尒保比見尒

安伎能野尒都由於弊流波疑乎多乎良受弖安多良佐可里乎須具之弖牟登香

多可麻刀能秋野乃宇倍能安佐疑里尒都麻欲夫乎之可伊泥多都良武可

麻須良男乃欲妣多天思加婆左乎之加能牟奈和氣由加牟安伎野波疑波良

右歌六首兵部少輔大伴宿祢家持獨憶秋野聊述拙懷作之

右は、大伴宿禰家持の、獨天漢を仰ぎて作れる。

四三一四 八千種に草木を植ゑて時毎に咲かむ花をし見つつ思ばな

右の一首は、同じ月二十八日、大伴宿禰家持の作れる。

四三一五 宮人の袖つけ衣秋芽子ににほひよろしき高圓の宮

四三一六 高圓の宮の裾廻の野司に今咲けるらむ女郎花はも

四三一七 秋野には今こそ行かめもののふの男女の花にほひ見に

四三一八 秋の野に露負へる芽子を手折らずてあたら盛を過してむとか

四三一九 高圓の秋野のうへの朝霧に妻呼ぶ壯鹿出で立つらむか

四三二〇 丈夫の呼び立てしかばさを鹿の胸分け行かむ秋野芽子原

右の歌六首は、兵部少輔大伴宿禰家持の、獨秋の野を憶ひて、聊拙き懷を述べて作れる。

佐加牟波奈乎之

見都追思努波奈（元細）「見都追思怒波奈」

多乎良受弖

須具之弖牟登香（神類）「須其之弖牟登香」

牟奈和氣由加牟

天平勝寶七歲乙未二月相替遣筑紫諸國防人等歌

可之古伎夜美許等加我布理阿須由利也加曳我牟多
祢牟伊牟奈之尓志且

右一首國造丁長下郡物部秋持

和我都麻波伊多久古比良之乃牟美豆尓加其佐倍美
曳且余尓和須良礼受

右一首主帳丁麁玉郡若倭部身麿

等伎騰吉乃波奈波佐家登母奈尓須礼曾波ゝ登布波
奈乃佐吉泥已受祁牟

右一首防人山名郡丈部眞麿

等倍多保美志留波乃伊宗等尓閇乃宇良等安比且之
阿良婆己等母加由波牟

右一首同郡丈部川相

知ゝ波ゝ母波奈尓母我毛夜久佐麻久良多妣波由久
等母佐ゝ己且由加牟

右一首佐野郡丈部黒當

父母我等能ゝ志利弊乃母ゝ余具佐母ゝ与伊且麻勢
和我伎多流麻且

天平勝寶七歲乙未二月、相替りて筑紫に遣さるる諸國の防人等の歌

四三二 畏きや命被り明日ゆりや草が共寐む妹無しにして

右の一首は、國造丁長下郡の物部秋持

四三三 我が妻はいたく戀ひらし飲む水に影さへ見えて世に忘られず

右の一首は、主帳丁麁玉郡の若倭部身麿

四三四 時時の花は咲けども何すれぞ母とふ花の咲き出來ずけむ

右の一首は、防人山名の郡の丈部眞麿

四三五 遠江白羽の磯と贄の浦とあひてしあらば言も通はむ

右の一首は、同じ郡の丈部川相

四三六 父母も花にもがもや草枕旅は行くとも擎ごて行かむ

右の一首は、佐野の郡の丈部黒當

四三七 我が妻も畫にかきとらむ暇もが旅行く我は見つつしのばむ

右の一首は、長下の郡の物部古麿

二月六日、防人部領使遠江國の史生坂本朝臣人上が進れる歌の數十八首。但し拙劣なる歌十一首あるは取り載せず。

四三八 大君の命かしこみ磯に觸り海原渡る父母を置きて

右の一首は、助丁丈部造人麿

四三九 八十國は難波に集ひ舟飾我がせむ日ろを見も人もがも

右の一首は、足下の郡の上丁丹比部國人

四三〇 難波津に裝ひ裝ひて今日の日や出でて罷らむ見る母なしに

右の一首は、鎌倉の郡の上丁丸子連多麿

二月七日、相摸の國の防人部領使守從五位下藤原朝臣宿奈麿が進れる歌の數八首。但し拙劣なる歌五首は取り載せず。

防人の別を悲む心を追ひて痛みて作れる歌一首 并に短歌

右一首同郡生玉部足國

和我都麻母晝尓可伎等良無伊豆麻母加多比由久阿
礼波美都ゝ志努波牟

右一首長下郡物部古麿

二月六日防人部領使遠江國史生坂本朝臣人上進
歌數十八首但有拙劣歌十一首不取載之

於保吉美能美許等可之古美伊蘇尓布理宇乃波良和
多流知ゝ波ゝ乎於伎且

右一首助丁丈部造人麿

夜蘇久尓波那尓波尓都度比布奈可射里安我世武比
呂乎美毛比等母我毛

右一首足下郡上丁丹比部國人

奈尓波都尓余曾比余曾比且氣布能比夜伊田且麻可
良武美流波ゝ奈之尓

右一首鎌倉郡上丁丸子連多麿

二月七日相摸國防人部領使守從五位下藤原朝臣宿奈麿
宿奈麿進歌數八首但拙劣歌五首者不取載之

追痛防人悲別之心作歌一首 并短歌

加曳我牟多祢牟（元古葉）「加曳我伊牟多祢乎」

主帳丁

佐吉泥已受祁牟

安比且之阿良婆（元類）「安比且之阿良波」

多比由久阿礼波（神類）「多比由久阿礼婆」

那尓波尓都度比

美毛比等母我毛（類）「美毛比等母我母」

氣布能比夜（元神）「氣布能日夜」

鎌倉郡（元神）「鎌倉部」

天皇乃等保能朝庭等之良奴日筑紫國波安多麻毛流
於佐倍乃城曾等聞食四方國尒波比等佐波尒美知弖
波安礼杼登利我奈久安豆麻乎能故波伊田牟可比加
敞里見世受弖伊佐美多流多家吉軍卒等祢疑多麻比
麻氣乃麻尒〻〻多良知祢乃波〻我目可礼弖若草能
都麻乎母麻可受安良多麻能月日餘美都〻安之我知
流難波能美津尒大船尒末加伊之自奴伎安佐奈藝尒
可故等登能倍由布思保尒可知比伎乎里安騰母比弖
許藝由久伎美波奈美乃間乎伊由伎佐具久美麻佐吉
久母波夜久伊多里弖大王乃美許等能麻尒末麻須良
男乃許己呂乎母知弖安里米具理事之乎波良婆都〻
麻波受可敞理伎麻勢登伊波比倍乎等許敞尒須惠弖
之路多倍能蘇田遠利加敞之奴婆多麻乃久路加美之
伎弖奈我伎氣遠麻知可母戀牟波之伎都麻良波
麻須良男能由伎等里於比弖伊田弖伊氣婆和可礼乎
乎之美奈氣伎家牟都麻
等里我奈久安豆麻乎等故能都麻和可礼可奈之久安
里家牟等之能乎奈我美

四三三一 天皇の 遠の朝廷と しらぬひ 筑紫の國は 賊守る 鎭の
城ぞと 聞し食す 四方の國には 人多に 滿ちてはあれど
雞が鳴く 東男は 出で向ひ 顧みせずて 勇みたる 猛
き軍卒と 勞ぎ給ひ 任のまにまに たらちねの 母が目離
れて 若草の 妻をも纏かず あらたまの 月日數みつつ
蘆が散る 難波の御津に 大船に 眞櫂繁貫き 朝なぎに
水手整へ 夕汐に 楫引き撓り 率ひて 漕ぎゆく君は 波
の間を い行きさぐくみ 眞幸くも 早く到りて 大王の
命のまにま 丈夫の 心を持ちて 在り廻り 事し畢らば
恙はず 歸り來ませと 齋戸を 床邊にすゑて 白栲の 袖
折り反し ぬばたまの 黑髮敷きて 長きけを 待ちかも戀
ひむ 愛しき妻らは

四三三二 丈夫の靫取り負ひて出でて往けば別を惜み嘆きけむ妻

四三三三 雞が鳴く東男の妻別れ悲しくありけむ年の緒長み

等保能朝庭等
加敞里見世受弖
安里米具理（元類）「安里米具里」
事之乎波良婆（元神）「事之乎波良波」
麻須良男能
伊田弖伊氣婆（元細）「伊田弖伊氣波」

右二月八日兵部使少輔大伴宿祢家持

海原乎等保久和多里弖等之布等母兒良我牟須敞流
比毛等久奈由米
今替尒比佐伎母利我布奈弖須流宇奈波良乃宇倍尒
奈美那佐伎曾祢
佐吉母利能保理江己藝豆流伊豆手夫祢可治登流間
奈久戀波思氣家牟

右九日大伴宿祢家持作之

美豆等利乃多知能已蘇岐尒父母尒毛能波須價尒弖
已麻叙久夜志伎

右一首上丁有度部牛麿

多〻美氣米牟良自加已蘇乃波奈利蘇乃波〻乎波奈
例弖由久我加奈之佐

右一首助丁生部道麿

久尒米具留阿等利加麻氣利由伎米久利加比利久麻
弖尒已波比弖麻多祢

右一首刑部虫麿

知〻波〻江已波比弖麻多祢豆久志奈流美豆久白玉

右は二月八日、兵部使の少輔大伴宿禰家持

四三三四 海原を遠く渡りて年經とも兒らが結べる紐解くなゆめ

四三三五 今替る新防人が船出する海原のうへに浪な開きそね

四三三六 防人の堀江漕ぎ出る伊豆手舟楫取る間なく戀は繁けむ

右は、九日、大伴宿禰家持の作れる。

四三三七 水鳥の發ちの急ぎに父母に物言ず來にて今ぞ悔しき

右の一首は、上丁有度部牛麻呂

四三三八 疊薦牟良自が礒の離礒の母を離れて行くが悲しさ

右の一首は、助丁生部道麻呂

四三三九 國巡るあとりかまけり行き廻り歸り來までに齋ひて待たね

右の一首は、刑部虫麻呂

四三四〇 父母え齋ひて待たね筑紫なる水漬く白玉取りて來までに

兵部使少輔
奈美那佐伎曾祢（元細）「那美那佐伎曾祢」
保理江己藝豆流
可治登流間那久（元類）「可治等流間奈久」
右九日（元神）「右五首」
美豆等利乃（元細）「美豆等里乃」
多知能已蘇岐尒（元神）
有度部牛麿
生部道麿（元神）「生部道麻呂」
由伎米久利（元神）「由伎米具利」
知〻波〻江

等里呂久麻呂尒

右一首川原虫麿

多知波奈能美袁利乃佐刀尒父乎於伎呂道乃長道波
由伎加呂奴加毛

右一首丈部足麿

麻氣波之良寶米呂豆久礼留等乃能其等已麻勢波ゝ
刀自於米加波利勢受

右一首坂田部首麿

和呂多比波多比等於米保等已比尒志呂古米知夜須
良牟和加美可奈志母

右一首玉作部廣目

和須良牟伽努由伎夜麻由伎和例久礼等和我知ゝ波
ゝ波和須例勢努加毛

右一首商長首麿

和伎米故等不多利和我見之宇知江須流ゝゝ河乃祢
良波苦不志久米阿流可

右一首春日部麿

知ゝ波ゝ我可之良加伎奈呂佐久安礼天伊比之氣等

右の一首は、川原虫麻呂

四三四一 橘の美袁利の里に父を置きて道の長道は行きがてぬかも

右の一首は、丈部足麻呂

四三四二 眞木柱讃めて造れる殿の如いませ母刀自面變りせず

右の一首は、坂田部首麻呂

四三四三 吾等旅は旅と思ほど家にして子持ち痩すらむ我が妻かなしも

右の一首は、玉作部廣目

四三四四 忘らむと野行き山行き我來れど我が父母は忘れせぬかも

右の一首は、商長首麻呂

四三四五 吾妹子と二人我が見しうち寄する駿河の嶺らは戀しくめある
か

右の一首は、春日部麻呂

四三四六 父母が頭かき撫で幸く在れていひし言葉ぜ忘れかねつる

由伎加呂奴加毛

麻氣波之良

和加美可奈志母

伊比之氣等婆是
（元神）「伊比之氣等波是」

婆是和須礼加祢津流

右一首丈部稻麿

二月七日駿河國防人部領使守從五位下布勢朝臣
人主實進九日歌數廿首但拙劣歌者不取載之

伊閇尒之乃呂古非都ゝ安良受波奈我波氣流多知尒奈
里呂母伊波非呂之加母

右一首國造丁旱部使主三中之父歌

多良知祢乃波ゝ乎和加例呂麻許等和例多非乃加里
保尒夜須久祢牟加母

右一首國造丁旱部使主三中

毛母久麻能美知波紀尒志乎麻多佐良尒夜蘇志麻須
義呂和加例加由可牟

右一首助丁刑部直三野

尒波奈加能阿須波乃可美尒古志波佐之阿例波伊波
ゝ牟加倍理久麻泥尒

右一首帳丁若麻續部諸人

多妣己呂母夜部伎可佐祢呂伊努礼等母奈保波太佐
牟志伊母尒志阿良祢婆

右の一首は、丈部稻麻呂

二月七日、駿河の國の防人部領使守從五位下布勢朝臣人主、實
進れるは九日、歌の數二十首。但し拙劣なる歌は取り載せず。

四三四七 家にして戀ひつつあらずは汝が佩ける刀になりても齋ひてし
かも

右の一首は、國造丁日下部使主三中が父の歌

四三四八 たらちねの母を別れてまこと我旅の假廬に安く寢むかも

右の一首は、國造丁日下部使主三中

四三四九 百傳の道は來にしをまた更に八十島過ぎて別れか行かむ

右の一首は、助丁刑部直三野

四三五〇 庭中の阿須波の神に木柴さし吾は齋はむ歸り來までに

右の一首は、帳丁若麻續部諸人

四三五一 旅衣八重著重ねて寢ぬれどもなほ膚寒し妹にしあらねば

和須礼加祢津流

早部使主三中之父

早部使主三中

加倍理久麻泥尒
多妣己呂母（元類）
「多比己呂母」
夜部伎可佐祢呂
（元）「夜倍伎加
佐祢呂」

伊母尒志阿良祢婆
（元細）「伊母尒
阿良祢婆」

右一首望陀郡上丁玉作部國忍

美知乃倍乃宇万良能宇礼尓波保麻米乃可良麻流伎
美乎波可礼加由加牟

右一首天羽郡上丁丈部鳥

伊倍加是波比尓〻〻布氣等和伎母古賀伊倍其登母
遲豆久流比等母奈之

右一首朝夷郡上丁丸子連大歳

多知許毛乃多知乃佐和伎尓阿比美豆之伊母加已〻
呂波和須礼世奴可母

右一首長狭郡上丁丈部与呂麿

余曾尓能美〻豆夜和多良毛奈尓波我多久毛爲尓美
由流志麻奈良奈久尓

右一首武射郡上丁丈部山代

和我波〻能蘇豆母知奈豆氐和我可良尓奈伎之許已
呂乎和須良延奴可毛

右一首山邊郡上丁物部乎刀良

阿之可伎能久麻刀尓多知豆和藝毛古我蘇豆母志保
〻尓奈伎志曾母波由

望陀郡上丁(神細)「望陀郡上下」

和須良延奴可毛(元暦)「和須良延努可毛」

物部乎刀良(元細)「物部手刀良」

蘇豆母志保〻尓(元類)「蘇豆毛志保〻尓」

右一首市原郡上丁刑部直千國

於保伎美乃美許等加志古美伊豆久礼婆和努等里都
伎豆伊比之古奈波毛

右一首種泻郡上丁物部龍

都久之閇尓敞牟加流布祢乃伊都之加毛都加敞麻都
里豆久尓〻閇牟可毛

右一首長柄郡上丁若麻續部羊

二月九日上總國防人部領使少目從七位下茨田連沙彌麻呂が、進れる歌の數十九首。但し拙劣なる歌は取り載せず。

私の拙き懐を陳ぶる一首 并に短歌

天皇乃等保伎美与尓毛於之豆流難波乃久尓〻阿米
能之多之良志賣之伎等伊麻能乎尓多要受伊比都〻
可氣麻久毛安夜尓可之古志可武奈我良和其大王乃
宇知奈須久春初波夜知久佐尓波奈佐伎尓保比夜麻
美礼婆見能等母之久可波美礼婆見乃佐夜氣久母能
其等尓佐可由流等伎登賣之多麻比安伎良米多麻比
之伎麻世流難波宮者伎已之乎須四方乃久尓欲里多
豆麻都流美都奇能船者保理江欲里美乎妣伎之都〻

右一首は、市原の郡の上丁刑部直千國

於保伎美乃美許等加志古美伊豆久礼婆和努等里都
伎豆伊比之古奈波毛

右の一首は、種泻の郡の上丁物部龍

都久之閇尓敞牟加流布祢乃伊都之加毛都加敞麻都
里豆久尓〻閇牟可毛

右の一首は、長柄の郡の上丁若麻續部羊

二月九日、上總の國の防人部領使少目從七位下茨田連沙彌麻呂が、進れる歌の數十九首。但し拙劣なる歌は取り載せず。

私の拙き懐を陳ぶる一首 并に短歌

天皇乃等保伎美与尓毛於之豆流難波乃久尓〻阿米
能之多之良志賣之伎等伊麻能乎尓多要受伊比都〻
可氣麻久毛安夜尓可之古志可武奈我良和其大王乃
宇知奈須久春初波夜知久佐尓波奈佐伎尓保比夜麻
美礼婆見能等母之久可波美礼婆見乃佐夜氣久母能
其等尓佐可由流等伎登賣之多麻比安伎良米多麻比
之伎麻世流難波宮者伎已之乎須四方乃久尓欲里多
豆麻都流美都奇能船者保理江欲里美乎妣伎之都〻

種泻郡

若麻續部羊(元神)「若麻續部年」

陳私拙懐一首并短歌(神細)「陳私拙懐一首」

可氣麻久毛

伎已之乎須

安佐奈藝尒可治比伎能保理由布之保尒佐乎佐之久
太理安治牟良能佐和伎〻保比弖波麻尒伊泥弖海原
見礼婆之良奈美乃夜敞乎流我宇倍尒安麻乎夫祢波
良〻尒宇伎弖於保美氣尒都加倍麻都流等乎知許知
尒伊射里都利家理曾伎太久毛於藝呂奈伎可毛己伎
婆久母由多氣伎可母許己見礼婆宇倍之神代由波自
米家良思母

櫻花伊麻佐可里奈里難波乃海於之弖流宮尒伎許之
賣須奈倍

海原乃由多氣伎見都〻安之我知流奈尒波尒等之波
倍奴倍久於毛保由

右二月十三日兵部少輔大伴宿祢家持

奈尒波都尒美布祢於呂須惠夜蘇加奴伎伊麻波許伎
奴等伊母尒都氣許曾

佐伎牟理尒多〻牟佐和伎尒伊敞能伊牟何奈流弊伎
己等乎伊波須伎奴可母

右二首茨城郡若舍人部廣足

於之弖流夜奈尒波能津与利布奈与曾比阿例波許藝
り　夕汐に　棹さし下り　あぢ群の　騷き競ひて　濱に出で
て　海原見れば　白浪の　八重折るが上に　海人小舟　はら
らに浮きて　大御食に　仕へ奉ると　遠近に　漁り釣りけり
そきだくも　おぎろなきかも　こきばくも　ゆたけきかも
此見れば　うべし神代ゆ　始めけらしも

四三六一 櫻花今盛なり難波の海おし照る宮に聞しめすなべ

四三六二 海原のゆたけき見つつ蘆が散る難波に年は經ぬべく思ほゆ

右は二月十三日、兵部少輔大伴宿禰家持

四三六三 難波津に御船下すゑ八十楫貫き今は榜ぎぬと妹に告げこそ

四三六四 防人に發たむさわきに家の妹がなるべき事を言はず來ぬかも

右の二首は、茨城の郡の若舍人部廣足

四三六五 おし照るや難波の津より船裝ひ吾は榜ぎぬと妹に告ぎこそ

可治比伎能保理

倍奴倍久於毛保由（元）「倍努倍久於毛保由」

伊敞能伊牟何

奈流弊伎己等乎（元類）「奈流敞伎己等乎」

奴等伊母尒都岐許曾

比多知散思由可牟加里母我阿我古比乎志留志弖都
祁弖伊母尒志良世牟

右二首信太郡物部道足

阿我母弖能和須例母之太波都久波尼乎布利佐氣美
都〻伊母波之奴波尼

右一首茨城郡占部小龍

久自我波〻佐氣久阿利麻弖志富夫祢尒麻可知之自
奴伎和波可敞里許牟

右一首久慈郡丸子部佐壯

都久波祢乃佐由流能波奈能由等許尒母可奈之家伊
母曾比留毛可奈之祁

阿良例布理可志麻能可美乎伊能利都〻須米良美久
佐尒和例波伎尒之乎

右二首那賀郡上丁大舍人部千文

多知波奈乃之多布久可是乃可具波志伎都久波能夜
麻乎古比須安良米可毛

右一首助丁占部廣方

四三六六 常陸さし行かむ雁もが我が戀を記して附けて妹に知らせむ

右の二首は、信太の郡の物部道足

四三六七 我が面の忘れも時は筑波嶺をふり放け見つつ妹はしぬばね

右の一首は、茨城の郡の占部小龍

四三六八 久慈河は幸く在り待て潮船に眞楫繁貫き吾は歸り來む

右の一首は、久慈の郡の丸子部佐壯

四三六九 筑波嶺のさ白合の花の夜床にも愛しけ妹ぞ晝もかなしけ

四三七〇 霰降り鹿島の神を祈りつつ皇御軍に吾は來にしを

右の二首は、那賀の郡の上丁大舍人部千文

四三七一 橘の下吹く風の香ぐはしき筑波の山を戀ひず在らめかも

右の一首は、助丁占部廣方

伊母波之奴波尼

大舍人部千文（神細）「大舍人部千父」

阿志加良能美佐可多麻波理可閇理美須阿例波久江
由久阿良志乎母多志夜波婆可流不破乃世伎久江弖
和波由久牟麻能都米都久志能佐伎尒知麻利爲弖阿
例波伊波〻牟母呂〻〻波佐祁久等麻乎須可閇利久
麻弖尒

右一首倭文部可良麿

二月十四日常陸國部領防人使大目正七位上息長
眞人國嶋進歌數十七首但拙劣歌者不取載之

祁布与利波可敞里見奈久弖意富伎美乃之許乃美多
弖等伊渥多都和例波

右一首火長今奉部与曾布

阿米都知乃可美乎伊乃里弖佐都夜奴伎都久之乃之
麻乎佐之弖伊久和例波

右一首火長大田部荒耳

麻都能氣乃奈美多流美礼婆伊波妣等乃和例乎美於
久流等多〻理之母己呂

右一首火長物部眞嶋

多妣由岐尒由久等之良受弖阿母志〻尒己等麻乎佐
受弖伊麻叙久夜之氣

右一首寒川郡上丁川上臣老

阿母刀自母多麻尒母賀母夜伊多太伎弖美都良乃奈
可尒阿敞麻可麻久母

右一首津守宿祢小黒栖

都久比夜波須具波由氣等毛阿母志〻可多麻乃須我
多波和須例西奈布母

右一首都賀郡上丁中臣部足國

之良奈美乃与曾流波麻倍尒和可例奈波伊刀毛須倍
奈美夜多妣蘇弖布流

右一首足利郡上丁大舍人部祢麿

奈尒波刀乎己岐遅弖美例婆可美佐夫流伊古麻多可
祢尒久毛曾多奈妣久

右一首梁田郡上丁大田部三成

久尒具尒乃佐岐毛利都度比布奈能里弖和可流乎美
礼婆伊刀母須敞奈之

右一首河内郡上丁神麻續部嶋麿

布多富我美阿志氣比等奈里阿多由麻比和我須流等

四三七二 足柄の み坂たまはり 顧みず 吾は越え行く 荒し男も
立しや憚る 不破の關 越えて吾は行く 馬の蹄 筑紫の埼
に 留り居て 吾は齋はむ 諸は 幸くと申す 歸り來まで
に

右の一首は、倭文部可良麿呂

二月十四日、常陸の國の部領防人使大目正七位上息長眞人國
島が進れる歌の數十七首。但し拙劣なる歌は取り載せず。

四三七三 今日よりは顧みなくて大君の醜の御楯と出で立つ吾は

右の一首は、火長今奉部與曾布

四三七四 天地の神を祈りて幸矢貫き筑紫の島をさして行く吾は

右の一首は、火長大田部荒耳

四三七五 松の木の竝みたる見れば家人の吾を見送ると立たりしもころ

右の一首は、火長物部眞島

四三七六 旅行に行くと知らずて母父に言申さずて今ぞ悔しけ

倭文部可良麿

奈美多流美礼婆（神細）「奈美多流見礼波」

多妣由岐尒（元類）「多妣由伎尒」

四三七七 母刀自も玉にもがもや頂きて角髪の中にあへ纏かまくも

右の一首は、寒川の郡の上丁川上臣老

四三七八 月日夜は過ぐは往けども母父が玉の姿は忘れ爲なふも

右の一首は、津守宿禰小黒栖

四三七九 白浪の寄そる濱邊に別れなばいともすべなみ八遍袖振る

右の一首は、都賀の郡の上丁中臣部足國

四三八〇 難波門を榜ぎ出て見れば神さぶる生駒高嶺に雲ぞたなびく

右の一首は、足利の郡の上丁大舍人部祢麿

四三八一 國國の防人つどひ船乘りて別るを見ればいともすべ無し

右の一首は、梁田の郡の上丁大田部三成

四三八二 ふたほがみ惡しけ人なりあたゆまひ我がする時に防人にさす

右の一首は、河内の郡の上丁神麻續部島麿

川上臣老（元神）「川上目老」

津守宿祢小黒栖

久尒具尒乃（元）「具尒〻〻乃」

佐岐毛利都度比

伊刀母須敞奈之

伎尒佐伎母里尒佐須

右一首那須郡上丁大伴部廣成

都乃久尒乃宇美能奈伎佐尒布奈餘曾比多志渥毛等
伎尒阿母我米母我母

右一首塩屋郡上丁丈部足人

二月十四日下野國防人部領使正六位上田口朝臣大戸進歌數十八首但拙劣歌者不取載之

阿加等伎乃加波多例等枳尒之麻加枳乎己枳尒之布
祢乃他都枳之良須母

右一首助丁海上郡海上國造他田日奉直得大理

由古作枳尒奈美奈等惠良比志流敞尒波古乎等都麻
乎等於枳豆等母枳奴

右一首葛飾郡私部石嶋

和加〻都乃以都母等夜奈枳以都母〻〻〻於母加古
比須〻奈理麻之都之母

右一首結城郡矢作部眞長

知波乃奴乃古乃豆加之波能保〻麻例等阿夜尒加奈
之美於枳豆他加枳奴

右一首千葉郡大田部足人

多妣等弊等麻多妣尒奈理奴以弊乃母加枳世之己呂
母尒阿加都枳尒迦理

右一首占部虫麿

志保不尼乃弊古祖志良奈美尒波志久母於不世他麻
保加於母波弊奈久尒

右一首印波郡丈部直大麿

牟浪他麻乃久留尒久枳作之加多米等之以母加去〻
里波阿用久奈米加母

右一首猴嶋郡刑部志加麿

久尒具尒乃夜之呂乃加美尒奴佐麻都理阿加古比須
奈牟伊母賀加奈志作

右一首結城郡忍海部五百麿

阿米都之乃以都例乃可美乎以乃良波加有都久之波
〻尒麻多己等刀波牟

右一首埴生郡大伴部麻与佐

於保伎美能美許等尒作例波知〻波〻乎以波比弊等
於枳豆麻爲豆枳尒之乎

四三八二 右一首は、那須の郡の上丁大伴部廣成

四三八三 津の國の海のなぎさに船裝ひ發し出も時に母が目もがも

右の一首は、鹽屋の郡の上丁丈部足人

二月十四日、下野の國の防人部領使正六位上田口朝臣大戸が進れる歌の數十八首。但し拙劣なる歌は取り載せず。

四三八四 曉のかはたれ時に島陰を漕ぎにし船のたづき知らずも

右の一首は、助丁海上の郡の海上の國造他田日奉直得大理

四三八五 行先に浪なとゑらひ後方には子をと妻をと置きてとも來ぬ

右の一首は、葛飾の郡の私部石島

四三八六 吾が門の五株柳いつもいつも母が戀ひすすなりましつしも

右の一首は、結城の郡の矢作部眞長

四三八七 千葉の野の兒の手柏の含まれどあやにかなしみ置きてたか來ぬ

佐伎母里尒佐須
大伴部廣成（神類）「大伴廣成」

他都枳之良須母

私部石島

於母加古比須〻

於枳豆他加枳奴

右一首千葉郡大田部足人

多妣等弊等麻多妣尒奈理奴以弊乃母加枳世之己呂
母尒阿加都枳尒迦理

右一首占部虫麿

志保不尼乃弊古祖志良奈美尒波志久母於不世他麻
保加於母波弊奈久尒

右一首印波郡丈部直大麿

牟浪他麻乃久留尒久枳作之加多米等之以母加去〻
里波阿用久奈米加母

右一首猴嶋郡刑部志加麿

久尒具尒乃夜之呂乃加美尒奴佐麻都理阿加古比須
奈牟伊母賀加奈志作

右一首結城郡忍海部五百麿

阿米都之乃以都例乃可美乎以乃良波加有都久之波
〻尒麻多己等刀波牟

右一首埴生郡大伴部麻與佐

於保伎美能美許等尒作例波知〻波〻乎以波比弊等
於枳豆麻爲豆枳尒之乎

大田部足人（元細）「大田郡足人」
多妣等弊等（神細）「多妣等敞等」
以弊乃母加（元神）「以敞乃母加」

弊古祖志良奈美（元神）「敞古祖志良奈美」

丈部直大麿

以母加去〻里波

久尒具尒乃（神細）「久尒〻〻乃」

美許等尒作例波（細類）「美許等尒佐例波」

伊波比弊等於枳豆（神温）「伊波比敞等於枳豆」

麻爲豆枳尒之乎

右一首結城郡雀部廣嶋

於保伎美能美已等加之古美由美乃美他佐尼加和多
良牟奈賀氣已乃用乎

右一首相馬郡大伴部子羊

二月十六日下總國防人部領使少目從七位下縣犬養宿禰
淨人進歌數廿二首但拙劣歌者不取載之

獨惜龍田山櫻花歌一首

多都多夜麻見都〻古要許之佐久良波奈知利加須疑
奈牟和我可倍流刀小

獨見江水浮漂糞怨恨貝玉不依作歌一首

保理江欲利安佐之保美知小与流許都美可比小安里
世波都刀小勢麻之乎

在舘門見江南美女作歌一首

見和多世婆牟加都乎能倍乃波奈小保比豆里氐多豆
流波波之伎多我都麻

右三首二月十七日兵部少輔大伴家持作之

爲防人情陳思作歌一首 幷短歌

大王乃美已等可之古美都麻和可礼可奈之久波安礼

右の一首は、結城の郡の雀部廣島

四三九四 大君の命かしこみ弓の共眞寐か渡らむ長けこの夜を

右の一首は、相馬の郡の大伴部子羊

二月十六日、下總の國の防人部領使少目從七位下縣犬養宿禰
淨人が進れる歌の數二十二首。但し拙劣なる歌は取り載せず。

獨龍田山の櫻花を惜める歌一首

四三九九 龍田山見つつ越え來し櫻花散りか過ぎなむ我が歸るとに

四四〇〇 獨江の水に浮び漂へる糞を見て、貝玉の依らざるを怨恨
みて作れる歌一首

四三九六 堀江より朝潮滿ちに寄る木糞貝にありせば裏に爲ましを

舘門に在りて江南の美女を見て作れる歌一首

四三九七 見渡せば向つ峯の上の花にほひ照りて立てるは愛しき誰が妻

右の三首は、二月十七日、兵部少輔大伴家持の作れる。

防人の情に爲りて思を述べて作れる歌一首 幷に短歌

四三九八 大王の 命かしこみ 妻別れ 悲しくはあれど 丈夫の 情

由美乃美他(元神)「由美乃美仁」

大伴部子羊(細)「大伴子羊」

少目

縣犬養宿祢

和我可倍流刀小(元類*)「和我可倍流刀祢」

可比小安里世波

見和多世婆(細類)「見和多世波」

豆里氏多豆流波〻之伎多我都麻(元類)「豆里氏多豆流婆波之伎多我都麻」

特大夫情布里於許之等里与曾比門出乎須礼婆多良
知祢乃波〻可伎奈泥若草乃都麻波等里都吉平久和
礼波伎波比奴良牟世比都〻言語須礼婆群鳥乃伊泥多知加豆
小等騰己保里可弊里美之都〻伊也等保小國乎伎波
奈例伊夜多可小山乎故要須疑安之我知流難波小伎
爲豆由布之保小船乎宇氣須惠安佐奈藝小倍牟氣許
我牟等佐毛良布等和我乎流等伎小春霞之麻米小多
知豆多頭我祢乃悲鳴婆波呂婆呂小伊弊乎於毛比泥
於比曾箭乃曾与等奈流麻泥奈氣吉都流香母
宇奈波良小霞多奈妣伎多頭我祢乃可奈之伎与比波
久小弊之於毛保由
伊弊於毛布等伊乎祢受乎礼婆多頭我奈久安之弊毛
美要受波流乃可須美小

右十九日兵部少輔大伴宿禰家持作之

可良己呂武須曾小等里都伎奈苦古良乎意伎豆曾伎
怒也意母奈之小志豆

右一首國造小縣郡他田舍人大嶋

振り興し とり裝ひ 門出をすれば たらちねの 母かき撫
で 若草の 妻は取り附き 平けく 我は齋はむ 好去くて
早還り來と 眞袖持ち 涙を拭ひ 咽びつつ 言語すれば
群鳥の 出で立ちがてに 滯り 顧みしつつ いや遠に 國
を來離れ いや高に 山を越え過ぎ 蘆が散る 難波に來居
て 夕汐に 船を浮け居ゑ 朝なぎに 舳向け漕がむと 侍
候ふと 我が居る時に 春霞 島廻に立ちて 鶴が音の 悲
み鳴けば はろばろに 家を思ひ出 負征箭の そよと鳴る
まで 歎きつるかも

四四〇一 韓衣裾に取りつき泣く子らを置きてぞ來のや母なしにして

右の一首は、國造小縣の郡の他田舍人大島

四四〇〇 家おもふと寐を宿ず居れば鶴が鳴く蘆邊も見えず春の霞に

右は十九日、兵部少輔大伴宿禰家持の作れる。

波〻可伎奈凝(元)「波〻可伎奈凝泥」

波呂婆呂小(元神)「波呂波呂小」

可弊里美之都〻(元神)「可敝里美之都〻」

宇奈波良小

久小弊之於毛保由(神類)「久小敝之於毛保由」

伊弊於毛布等(元)「伊敝於毛負等」

安之弊毛美要受(元細)「安之敝毛美要受」

可良己呂武(元類)「可良己呂茂」

意伎豆曾伎(元細)「意伎豆曾伎怒也」

曾伎奴也」

小縣郡

知波夜布留賀美乃美佐賀尓奴佐麻都里伊波布伊能
知波意毛知ゝ我多米

右一首主帳埴科郡神人部子忍男

意保枳美能美己等可之古美阿乎久牟乃等能妣久夜
麻乎古与豆伎怒加牟

右一首小長谷部笠麿

二月廿二日信濃國防人部領使上道得病不來進歌
數十二首但拙劣歌者不取載之

奈尓波治乎由伎豆久麻豆等和藝毛古賀都氣之非毛
我乎多延尓氣流可母

右一首助丁上毛野牛甘

和我伊母古我志濃比尓西餘等都氣志比毛伊刀尓奈
流等母和波等可自等余

右一首朝倉益人

和我伊波呂尓由加毛比等母我久佐麻久良多妣波久
流之等都氣夜良麻久母

右一首大伴部節麿

比奈久母理宇須比乃佐可乎古延志太尓伊毛賀古比
之久和須良延奴加母

右一首他田部子磐前

二月廿三日上野國防人部領使大目正六位下上毛野君
駿河進歌數十二首但拙劣歌者不取載之

陳防人悲別之情歌一首 并短歌

大王乃麻氣乃麻尓ゝゝ嶋守尓和我多知久礼婆波ゝ
蘇婆能波ゝ能美許等波美母乃須蘇都美安氣可伎奈
湏知ゝ能未乃知ゝ能美許等波多久頭努能之良比氣
乃宇倍由奈美太多利奈氣伎乃多婆久可胡自母乃多
太比等里乙氐安佐刀湏乃可奈之伎吾子安良多麻乃
等之能乎奈我久安比美受波古非之久安流倍之今日
太尓母許等騰比勢武等乎之美都ゝ可奈之備麻世若
草之都麻母古騰母毛乎知己知尓左波尓可久美爲春
鳥乃己惠乃佐麻欲比之路多倍乃蘇湏奈伎奴良之多
豆佐波里和可礼加豆尓等比伎等騰米之多比之毛能
乎天皇乃美許等可之古美多麻保己乃美知尓出立乎
可乃佐伎伊多牟流其等尓与呂頭多妣可弊里見之都
追波呂ゝ尓和可礼之久礼婆於毛布蘇良夜須久母

四四〇二 ちはやぶる神の御坂に幣奉り斎ふ命は母父が爲

右の一首は、主帳埴科の郡の神人部子忍男

四四〇三 大君の命かしこみ青雲の棚引く山を越よて來のかむ

右の一首は、小長谷部笠麿

二月廿二日、信濃の國の防人部領使、上道して病を得て來らず、進れる歌の數十二首。但し拙劣なる歌は取り載せず。

四四〇四 難波道を往きて來までと吾妹子が著けし紐が緒絶えにけるかも

右の一首は、助丁上毛野牛甘

四四〇五 我が妹子がしのびにせよと著けし紐糸になるとも我は解かじとよ

右の一首は、朝倉益人

四四〇六 我が家ろに行かも人もが草枕旅は苦しと告げ遣らまくも

右の一首は、大伴部節麿

四四〇七 ひなぐもり碓日の坂を越えしだに妹が戀しく忘らえぬかも

知波夜布留
奴佐麻都里
伊波布伊能知波
（元）「伊波負伊
能知波」
主帳
意保枳美能
阿乎久牟乃（神細）
「阿乎久毛乃」
等能妣久夜麻乎
（元）「多奈妣久
夜麻乎」
古与豆伎怒加牟
小長谷部笠麿
進歌數十二首（元
細）「進歌十二
首」

和須良延奴加母
他田部子磐前
上野國
上毛野君

和我多知久礼婆
多久頭努能（元類）
「多久頭怒能」

今日太尓母（類）
「今日大仁母」
可奈之備麻世（元）
「可奈之備麻世
婆」
若草之

乎可乃佐伎（元類）
「乎可之佐伎」
与呂頭多妣

安良受古布流蘇良久流之伎毛乃乎宇都世美乃与能
比等奈礼婆多麻伎波流伊能知母之良受海原乃可之
古伎美知乎之麻豆多比伊己藝和多利豆安里米具利
和我久流麻遅尓多比良氣久於夜波伊麻佐祢都〻美
奈久都麻波麻多世等須美乃延能安我須賣可未尓奴
佐麻都利伊能里麻乎之豆奈尓波都尓船乎宇氣須惠
夜蘇加奴伎可古等登能倍豆安佐婢良伎和波己藝遅
奴等伊弊尓都氣己曾
伊弊婢等乃伊波倍尓可安良牟多比良氣久布奈遅波
之奴等於夜尓麻乎佐祢
美蘇良由久〻母〻都可比等比等波伊倍等伊弊頭刀
夜良武多豆伎之良受母
伊弊都刀尓可比曾比里弊流波麻奈美波伊也之久〻
〻二多可久与須礼騰
之麻可氣尓和我布祢波豆氏都氣也良牟都可比乎奈
美也古非都〻由加牟

二月廿三日兵部少輔大伴宿祢家持

麻久良多之己志尓等里波伎麻可奈之伎西呂我馬伎

安くもあらず　戀ふるそら　苦しきものを　うつせみの　世
一の人なれば　たまきはる　命も知らず　海原の　かしこき道
を　島傳ひ　い漕ぎ渡りて　在り廻り　我が來るまでに　平
けく　親はいまさね　恙無く　妻は待たせと　住吉の　我が
皇神に　幣奉り　祈り申して　難波津に　船を浮け居ゑ　八
十楫貫き　水手整へて　朝びらき　我は漕ぎ出ぬと　家に告
げこそ

四四〇九　家人の窶へにかあらむ平けく船出はしぬと親に申さね

四四一〇　み空行く雲も使と人はいへど家づと遣らむたづき知らずも

四四一二　家裏に貝ぞ拾へる濱浪はいやしくしくに高く寄すれど

四四一三　島かげに我が船泊てて告げやらむ使を無みや戀ひつつ行かむ

二月二十三日、兵部少輔大伴宿禰家持

四四一四　大君の命かしこみ愛しけ眞子が手離り島傳ひ行く

右の一首は、助丁秩父の郡の大伴部少歳

四四一五　白玉を手に取り持して見るのすも家なる妹をまた見てもやも

右の一首は、主帳荏原の郡の物部歳德

四四一六　草枕旅行く夫なが丸寢せば家なる我は紐解かず寢む

右の一首は、妻椋椅部刀自賣

四四一七　赤駒を山野に放し捕りかにて多摩の横山歩ゆか遣らむ

右の一首は、豐島の郡の上丁椋椅部荒虫が妻宇遲部黑女

四四一八　我が門の片山椿まこと汝我が手觸れな地に落ちもかも

右の一首は、荏原の郡の上丁物部廣足

己無都久乃之良奈久

右の一首は、上丁那珂郡檜前舍人石前之妻大伴部眞足女

女

於保伎美乃美己等可之古美宇都久之氣麻古我豆波
奈利之末豆多比由久

右の一首は、助丁秩父郡大伴部小歳

志良多麻乎豆尓刀里母之豆美流乃須母伊弊奈流伊
母乎麻多美豆毛母也

右の一首は、主帳荏原の郡の物部歳德

久佐麻久良多比由苦世奈我麻流祢世婆伊波奈流和
礼波比毛等加受祢牟

右の一首は、妻椋椅部刀自賣

阿加胡麻乎夜麻努尓波賀志刀里加尓豆多麻能余許
夜麻加志由加也良牟

右の一首は、豐島の郡の上丁椋椅部荒虫之妻宇遲部黑女

和我可度乃可多夜麻都婆伎麻己等奈礼和我豆布礼
奈〻都知尓於知母加毛

右の一首は、荏原の郡の上丁物部廣足

大伴部眞足女（元）「大伴眞足女」

麻古我豆波奈利

大伴部小歳

荏原郡（元細）「荏原郡」

主帳

多比由苦世奈我

右一首妻椋椅部刀自賣

多麻能余許夜麻（元）「多麻乃余許夜麻」

都知尓於知母加毛

荏原郡（細温）「荏原郡」

麻久良多之

伊也之久〻〻二（元神）「伊也之久〻〻二」

伊弊婢等乃

於夜尓麻乎佐祢

伊能里麻乎之豆

可古等登能倍豆（元）「可古登〻能倍豆」

和我久流麻遅尓

伊波呂尒波安之布多氣騰母須美与氣乎都久之尒伊
多里氏古布志氣毛波母

右一首橘樹郡上丁物部眞根

久佐麻久良多妣乃麻流祢乃比毛多要婆安我旦等都
氣呂許礼乃波流母志

右一首妻椋椅部弟女

和我由伎乃伊伎都久之可婆安之我良乃美祢波保久
毛乎美等登志努波祢

右一首都筑郡上丁服部於田

和我世奈乎都久之倍夜里旦宇都久之美於妣波等可
奈〻阿也尒加母祢毛

右一首妻服部呰女

安之我良乃美佐可尒多志旦蘇涅布良波伊波奈流伊
毛波佐夜尒美毛可母

右一首埼玉郡上丁藤原部等母麿

伊呂夫可久世奈我許呂母波曾米麻之乎美佐可多婆
良婆麻佐夜可尒美無

右一首妻物部刀自賣

二月廿日武藏國部領防人使椽正六位上安曇宿祢
三國進歌數廿首但拙劣歌者不取載之

佐伎毛利尒由久波多我世登刀布比登乎美流我登毛
之佐毛乃母比毛世受

阿米都之乃可未尒奴佐於伎伊波比都〻伊麻世和我
世奈阿礼乎之毛波婆

伊波乃伊毛呂和乎之乃布良之麻由須比尒由須比之
比毛乃登久良久毛倍婆

和我世奈乎都久志波夜利旦宇都久之美叡比波登加
奈〻阿夜尒可毛祢牟

宇麻夜奈流奈波多都古麻乃於久流我弁伊毛我伊比
之乎於岐旦可奈之毛

阿良之乎乃伊乎佐太波佐美牟可比多知可奈流麻之
都美伊遅旦登阿我久流

佐左賀波乃佐也久志毛用尒奈〻弁加流去呂毛尒麻
世流古倍賀波太波毛

佐弁奈弁奴美許登尒阿礼婆可奈之伊毛我多麻久良
波奈礼阿夜尒可奈之毛

四四一九 家ろには葦火焚けども住み好けを筑紫に到りて戀しけもはも

右の一首は、橘樹の郡の上丁物部眞根

四四二〇 草枕旅の丸寐の紐絶えば我が手と附けろ此の針持し

右の一首は、妻椋椅部弟女

四四二一 我が行の息衝くしかば足柄の峯延ほ雲を見ると偲ばね

右の一首は、都筑の郡の上丁服部於田

四四二二 我が夫なを筑紫へ遣りて愛しみ帶は解かななあやにかも寐も

右の一首は、妻服部呰女

四四二三 足柄の御坂に立して袖振らば家なる妹は清に見もかも

右の一首は、埼玉の郡の上丁藤原部等母麻呂

四四二四 色深く夫が衣は染めましを御坂たばらばま清かに見む

右の一首は、妻物部刀自賣

古布志氣毛波母

美等登志努波祢

椋椅部弟女（神細）「椋埼部弟女」

於妣波等可奈〻（神類）「於妣婆等可奈〻」

服部呰女

二月廿日、武藏の國の部領防人使椽正六位上安曇宿禰三國が
進れる歌の數二十首。但し拙劣なる歌は取り載せず。

四四二五 防人に行くは誰が夫と問ふ人を見るが羨しさ物思もせず

四四二六 天地の神に幣置き禱ひつついませ我が夫な我をし思はば

四四二七 家の妹ろ吾をしのぶらし眞結ひに結ひし紐の解くらく思へば

四四二八 我が夫なを筑紫は遣りて愛しみ帶は解かななあやにかも寐む

四四二九 厩なる繩絶つ駒の後るがへ妹が言ひしを置きて悲しも

四四三〇 荒し男のい小竹手挾み向ひ立ちかなる間しづみ出でてと我が
來る

四四三一 小竹が葉のさやく霜夜に七重かる衣に益せる子ろが膚はも

四四三二 障へなへぬ命にあれば愛し妹が手枕離れあやに悲しも

二月廿日

佐伎毛利尒

於岐旦可奈之毛

去呂毛尒麻世流

右八首昔年防人歌矣主典刑部少錄正七位上磐余伊美吉諸君抄寫贈兵部少輔大伴宿禰家持

三月三日撿挍防人勅使幷兵部使人等同集飲宴作歌三首

阿佐奈佐奈安我流比婆理尓奈里豆之可美也古尓由伎豆波夜加弊里許牟

右一首勅使紫微大弼安倍沙美麻呂朝臣

比婆里安我流波流弊等佐夜尓奈理奴礼波美夜古母美要受可須美多奈妣久

布敷賣里之波奈乃波自米尓許之和礼夜知里奈牟能知尓美夜古敞由可無

右二首兵部使少輔大伴宿禰家持

昔年相替防人歌一首

夜未乃欲能由久左伎之良受由久和礼乎伊都伎麻佐牟等登比之古良波母

先太上天皇御製霍公鳥歌一首 日本根子高瑞日清足姫天皇也

富等登麻須奈保毛奈賀那牟母等都比等可氣都〻母等奈安乎祢之奈久母

右の八首は、昔年の防人の歌なり。主典刑部少錄正七位上磐余伊美吉諸君が、抄寫して兵部少輔大伴宿禰家持に贈れる。

三月三日、防人を撿挍する勅使、幷せて兵部の使人等、同に集へる飲宴に作れる歌三首

阿佐奈佐奈安我流比婆理尓奈里豆之可美也古尓由伎豆波夜加弊里許牟

右の一首は、勅使紫微大弼安倍沙美麻呂朝臣

比婆里安我流波流弊等佐夜尓奈理奴礼波美夜古母美要受可須美多奈妣久

布敷賣里之波奈乃波自米尓許之和礼夜知里奈牟能知尓美夜古敞由可無

右の二首は、兵部使の少輔大伴宿禰家持

昔年相替りし防人の歌一首

夜未乃欲能由久左伎之良受由久和礼乎伊都伎麻佐牟等登比之古良波母

先の太上天皇の御製の霍公鳥の歌一首 日本根子高瑞日清足姫の天皇なり。

富等登麻須奈保毛奈賀那牟母等都比等可氣都〻母等奈安乎祢之奈久母

昔年防人歌矣

「安倍沙美麿(元細)」「安倍沙麿」

比婆里安我流

兵部使少輔

伊都伎麻佐牟等(類)「伊都伎麻左牟等」

四四三三 朝なさな揚る雲雀になりてしか都に行きてはや歸り來む

四四三四 雲雀あがる春べとさやになりぬれば都も見えず霞たなびく

四四三五 含めりし花の初に來し吾や散りなむ後に都へ行かむ

四四三六 闇の夜の行く先知らず行く吾を何時來まさむと問ひし兒らはも

四四三七 霍公鳥猶も鳴かなむもとつ人かけつつもとな朕を哭し泣くも

四四三八 霍公鳥此處に近くを來鳴きてよ過ぎなむ後にしるしあらめや

四四三九 松が枝の地に著くまで降る雪を見ずてや妹が籠り居るらむ

四四四〇 足柄の八重山越えていましなば誰をか君と見つつ偲ばむ

四四四一 立ちしなふ君が姿を忘れずば世のかぎりにや戀ひ渡りなむ

降妙觀

諱曰邑婆

上總國大椽(元神)

伊麻之奈波

降妙觀の、詔に應へて和へ奉れる歌一首

保等登麻須奈保毛須許〻尓知可久乎知可久尓伎奈氣豆流保等登藝須許等尓

知尓之流志安良米夜母

冬日幸于靱負御井之時內命婦石川朝臣應 詔賦雪歌一首 諱曰邑婆

麻都我延乃都知尓都久麻弖尓布流由伎乎美受豆也伊毛我許登母里乎流良牟

于時水主內親王寢膳不安累日不參因以此日太上天皇勅侍嬬等曰爲遣水主內親王賦雪作歌奉獻者於是諸命婦等不堪作歌而此石川命婦獨作此歌奏之

右件四首上總國大椽正六位上大原眞人今城傳誦云尒 年月未詳

上總國朝集使大椽大原眞人今城向京之時郡司妻女等餞之歌二首

安之我良乃夜敞也麻故要豆伊麻之奈波多礼乎可伎美等旅都〻志努波牟

多知之奈布伎美我須我多乎和須礼受波与能可藝里

降妙觀の、詔に應へて和へ奉れる歌一首

保等登麻須奈保毛須許〻尓知可久乎知可久尓伎奈氣豆流保等登藝須許等尓

知尓之流志安良米夜母

冬の日に靱負の御井に幸しし時、內命婦石川朝臣の、詔に應へて雪を賦める歌一首 諱を邑婆といふ

麻都我延乃都知尓都久麻弖尓布流由伎乎美受豆也伊毛我許登母里乎流良牟

時に水主內親王、寢膳安からず、日を累ねて參り給はず。因りて此の日を以ちて、太上天皇、侍嬬等に勅し給ひしく、水主內親王に遣らむ爲に、雪を賦みて歌を作りて獻れとのり給ひしかば、ここに諸命婦等歌を作り堪へず。しかるに此の石川命婦、獨此の歌を作りて奏しき。

右件の四首は、上總の國の大椽正六位上大原眞人今城傳へ誦みて云へり 年月いまだ詳ならず。

上總の國の朝集使大椽大原眞人今城の、京に向ひし時、郡司の妻女等の餞せる歌二首

安之我良乃夜敞也麻故要豆伊麻之奈波多礼乎可伎美等旅都〻志努波牟

多知之奈布伎美我須我多乎和須礼受波与能可藝里

尒夜故非和多里奈無

五月九日兵部少輔大伴宿祢家持之宅集飲歌四首

和我勢故我夜度乃奈呂之故比奈良倍呂安米波布礼

杼母伊呂毛可波良受

右一首大原眞人今城

比佐可多能安米波布里之久奈呂之故我伊夜波都波

奈尒故非之伎和我勢

右一首大伴宿祢家持

和我世故我夜度奈流波疑乃波奈佐可牟安伎能由布

敞波和礼乎之努波世

右一首大原眞人今城

卽聞鶯哢作歌一首

宇具比須乃許惠波須疑奴等於毛倍杼母之美尒之許

己呂奈保古非尒家里

右一首大伴宿祢家持

同月十一日左大臣橘卿宴右大辨丹比國人眞人之宅歌

三首

和我夜度尒佐家流奈呂之故麻比波勢牟由米波奈知

五月九日、兵部少輔大伴宿禰家持の宅に集飲せる歌四首

四四四二我が夫子が屋戸の瞿麥日並べて雨は降れども色も變らず

右の一首は、大原眞人今城

四四四三ひさかたの雨は降りしく瞿麥がいや初花に戀しき我が夫

右の一首は、大伴宿禰家持

四四四四我が夫子が屋戸なる芽子の花咲かむ秋のゆふべは我を偲ばせ

右の一首は、大原眞人今城

卽鶯の哢くを聞きて作れる歌一首

四四四九鶯の聲は過ぎぬと思へども染みにし情なほ戀ひにけり

右の一首は、大伴宿禰家持

同じ月の十一日、左大臣橘卿、右大辨丹比國人眞人の宅に宴せる歌三首

四四四六我が屋戸に咲ける瞿麥散は爲むゆめ花散るないやをちに咲け

集飲歌（細溫）「集飲」

比佐可多能（元類）「比佐可多乃」

安伎能由布敞波

流奈伊也乎知尒左家

右一首丹比國人眞人之大臣歌

麻比之都〻伎美我於保世流奈呂之故我波奈乃未等

波無伎美奈良奈久尒

右一首左大臣和歌

安治佐爲能夜敞佐久其等久夜都与尒乎伊麻世和我

勢故美都〻思努波牟

右一首左大臣寄味狹藍花詠也

十八日左大臣宴於兵部卿橘奈良麻呂朝臣之宅歌三首

奈呂之故我波奈等里母知呂宇都良〻〻〻美麻久能

富之伎吉美尒母安流加母

右一首治部卿船王

和我勢故我夜度能奈呂之故知良米也母伊夜波都波

奈尒佐伎波麻須等母

宇流波之美安我毛布伎美波奈呂之故我波奈尒奈蘇

倍呂美礼杼可奴香母

右二首兵部少輔大伴宿祢家持追作

八月十三日在內南安殿肆宴歌二首

四四四五右の一首は、丹比國人眞人の、左大臣を壽ぐ歌

四四四七麻しつつ君がおほせる瞿麥が花のみ訪はむ君ならなくに

右の一首は、左大臣の和ふる歌

四四四八紫陽花の八重咲く如くやつ世にをいませ我が夫子見つつしのばむ

右の一首は、左大臣の、昧狹藍の花に寄せて詠める。

十八日、左大臣の、兵部卿橘奈良麻呂朝臣の宅に宴せる歌三首

四四四九瞿麥が花取り持ちてうつらうつら見まくの欲しき君にもあるかも

右の一首は、治部卿船王

四四五〇我が夫子が屋戸の瞿麥散らめやもいや初花に咲きは益すとも

四四五一愛しみ我が思ふ君は瞿麥が花に比へて見れど飽かぬかも

右の二首は、兵部少輔大伴宿禰家持の追ひて作れる。

八月十三日、內の南の安殿に在して肆宴きこしめせる歌二首

左大臣和歌

左大臣宴於（元神）「左大臣於」

安我毛布伎美波

波奈尒奈蘇倍呂（元類）「波奈尒奈曾倍呂」

乎等賣良我多麻毛須蘇婢久許能尓波尓安伎可是不
吉豆波奈波知里都ゝ

右一首内匠頭兼播磨守正四位下安宿王奏之

安吉加是能布伎古吉之家流波奈能尓波伎欲伎都久
欲仁美礼杼安賀奴香母

右一首兵部少輔從五位上大伴宿禰家持　未奏

十一月廿八日左大臣集於兵部卿橘奈良麿朝臣宅宴歌
一首

高山乃伊波保尓於布流須我乃根能祢母許呂其呂尓
布里於久白雪

右一首左大臣作

天平元年班田之時使葛城王從山背國贈陁妙觀命婦等
所歌一首　副芹子裏

安可祢左須比流波多ゝ婢豆奴婆多麻乃欲流乃伊刀
末仁都賣流芹子許礼

陁妙觀命婦報贈歌一首

麻須良乎等於毛欲流母能乎多知波吉豆可尓波乃多
爲尓世理曾都美家流

四四五二 嬢子等が玉裳裾びく此の庭に秋風吹きて花は散りつつ

右の一首は、内匠頭兼播磨守正四位下安宿王の奏せる。

四四五三 秋風の吹き扱き敷ける花の庭清き月夜に見れど飽かぬかも

右の一首は、兵部少輔從五位上大伴宿禰家持　未奏

十一月二十八日、左大臣の、兵部卿橘奈良麻呂朝臣の宅
に集ひて宴せる歌一首

四四五四 高山の巌に生ふる菅の根のねもころごろに降り置く白雪

右の一首は、左大臣の作れる。

天平元年、班田の時の使葛城王の、山背の國より陁妙觀
命婦等の所に贈れる歌一首　芹子の裏に副へたり

四四五五 あかねさす晝は田たびてぬばたまの夜の暇に採める芹子これ

陁妙觀命婦の報へ贈れる歌一首

四四五六 丈夫と思へるものを刀佩きてかにはの田井に芹子ぞ採みける

大伴宿祢家持（元神）「大伴宿祢」

安可祢左須（元類）「安可祢佐須」

陁妙觀命婦等

陁妙觀命婦

右二首左大臣讀之云尓　左大臣是葛城王後賜橘姓也

天平勝寶八歳丙申二月朔乙酉廿四日戊申太上天皇大
后幸行於河内離宮經信以壬子傳幸於難波宮也三月七
日於河内國伎人郷馬國人之家宴歌三首

須美乃江能波麻末都我根乃之多婆倍呂和我見流乎
努能久佐奈加利曾祢

右一首兵部少輔大伴宿禰家持

尓保杼里乃於吉奈我河波半多延奴等母伎美尓可多
良武己等都奇来也母　古新未詳

右一首主人散位寮散位馬史國人

蘆苅尓保里江許具奈流可治能於等波於保美也比等
能未奈伎久麻泥尓

右一首式部少丞大伴宿禰池主讀之即云兵部大丞
大原眞人今城先日他所讀歌者也

保利江己具伊豆手乃船乃可治都久米於等之婆多知
奴美乎波也美加母

保里江欲利美乎左香能保流梶音乃麻奈久曾奈良波
古非之可利家留

右の二首は、左大臣の讀めると云へり。　左大臣は葛城王、後橘の姓を賜ひき。

天平勝寶八歳丙申二月の朔乙酉にして二十四日戊申の
日、太上天皇、大后、河内の離宮に幸行して、信を經、
壬子を以ちて難波の宮に傳幸し給ひき。三月七日、河内
の國伎人の郷の馬國人が家にて宴せる歌三首

四四五七 住吉の濱松が根の下延へて我が見る小野の草な刈りそね

右の一首は、兵部少輔大伴宿禰家持

四四五八 鴈鳥の息長河は絶えぬとも君に語らむ言盡きめやも　古新未詳

右の一首は、主人散位寮の散位馬史國人

四四五九 蘆刈りに堀江漕ぐなる楫の音は大宮人の皆聞くまでに

右の一首は、式部少丞大伴宿禰池主の讀める。即、兵部大丞
大原眞人今城の、先日他所にて讀みし歌なりといへり。

四四六〇 堀江漕ぐ伊豆手の船の楫つくめ音屋立ちぬ水脈早みかも

四四六一 堀江より水脈さかのぼる楫の音の間なくぞ奈良は戀しかりける

左大臣是葛城王後賜橘姓也

大后（元溫）「太皇太后」

之多婆倍呂（元神）「之多波倍旦」

古新未詳

未奈伎久麻泥尓

美乎左香能保流（元類）「美乎左可能保流」

梶音乃（元類）「梶乃音乃」

布奈藝保布保利江乃可波乃美奈伎波尒伎爲都〻奈
久波美夜故杼里香蒙

右三首江邊作之

保等登藝須麻豆奈久安佐氣伊可尒世婆和我加度須
疑自可多利都具麻涅

保等登藝須可氣都〻伎美我麻都可氣尒比毛等伎佐
久流都奇知可都伎奴

右五首廿日大伴宿祢家持依興作之

喩族歌一首 幷短歌

比左加多能安麻能刀比良伎多可知保乃多氣尒阿毛
理之須賣呂伎能可未能御代欲利波自由美乎多尒藝
利母多之麻可胡也乎多婆左美蘇倍旦於保久米能麻
須良多祁乎〻佐吉尒多旦由伎登利於保世山河乎伊
波祢左久美旦布美等保利久尒麻藝之都〻知波夜夫
流神乎許等牟氣麻都呂倍奴比等乎母夜波之波吉伎
欲米都可倍麻都里旦安吉豆之萬夜萬登能久尒乃可
之波良能宇祢備乃宮尒美也婆之良布刀之利多旦氐
安米能之多之良志賣之祁流須賣呂伎能安麻能日繼

四四六二 船競ふ堀江の河の水際に來居つつ鳴くは都鳥かも

右の三首は、江の邊にて作れる。

四四六三 霍公鳥まづ鳴く朝けいかにせば我が門過ぎじ語り繼ぐまで

四四六四 霍公鳥かけつつ君が松蔭に紐解き放くる月近づきぬ

右の五首は、二十日、大伴宿禰家持の興に依りて作れる。

族に喩す歌一首 幷に短歌

四四六五 ひさかたの 天の戸開き 高千穗の 嶽に天降りし 皇祖の
神の御代より 梔弓を 手握り持たし 眞鹿兒矢を 手挾み
添へて 大久米の 丈夫武雄を 先に立て 靫取り負せ 山
河を 磐根さくみて 履みとほり 國覓しつつ ちはやぶる
神をことむけ 服從はぬ 人をも和し 掃き清め 仕へ奉り
て 秋津島 大倭の國の 橿原の 畝傍の宮に 宮柱 太知
り立てて 天の下 知らしめしける 皇祖の 天の日嗣と

右五首（元）「右二首」

多婆左美蘇倍旦

麻都呂倍奴

可之波良能（元）「可之婆良能」

美也婆之良（神細）「美也波之良」

等都藝旦久流伎美能御代〻〻加久左波奴安加吉許
己呂乎須賣良弊尒伎波米都久之旦都加倍久流於夜
能都可佐等許等太旦氐佐豆氣多麻敞流宇美乃古能
伊也都藝都岐尒美流比等乃可多里都藝旦氐伎久比
等能可我見尒世武乎安多良之伎吉用伎曾乃名曾於
煩呂加尒己許呂於母比旦牟奈許等母於夜乃名多都
奈大伴乃宇治等名尒於敞流麻須良乎能等母
之奇志麻乃夜末等能久尒〻安伎良氣伎名尒於布等
毛能乎己許呂都刀米与
都流藝多知伊与餘刀具倍之伊尒之敞由佐夜氣久於
比旦伎尒之曾乃名曾

右緣淡海眞人三船讒言出雲守大伴古慈斐宿祢解
任是以家持作此歌也

臥病悲無常欲脩道作歌二首

宇都世美波加受奈吉身奈利夜麻加波乃佐夜氣吉見
都〻美知乎多豆祢奈
和多流日能加氣尒伎保比旦多豆祢旦奈伎欲吉曾能
美知末多母安波無多米

つぎて來る 君の御代御代 隱さはぬ 赤き心を 皇方に
極め盡して 仕へ來る 祖の職と 言立てて 授け給へる
子孫の いや繼ぎ繼ぎに 見る人の 語りつぎてて 聞く人
の 鑒にせむを 惜しき 清きその名ぞ おほろかに 心思
ひて 虛言も 祖の名斷つな 大伴の 氏と名に負へる 丈
夫の伴

四四六六 礒城島の大倭の國にあきらけき名に負ふ伴の緒心努めよ

四四六七 劍刀いよよ研ぐべし古ゆ清けく負ひて來にしその名ぞ

右は、淡海眞人三船の讒言に緣りて、出雲守大伴古慈斐宿禰解任せらる。是を以ちて家持此の歌を作れり。

病に臥して無常を悲み、修道を欲して作れる歌二首

四四六八 うつせみは數なき身なり山河の清けき見つつ道を尋ねな

四四六九 渡る日のかげに競ひて尋ねてな清きその道またも遇はむため

加久左波奴

大伴古慈斐

欲脩道（元）「欲修道」

願壽作歌一首

美都煩奈須可礼流身曾等波之礼〻杼母奈保之祢我比都知等世能伊乃知乎

以前歌六首六月十七日大伴宿祢家持作

冬十一月五日夜小雷起鳴雪落覆庭忽懷感憐聊作短歌一首

氣能己里能由伎尒安倍弖流安之比奇乃夜麻多知婆奈乎都刀尒通旀許奈

右一首兵部少輔大伴宿祢家持

八日讃岐守安宿王等集於出雲椽安宿奈杼麿之家宴歌二首

於保吉美乃美許登加之古美於保乃宇良乎曾我比尒美都〻美也古敞能保流

右椽安宿奈杼麿

宇知比左須美也古乃比等尒都氣麻久波美之比乃其等久安里等都氣己曾

右一首守山背王歌也主人安宿奈杼麿語云奈杼麿被差朝集使擬入京師因此餞之日各作歌聊陳所心也

壽を願ひて作れる歌一首

四四七〇 泡沫なす假れる身ぞとは知れれども猶し願ひつ千歳の命を

以前の歌六首は、六月十七日、大伴宿禰家持の作れる。

冬十一月五日の夜、小雷起り鳴り、雪落りて庭を覆ふ。忽に感憐を懷きて、聊作れる短歌一首

四四七一 消殘りの雪に合へ照るあしひきの山橘子を裹に採み來な

右の一首は、兵部少輔大伴宿禰家持

八日、讃岐守安宿王等の、出雲椽安宿奈杼麻呂の家に集ひて宴せる歌二首

四四七二 大君の命かしこみ於保の浦を背向に見つつ都へ上る

右は、椽安宿奈杼麻呂

四四七三 うち日さす都の人に告げまくは見し日の如く在りと告げこそ

右の一首は、守山背王の歌なり。主人安宿奈杼麻呂語りて云はく、奈杼麻呂朝集使に差され、京師に入らむとしき。此に因りて餞せし日、各歌を作りて聊所心を陳べきといへり。

奈保之祢我比都

小雷

感憐（元神）「盛憐」

安之比奇乃（元類）「安之比奇之」

夜麻多知婆奈乎（元）「夜麻多知波奈乎」

出雲椽

美許登加之古美

安宿奈杼麿

朝集使

各作歌（元）「各作此歌」

武良等里乃安佐太知伊尒之伎美我宇倍波左夜加尒伎吉都於毛比之其等久（一云於毛比之母乃乎）

右一首兵部少輔大伴宿祢家持後日追和出雲守山背王歌作之

廿三日集於式部少丞大伴宿祢池主之宅飲宴歌二首

波都由伎波知敞尒布里之家故非之久能於保加流和礼波美都〻之努波牟

於久夜麻能之伎美我波奈能奈能其等也之久之久伎美尒故非和多利奈無

右二首兵部大丞大原眞人今城

智努女王卒後圓方女王悲傷作歌一首

由布義理尒知杼里乃奈吉志佐保治乎婆安良之也之弖牟美流与之乎奈美

大原櫻井眞人行佐保川邊之時作歌一首

佐保河波尒許保里和多礼流宇須良婢乃宇須伎許己呂乎和我於毛波奈久尒

藤原夫人歌一首（淨御原宮御宇天皇之夫人也字曰氷上大刀自也）

安佐欲比尒祢能未之奈氣婆夜伎多知能刀其己呂毛

四四七四 群鳥の朝立ち往にし君が上はさやかに聞きつ思ひし如く（一に云ふ、思ひしものを）

右の一首は、兵部少輔大伴宿禰家持の、後の日に、出雲守山背王の歌に追ひて和へて作れる。

二十三日、式部少丞大伴宿禰池主の宅に集ひて飲宴せる歌二首

四四七五 初雪は千重に降りしけ戀ひしくの多かる吾は見つつ偲ばむ

四四七六 奥山の樒が花の名の如やしくしく君に戀ひわたりなむ

右の二首は、兵部大丞大原眞人今城

智努女王の卒りし後、圓方女王の悲み傷みて作れる歌一首

四四七七 夕霧に千鳥の鳴きし佐保道をば荒らしやしてむ見るよしを無み

大原櫻井眞人の、佐保川の邊を行きし時作れる歌一首

四四七八 佐保河に凍り渡れる薄氷のうすき心を我が思はなくに

藤原夫人の歌一首（淨御原の宮に天の下知らしめしし天皇の夫人なり。字を氷上大刀自といへり）

四四七九 朝夕に哭のみし泣けば燒刀の利心も吾は思ひかねつも

式部少丞

奈能其等也

由布義理尒（元神）「由布義利尒」

淨御原宮

刀其己呂毛安礼波（神細）「刀其己呂毛安礼婆」

安礼波於母比加祢都毛
可之故伎也安米乃美加度乎可氣都礼婆祢能未之奈
加由安佐欲比尒之弖 作者未詳

右件四首傳讀兵部大丞大原今城

三月四日於兵部大丞大原眞人今城之宅宴歌一首

安之比奇能夜都乎乃都婆吉都良〻〻尒美等母安可
米也宇惠弖家流伎美

右兵部少輔大伴家持屬植椿作

保里延故要等保伎佐刀麻弖於久利家流伎美我許己
呂波和須良由麻之自

右一首播磨介藤原朝臣執弓赴任悲別也主人大原
今城傳讀云尒

勝寶九歲六月廿三日於大監物三形王之宅宴歌一首

宇都里由久時見其登尒許己呂伊多久牟可之能比等
之於毛保由流加母

右兵部大輔大伴宿祢家持作

佐久波奈波宇都呂布等伎安里安之比奇乃夜麻須我
乃祢之奈我久波安利家里

四四八〇 かしこきや天の御門をかけつれば哭のみし泣かゆ朝夕にして
作者いまだ詳ならず

右の件の四首は、傳へ讀めるは兵部大丞大原今城

三月四日、兵部大丞大原眞人今城の宅にて宴せる歌一首

四四八一 あしひきの八峯の椿つらつらに見とも飽かめや植ゑてける君

右は兵部少輔大伴家持の、植ゑたる椿に屬けて作れる。

四四八二 堀江越え遠き里まで送りける君が心は忘らゆましじ

右の一首は、播磨介藤原朝臣執弓の、任に赴き、別を悲めるなり。主人大原今城傳へ讀みて云へり。

勝寶九歲六月二十三日、大監物三形王の宅にて宴せる歌一首

四四八三 移り行く時見る毎に心いたく昔の人し思ほゆるかも

右は、兵部大輔大伴宿禰家持の作れる。

四四八四 咲く花はうつろふ時ありあしひきの山菅の根し長くはありけり

美等母安可米也（元古葉）「美等母安加米也」

和須良由麻之自（元〻）「和須良由麻之目」

右一首大伴宿祢家持悲怜物色變化作之也

時花伊夜米豆良之母加久之許曾賣之安伎良米晩阿
伎多都其等尒

右大伴宿祢家持作之

天平寶字元年十一月十八日於內裏肆宴歌二首

天地乎弖良須日月乃極奈久阿流倍伎母能乎奈尒乎
加於毛波牟

右一首皇太子御歌

伊射子等毛多波和射奈世曾天地能加多米之久尒曾
夜麻登之麻祢波

右一首內相藤原朝臣奏之

十二月十八日於大監物三形王之宅宴歌三首

三雪布流布由波祁布能未鷽乃奈加牟春敞波安須尒
之安流良之

右一首主人三形王

宇知奈婢久波流乎知可美加奴婆玉乃己与比能都久
欲可須美多流良牟

右一首大藏大輔甘南備伊香眞人

右の一首は、大伴宿禰家持の、物色の變化を悲び怜びて作れる。

四四八五 時の花いやめづらしもかくしこそ見し明らめめ秋立つごとに

右は、大伴宿禰家持の作れる。

天平寶字元年十一月十八日、內裏にて肆宴きこしめせる歌二首

四四八六 天地を照らす日月の極無くあるべきものを何をか思はむ

右の一首は、皇太子の御歌

四四八七 いざ子どもたはわざな爲そ天地の固めし國ぞ大倭島根は

右の一首は、內相藤原朝臣の奏せる。

十二月十八日、大監物三形王の宅にて宴せる歌三首

四四八八 み雪降る冬は今日のみ鶯の鳴かむ春べは明日にしあるらし

右の一首は、主人三形王

四四八九 うち靡く春を近みかぬばたまの今宵の月夜霞みたるらむ

右の一首は、大藏大輔甘南備伊香眞人

加久之許曾（元類）「可久之許曾」

右（元神）「右一首」

弖良須日月乃奈尒乎加於毛波牟

鷽乃

安良多末能等之由伎我敞理波流多〻婆末豆和我夜
度尒宇具比須波奈家

右一首右中辨大伴宿祢家持

於保吉宇美能美奈曾己布可久於毛比都〻毛婢伎奈
良之思須我波良能佐刀

右一首藤原宿奈麿朝臣之妻石川女郎薄愛離別悲
恨作歌也　年月未詳

廿三日於治部少輔大原今城眞人之宅宴歌一首

都奇餘米婆伊麻太冬奈里之可須我尒霞多奈婢久波
流多知奴等可

右一首右中辨大伴宿祢家持作

二年春正月三日召侍從竪子王臣等令侍於內裏之東屋
垣下即賜玉箒肆宴于時內相藤原朝臣奉勅宣諸王卿等
隨堪任意作歌幷賦詩仍應　詔旨各陳心緒作歌賦詩
未得諸人之賦詩幷作歌也

始春乃波都祢乃家布能多麻婆波伎手尒等流可良尒
由良久多麻能乎

右一首右中辨大伴宿祢家持作但依大藏政不堪奏

四四九〇あらたまの年行き還り春立たばまづ我が屋戸に鶯は鳴け

右の一首は、右中辨大伴宿禰家持

四四九二大き海の水底深く思ひつつ裳引きならしし菅原の里

右の一首は、藤原宿奈麻呂朝臣が妻石川女郎の、愛海らぎ離別せられ、悲み恨みて作れる歌なり。年月いまだ詳ならず。

二十三日、治部少輔大原今城眞人の宅にて宴せる歌一首

四四九二月數めばいまだ冬なりしかすがに霞たなびく春立ちぬとか

右の一首は、右中辨大伴宿禰家持の作れる

二年春正月三日、侍從竪子王臣等を召して、內裏の東屋の垣下に侍はしめ、即玉箒を賜ひて肆宴きこしめしき。時に內相藤原朝臣勅を奉りて、宣はく、諸王卿等、堪ふるまにま、意に任せて、歌を作り幷せて詩を賦せよといへり。仍りて詔旨に應へ、各心緒を陳べて歌を作り詩を賦しき。いまだ諸人の賦せる詩幷せて作れる歌を得ず。

四四九三始春の初子の今日の玉箒手に執るからにゆらく玉の緒

右の一首は、右中辨大伴宿禰家持の作れる。但し大藏の政に依

任意

不堪奏之（元細）「不堪奏之也」

之

水鳥乃可毛羽能伊呂乃青馬乎家布美流比等波可藝
利奈之等伊布

右一首爲七日侍宴右中辨大伴宿祢家持預作此歌
但依仁王會事却以六日於內裏召諸王卿等賜酒肆
宴給祿因斯不奏也

六日內庭假植樹木以作林帷而爲肆宴歌一首

打奈婢久波流等毛之流久宇具比須波宇惠木之樹間
乎奈枳和多良奈牟

右一首右中辨大伴宿祢家持　不奏

二月於式部大輔中臣清麿朝臣之宅宴歌十五首

宇良賣之久伎美波母安流加夜度乃爲梅能知利須具
流麻遅美之米受安利家流

右一首治部少輔大原今城眞人

美牟等伊波婆伊奈等伊波米也宇梅乃波奈知利須具
流麻豆伎美我伎麻左奴

右一首主人中臣清麿朝臣

波之伎余之家布能安路自波伊蘇麻都能都祢尒伊麻

りて奏し堪へざりき。

四四九四水鳥の鴨羽の色の青馬を今日見る人は限無しといふ

右の一首は、七日の侍宴の爲に、右中辨大伴宿禰家持かねて此の歌を作れる。但し仁王會の事に依り、却りて六日を以ちて內裏に諸王卿等を召して酒を賜ひ肆宴きこしめし、祿を給ひき。これに因りて奏さざりき。

六日、內庭に假に樹木を植ゑて林帷と作して肆宴きこしめせる歌一首

四四九五うち靡く春ともしるく鶯は植木の樹間を鳴き渡らなむ

右の一首は、右中辨大伴宿禰家持奏す

二月、式部大輔中臣清麻呂朝臣の宅にて宴せる歌十五首

四四九六怨しく君はもあるか屋戸の梅の散り過ぐるまで見しめずありける

右の一首は、治部少輔大原今城眞人

四四九七見むといはば否といはめや梅の花散り過ぐるまで君が來まさぬ

右の一首は、主人中臣清麻呂朝臣

四四九八愛しきよし今日の主人は磯松の常にいまさね今も見る如

可毛羽能伊呂乃（元神）「可毛能羽能伊呂乃」

奈枳和多良奈牟（元類）「奈伎和多良奈牟」

十五首（元）「十首」

夜度乃爲梅能（元神）「夜度乃爲梅乃」

伎美我伎麻左奴

佐祢伊麻母美流其等

右一首右中辨大伴宿祢家持

和我勢故之可久志伎許散婆安米都知乃可未乎許比能美奈我久等曾於毛布

右一首主人中臣清麿朝臣

宇梅能波奈香乎加具波之美等保家杼母己許呂母之努介伎美乎之曾於毛布

右一首治部大輔市原王

夜知久佐能波奈波宇都呂布等伎波奈流麻都能左要太乎和礼波牟須婆奈

右一首右中辨大伴宿祢家持

鴈梅能波奈左伎知流波流能奈我伎比乎美礼杼母安加奴伊蘇介母安流香母

右一首大藏大輔甘南備伊香眞人

伎美我伊敞能伊氣乃之良奈美伊蘇介与世之婆之婆美等母安加無伎旅加毛

右一首右中辨大伴宿祢家持

宇流波之等阿我毛布伎美波伊也比家介伎末勢和我

右の一首は、右中辨大伴宿禰家持

四四九九 我が夫子しかくしきこさば天地の神を乞ひ祈み長くとぞ思ふ

右の一首は、主人中臣清麿朝臣

四五〇〇 梅の花香をかぐはしみ遠けども心もしのに君をしぞ思ふ

右の一首は、治部大輔市原王

四五〇一 八千種の花はうつろふ常磐なる松のさ枝を吾は結ばな

右の一首は、右中辨大伴宿禰家持

四五〇二 梅の花咲き散る春の永き日を見れども飽かぬ磯にもあるかも

右の一首は、大藏大輔甘南備伊香眞人

四五〇三 君が家の池の白浪磯に寄せしばしば見とも飽かむ君かも

右の一首は、右中辨大伴宿禰家持

四五〇四 愛しと我が思ふ君はいや日けに來ませ我が夫子絶ゆる日無し

美礼杼母安加奴

伎末勢和我世古（細）「伎末勢和我世呂」

世古多由流日奈之介

右一首主人中臣清麿朝臣

伊蘇能宇良介都祢欲比伎須牟乎之杼里能宇乎之伎安我未波伎美我末仁麻介

右一首治部少輔大原今城眞人

依興各思高圓離宮處作歌五首

多加麻刀能努乃宇倍能美也波安礼介家里多〻志〻伎美能美与等保曾氣婆

右一首右中辨大伴宿祢家持

多加麻刀能乎能宇倍乃美也波安礼奴等母多〻志〻伎美能美奈和須礼米也

右一首治部少輔大原今城眞人

多可麻刀能努敞波布久受乃須惠都比介知与介和須礼牟和我於保伎美加母

右一首主人中臣清麿朝臣

波布久受能多要受之努波牟於保吉美乃賣之思野邊介波布久受能絶受偲牟大君乃見之野邊介波標結布倍之母

介波之米由布倍之母

右一首右中辨大伴宿祢家持

に

右の一首は、主人中臣清麿朝臣

四五〇五 礒のうらに常喚び來棲む鴛鴦の惜しき我が身は君がまにまに

右の一首は、治部少輔大原今城眞人

興に依りて各高圓の離宮處を思びて作れる歌五首

四五〇六 高圓の野の上の宮は荒れにけり立たしし君の御代遠そけば

右の一首は、右中辨大伴宿禰家持

四五〇七 高圓の尾の上の宮は荒れぬとも立たしし君の御名忘れめや

右の一首は、治部少輔大原今城眞人

四五〇八 高圓の野邊はふ葛の末終に千代に忘れむ我が大君かも

右の一首は、主人中臣清麿朝臣

四五〇九 はふ葛の絶えず偲ばむ大君の見しし野邊には標結ふべしも

右の一首は、右中辨大伴宿禰家持

主人

努乃宇倍能美也波（類）「努乃宇倍能美也婆」
多〻志〻伎美能

乎能宇倍乃美也波（元細）「乎能宇倍乃美也婆」

大原今城（元古葉）「今城」

於保吉美乃（元類）「於保吉能」

於保吉美乃都藝豆賣須良之多加麻刀能努儀美流其
等尒祢能末之奈加由

右一首大藏大輔甘南備伊香眞人

屬目山齋作歌三首

乎之能須牟伎美我許乃之麻家布美礼婆安之婢乃波
奈毛左伎尒家流可母

右一首大監物御方王

伊氣美豆尒可氣左倍見要氐佐伎尒保布安之婢乃波
奈乎蘇豆尒古伎礼奈

右一首右中辨大伴宿祢家持

伊蘇可氣乃美由流伊氣美豆氐流麻渥尒左家流安之
婢乃知良麻久乎思母

右一首大藏大輔甘南備伊香眞人

二月十日於內相宅餞渤海大使小野田守朝臣等宴歌一
首

阿乎宇奈波良加是奈美奈妣伎由久左久佐都〻牟許
等奈久布祢波〻夜家無

右一首右中辨大伴宿祢家持 未誦之

四五一〇大君の継ぎて見すらし高圓の野邊見るごとに哭のみし泣かゆ

右の一首は、大藏大輔甘南備伊香眞人

山齋に屬目して作れる歌三首

四五一二鶯の住む君がこの山齋今日見れば馬酔木の花も咲きにける
かも

右の一首は、大監物御方王

四五一三池水に影さへ見えて咲きにほふ馬酔木の花を袖に扱入れな

右の一首は、右中辨大伴宿禰家持

四五一四礒かげの見ゆる池水照るまでに咲ける馬酔木の散らまく惜し
も

右の一首は、大藏大輔甘南備伊香眞人

二月十日、內相の宅に勃海大使小野田守朝臣等を餞する
宴の歌一首

四五一四蒼海原風波なびき行くさ來さつつむことなく船は早けむ

右の一首は、右中辨大伴宿禰家持 未誦之

可氣左倍見要氐

小野田守

未誦之

七月五日於治部少輔大原今城眞人宅餞因幡守大伴宿
祢家持宴歌一首

秋風乃須惠布伎奈婢久波疑能花登毛尒加射左受安
比加和可礼牟

右一首大伴宿祢家持作之

三年春正月一日於因幡國廳賜饗國郡司等之宴歌一首

新年乃始乃波都波流能家布敷流由伎能伊夜之家餘
其騰

右一首守大伴宿祢家持作之

萬葉集卷第二十

七月五日、治部少輔大原今城眞人の宅に、因幡守大伴宿
禰家持を餞する宴の歌一首

四五一五秋風のすゑ吹き靡く芽子の花ともに揮頭さずあひか別れむ

右の一首は、大伴宿禰家持の作れる。

三年春正月一日、因幡の國の廳にて、饗を國郡の司等に
賜へる宴の歌一首

四五一六新しき年の始の初春の今日降る雪のいや重け吉事

右の一首は、守大伴宿禰家持の作れる。

萬葉集卷の第二十

治部少輔（元神）「式部少輔」

年乃始乃

卷第二十

定本萬葉集別記　五

定本萬葉集卷第十七別記

目錄 一頁 三行

天平二年庚午　以下、元暦校本には目錄が無く、直に本文を書いてゐる。仙覺の萬葉集奥書に依れば、二十卷とも目錄の無い本と、卷第十六まで目錄があつて十七以下の四卷に目錄の無い本と、二十卷全部に目錄の無い本とがあつたさうである。今は全部に目錄の無い本は殘つて居ない。元暦校本は、卷第十七、十八、十九の三卷に目錄が無く、卷第二十には目錄があるが、これは別途の傳來のものと考へられるから、結局第十七以後目錄の無い本に屬するのであらう。目錄は元來第二義的のもので、後人の編纂と認められるが、今、底本に依つてこれを存すること、他卷の例に倣ふ。また殘つてゐる目錄も、底本の流と細井本の流との二系統とに分けられる。今、底本の流に依る。

三行

大宰帥　大は神田本等に依る。底本には太に作つてゐる。

傔從人等　傔從は、底本等に依る。細井本には倍從に作つてゐる。底本に人の左に美本目六無此字とある。本文題詞には無いが、底本のまゝとする。

六行

大伴宿祢家持　底本等諸本にすべて同じである。本文に在つては、元暦校本に大伴宿禰書持の作として居り、仙覺本等にこれを家持の作とするは誤と認められる。この目錄に家持とあるは、目錄を作つた當時、本文が既に誤つてゐたものであらう。今、底本のまゝにしておく。

大宰時　大は、神田本等に依る。底本には太に作つてゐる。

一〇行

四月二日　細井本に、この上に同年の二字がある。今、底本等に依る。

一五行

正月日雪　日は、底本等に依る。細井本及び神田本には白に作つてゐる。これは本文の題詞の要を摘んで書いたものであり、いづれとも定めかねるが、今、底本に依る。

一六行

十六首　諸本皆同じである。本文に作歌を載せない人名を列擧し、その中に歌を有せざる秦忌寸朝元を除けば、十七人である。こゝに十六首とあるは、恐らくは十七首の誤であらう。今、底本等のまゝとする。

三頁 四行 **大目** 底本等に依る。活字附訓本に至つて目を日に誤つたのである。

一八行 **悲傷歌一首** 一は、底本等に依る。細井本に、二に作つてゐる。

三頁 二行 **大伴宿祢家持歌** 細井本には、持の下に作の字がある。今、底本等に依る。この邊、作の字の無い例である。

三行 **沽洗** 沽は諸本に皆同じである。これは十二律を十二月に配當したのから來て居るのであるから、代匠記の説のやうに姑に作るをよしとするであらう。しかし諸本皆沽である以上は、もとから通用して用ゐられなかつたとも斷定し難い。依つて今もとのまゝにして置く。本文も同樣である。

椽大伴池主歌二首 細井本に掾大伴池主更贈歌一首幷短歌三首に作つてゐる。この細井本の目錄は、沽洗二日の池主の歌に、次の家持の更贈歌幷短歌三首を誤つて併せて書いたものである。今、底本等に依る。

五行 **詩歌一首** 一は、底本等に依る。細井本等には、二に作つてゐる。本文を按ずるに一を可とする。

八行 **起戀情歌一首幷短歌** 一は、細井本に依る。底本等には二に作つてゐる。本文に依るに二は誤である。猶細井本には短歌の下に四首の字があるが、これは無きを例とする。今、底本に依る。

一〇行 **三月卅日** 細井本に、三月廿九日に作つてゐる。本文に依るに、この歌は三月卅日の作である。今、底本に依る。

二上山賦一首幷短歌 細井本に幷短歌が無い。本文題詞にもこれが無いが、今、底本に依り、他の例を按じてこれを存することとする。

一二行 **卅日大伴家持依興作歌一首** 本文に依るに、三月卅日に家持が興に依つて作つたのは二上山の賦であり、これは既に前行に出てゐるのであつて、この行は全く誤つて目錄に採られたものである。今しばらく底本に依つてこれを存して置く。

一三行 **餞守大伴家持歌** 守は、底本等に依る。細井本にはこの字が無い。

一四行 **布施水海** 施は底本等に依る。細井本等には勢に作つてゐる。

一五行 **廿六日** 六は、底本等に依る。細井本には、四に作つてゐる。

布施水海 施は、底本等に依る。細井本等には勢に

作つてゐる。

一七行 **餞守家持歌** 底本に、持の下に作の字がある。今、多本に依つてこれを削る。

四頁 一行 **石川朝臣水通** 川は、細井本等に依る。底本等には河に作つてゐる。本文題詞も、底本は河であるが、元暦校本等には川に作つてゐる。

六行 **五月二日** 二は、底本等に依る。細井本には、五に作つてゐる。

九行 **大伴宿祢家持** 細井本に、この上に同二十年の四字がある。今、底本等に無いのに依る。

三行 **造酒歌** 細井本に造の上に又の字がある。今、底本等に無いのに依る。

三八九〇 題詞 **大宰帥** 大は、底本及び元暦校本に依る。細井本には太に作つてゐる。

傔從 傔從は、底本等に依る。細井本には陪從人に作つてゐる。此處は意味から言つても、傔從を是とすべきである。

羈旅 羈は、元暦校本等に依る。底本等に羇に作つてゐるのは正字であるが、古本には羈に作る方が通例である。

伊蘇其登尒 底本に、伊蘇以下二十字は、その頁の

三八九三

最後の行に書き、記號を以つて、この位置に入れるやうに示してゐる。今、多本に依る。

波氐尒家里 氏は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。なほ本卷以下、氏の字形は、氏旦を併用し、諸本に大體、使用個處に依つて、氏もしくは旦のいづれかに、一致してゐる。今、主として底本に依り、その字形を存することとする。

敷奈佰婆勢之可 佰は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。

三八九五

大船乃 以下五首の順序は、底本及び元暦校本等に依る。細井本には、大船乃、海未通女、多麻波夜須、家尒底母、大海乃の順になつて居り、寛永版本もこれに依つたので、國歌大觀はこれに依つて番號を附けてゐる。作者未詳の歌であつて、同一題下にあるのであるから、いづれにても通ずるのであるが、三八九九の歌に、都努乃松原とあり、三八九五の歌に、武庫能和多里とあるので、底本の順の方が順序である事が知られる。

三八九八

歌乞和我世 元暦校本にウタコヒワカセの訓がある。仙覺本にウタコツワカセの訓がある。近世に入つて誤字説も出た。乞は、希望の助詞コソに宛てて

ある例も多いので、このまゝならば、ウタヒコソワガセと讀むべきであらう。今、訓を缺く。細井本にこの下に赭小字に諸本如此可尋之との七字があり、活字無訓本以後本文に入れてゐるが、勿論後人の書入である。

三八九五 **日能久礼由氣姿** 婆は、元暦校本等に依る。底本等には波に作つてゐる。

三八九六 **宇伎氐之乎礼婆** この字面は、元暦校本に依る。底本等には、思之乎礼婆に作り、別に歌の下に一云宇伎氐之乎礼八の註を有して居る。歌意から言つても、波の上に浮きてし居ればで、よく通ずる處である。これを原形と爲すべきであらう。

三八九七 **問之兒良波母** 良は、元暦校本、類聚古集に依る。底本等は等に作つてゐる。いづれにしても通ずる處である。

三九〇一 題詞 **大宰之時** 大は、元暦校本等に依る。底本等には太に作つてゐる。

三九〇一 **遠流人毛奈之** 流は、底本に依る。元暦校本には久に作つてゐる。これは、元暦校本孤立の字面で、遽に採用し難いが、招く人も無しの義とせば、別の意味になつて、これもおもしろいのである。これは卷の五にある梅花の歌の追和の新歌であるが、卷の五の梅花の歌の初の歌、武都紀多知波流能吉多良婆可久斯許曾烏梅乎々利都々多努之岐乎倍米（八一五）の第四句を、神田本、細井本には、烏梅乎々岐都々に作つてゐるのと呼應するものといふべきである。招くは、目馴れない語であるので、卷の五、卷の十七共に、折るの目易きに移つたかとも考へられる處である。

三九〇三 **見禮登安可尓勢牟** 勢は、底本等に依る。細井本には氣に作つてゐる。氣では意を成さぬ處である。

三九〇三 **常乃物能香聞** 能は、底本等に依る。細井本には能の字が無い。訓讀には關係の無い所であるが、物能二字を字音假字として、モノと讀ましめたのであらう。

乎理加謝思底婆 婆は、元暦校本等に依る。底本等には、波に作つてゐる。

三九〇五 **十二年十二月九日** この字面は、元暦校本に依る。底本等十二月を十一月に作り、細井本には十二年の上に天平の二字がある。いづれも梅の歌で、いまだ春ならざるに詠んでゐるのであるが、十一月では少しく早きに失する。十二月を是とすべきである。

大伴宿祢書持 書持は、元暦校本に依る。底本等は家持である。萬葉集目錄にはこれらの歌を、書持の作として數へて居り、且家持は有名、書持は無名であるので、家持を書持に誤る機會はまづ少いと思はれる。書持説に從ふべきである。

三九〇七 **久迩能美夜古波** 迩は、元暦校本に依る。底本等には尓である。訓には關係の無い處であるが、京師の久迩には多く迩を用ゐてゐる。

花咲乎之理 咲は、元暦校本等に依る。底本には喚に作り、右に別筆で咲を書いてゐる。

三九〇八 左註 **秋左礼婆** 左は、元暦校本等に依る。底本等には佐に作つてゐる。

都加倍麻都良武 加は、底本等に依る。細井本には可に作つてゐる。

三九一〇 左註 **贈兄家持** 細井本にはこの下に和歌二首の四字がある。今、底本等に無きに依る。これは和歌では無い。

三九一一 序詞 **霍鳥鼓嘆** 霍鳥は底本等に依る。細井本には霍公鳥と記してある。上の橙橘初咲の句に對して四字の句であるべきであるから、公の無きを以つて可となすべきである。

對此時候 候は、底本等に依る。活字附訓本に至つて候に誤つた。

三九一四 左註 **仍作件歌** 件は、多本に依る。底本には件は直して居り、又消して右に件を書いてゐる。

三九一五 題詞 **山部宿祢明人** 明人は、底本等に依る。類聚古集にも歌の下に山部宿祢明人とある。この人の名は赤人と書く事が普通であるが、古人は同じ音聲に讀まれれば、必しも一定の漢字を用ゐなかつたものである。此處は明人を原形となすべきであらう。

三九一五 **山谷古延氐** 氐は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。

野豆加佐尓 加は、底本等に依る。細井本には可に作つてゐる。

三九一七 **花者須具登毛** 具は、元暦校本等に依る。底本等には久に作つてゐる。登は、底本等多本に依る。細井本には等に作つてゐる。

三九一八 **保登等藝須** 登等は、底本等に依る。細井本には登無く右に書き入れて居り、活字無訓本以後、この句を保等登藝須に作つてゐる。

三九一九 **不鳴安良久尒** 諸本に異傳の無い處であるが、元暦校本等この句をナカズアラナクニと讀んでゐる本も多い。代匠記には、良の字の下に奈の字を脱すとしてゐる。今按ずるに、この歌、上に奈良の都は古りぬれどとあるのに對して、舊人なる霍公鳥の鳴かないといふ事で、意味が通ずるのである。前の歌も、霍公鳥の鳴いたことを人傳に聞いたとはあるが、みづから聞いた趣では無い。依つて今、底本のまゝとし、ナカズアラクニの訓を採る。

三九二〇 **鶉鳴** 鶉は、多本に依る。底本に、鶉を鷯に作つてゐる。

於毛敝礼騰 敝は、底本等に依る。細井本には弊に作つてゐる。

三九二一 左註 **右大伴宿祢家持作** 底本等には右の下に、六首歌者天平十六年四月五日獨居於平城故郷舊宅の二十一字がある。これらは既に題に見えてゐる所であるから、重ねて此處に無きを可とするであらう。今、元暦校本に依る。

三九二三 題詞 **十八年正月** 底本等、十八年の上に天平の二字がある。今、元暦校本に依つて削る。前からの連續で、ただ年のみが變るのであるから、年號の無きを可とするであらう。

諸王臣等 底本等、諸王諸臣等に作つてゐる。今、元暦校本に依つて下の諸を削る。

中宮西院 西は、底本等に依る。細井本には兩に作つてゐる。

諸卿大夫 細井本に、この下に等がある。今、底本等に依る。

三九二三 **賜酒** 酒は、底本等に依る。活字附訓本に至つて海に誤つた。

須泥尒於保比氐 氐は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。

三九二四 **由吉能布礼ゝ婆** 婆は、元暦校本等に依る。底本等には波に作つてゐる。

三九二五 **大宮能** 能は、元暦校本、類聚古集等に依る。底本には之に作つてゐる。此處は字音假字の多く用ゐら

三九二六 左註 れてゐる處であるから、能を可とするであらう。

巨勢奈弖麿朝臣 弖は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。

智奴王 奴は、底本等に依る。細井本には努に作つてゐる。但しこの人、四二七五の左註には文室智努とある。

三九二七 **小田王** 小は、元暦校本に依る。底本等すべて山に作つてゐるが、山田王は續日本紀に見えない。小田王は續日本紀に天平六年以下數出してゐる。これを可とすべきであらう。

小野朝臣綱手 綱は、底本等に依る。活字附訓本に至るまで綱であつたのを、寛永版本に至つて綱に誤刻した。

三九二八 **謥云** 兩字は、底本等に依る。細井本には諺曰に作つてゐる。

三九二九 **默已也** 默は、元暦校本に依る。底本等には、點に作つてゐる。已は、底本等に依る。細井本には止に作つてゐる。

三九三〇 **以閏七月** 底本等、以の下に天平十八年の五字があつたのを、今、元暦校本に依つて削る。前からの續きであるから無くてよい處である。この年の閏は九月に在り、閏七月に任命せられて七月に赴任したといふのは不審であるが、何月に改むべしといふことを知らない。故に底本のまゝとする。

三九三一 **大伴氏坂上郎女** 氏は、底本等に依る。細井本にはこの字が無い。

三九三二 **安我登許能敝尒** 敝は、底本等に依る。細井本には弊に作つてゐる。

三九三三 **伊麻能其等** 其は、多本に依る。底本には去に作つてゐる。

三九三四 **吉美志毛都藝氐** 氐は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。

三九三五 **登吉佐氣受之氐** 同前。

三九三六 **餘呂豆代等** 等は、元暦校本に依る。底本等には尒に作つてゐる。等は、古義の説に一致する所である。

三九三七 **許己呂波刀氣氐** 氐は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。

三九四〇 **都美之手見都追** 手は、元暦校本に依る。略解にも手の誤としてゐる。底本等には乎に作つてゐる。

三九四一 **奈久ゝ良多尒ゝ** 下のゝは、底本等に依る。細井本には之に作つてゐる。

三九四一 **宇知波米氏** 氏は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。

三九四二 左註 **右件歌者** 底本等、件の下に十二首の三字がある。今、元暦校本に依つて削る。題に既に十二首とあり、重ねて記すに及ばぬ處である。

在一度 一は、多本に依る。底本には本文中に無く右に書いてゐる。

三九四三 **穗牟伎見我氏里** 氏は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。

三九四六 **布左多乎里家流** 左は、底本等に依る。細井本にはこの字無く右に書いてゐる。活字無訓本以後佐に作つてゐる。

三九四七 **奈伎氏須疑尒之** 氏は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。

家佐能安佐氣 家は、底本等に依る。細井本には氣に作つてゐる。集中今朝今旦とのみあつて、假字書きのものは此處のみである。從つていづれの假字を是とすべきかを明にせぬが、古本に依れば家を以つて原形と爲すべきであらう。

三九四八 **安麻射加流** 加は、底本等に依る。細井本には可に作つてゐる。

三九四九 **由比氏之紐乎** 氏は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。

比母登吉佐氣氏 底本等には母の下に毛の字がある。今、元暦校本等に依つて削る。歌としても無き方が諧調である。氏は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。

三九五〇 **伊敝尒之底** 敝は、底本等に依る。細井本には弊に作つてゐる。

三九五〇 左註 **守大伴宿祢家持** 底本等、家持の下に作の字がある。今、元暦校本に依つて削る。この前後の二首も、作の字が無い。

三九五一 **乎美奈敝之** 敝は、氏本等に依る。細井本には弊に作つてゐる。

三九五二 **伊毛我伊敝尒** 同前。

伊久里能母里乃 上の里は、底本等に依る。細井本には理に作つてゐる。

伊麻許牟春母 母は、元暦校本等に依る。底本等には毛に作つてゐる。母と毛とは、本集では、別に區別して使つてゐない。

三九五四 **馬並氏** 氏は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。

三九五六 **敷奈太那宇知氏** 同前。

安倍弖許藝泥米 弖は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。

三九五七 左註 **主人** 底本等、主人の下に八千嶋の三字がある。今元暦校本及び古葉略類聚鈔に依つてこれを削る。

三九五七 **奈良夜麻須疑氏** 氏は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。

安礼可敝理許牟 敝は、底本等に依る。細井本には弊に作つてゐる。理は、元暦校本等に依る。底本等には、里に作つてゐる。

伊波比氏待登 氏は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。

可多良比氏 同前。

敝奈里氏安礼婆 敝及び氏は、底本等に依る。細井本には、弊及び底に作つてゐる。

多波許登等可毛 波は、元暦校本等に依る。底本等には婆に作つてゐる。波の方を順當とするであらう。

波之伎余思 同前。

時之波安良牟乎 同前。

波太須酒吉 同前。

三九六七 小註 **尒保敝流屋戸乎** 敝は、底本等に依る。細井本には弊に作つてゐる。

多植 植は、類聚古集等に依る。底本には値に作つてゐる。但し扁は直してある。本集の例、植樹の植は、多く殖を用ゐるのであり、此處も溫故堂本には殖に作つてゐる。

三九六八 **佐保能宇知乃** 元暦校本及び類聚古集に、知を治に作つてゐるが、歌後の小註には知であるから、今、これを採らない。

三九六九 **佐刀乎由吉須疑** 刀は、多本に依る。底本には力に作つてゐる。但し削つて刀に直してゐる。

三九七〇 **伊比氏之物能乎** 氏は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。

三九七一 **可祢弖思理世婆** 弖は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。

三九七二 **見世麻之物能乎** 底本に、能の字が無い。今、元暦校本等に依る。三九〇三常乃物能香聞の別記參照。

三九七九 左註 **右九月** 底本等、右の下に、天平十八年秋の六字がある。今、元暦校本に依つて削る。前からの續きで無きを可とするであらう。

三九六〇 題詞 **相歡歌二首** 底本等、この下に、越中守大伴宿祢家持作の十字がある。今、元暦校本に依つて削る。左註に作者の名が見えてゐるのであるから、題の下に註するを要せぬ所である。

三九六〇 **於母比兵伎美乎** 兵は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。

三九六一 左註 **右以八月** 底本等、以の下に天平十八年がある。今、元暦校本に依つて削る。

赴向京師 赴は、多本に依る。底本にもとの字を磨り消して書いてゐる。

彈絲飲樂 絲は、類聚古集等に依る。底本には絲に作つてゐる。但し朱で消してあり右に絲を書いてゐる。

是日也 日は、元暦校本等に依る。底本等、この字が無い。

漁夫之船 底本等にはこの上に復の一字がある。今、元暦校本に依つて削る。但し元暦校本には、右に赭で、復有泉郎船浮漂波浪の九字がある。この巻に於ける元暦校本の赭の記事に就いては、別に考究を要するものがあつて、恐らくは作者の別案と認むべきもののもあるやうである。復の字の如きはこれを本文に加へたものの如くである。

三九六二 題詞 **裁所心** 元暦校本、類聚古集に、裁欣歌に作つてゐる。他の例に依るに、裁此歌であつて、此を欣に誤つたものであるかも知れない。今、底本のままとする。

三九六二 **忽沈枉疾** 枉は、元暦校本に依る。底本等には狂に作つてゐる。

山坂古延旦 旦は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。

宇都世美能 都は、多本に依る。底本等には津に作つてゐる。

波ミ能美許等乃 波ミは、元暦校本等に依る。底本等には婆ミに作つてゐる。

麻多須良牟 牟は、底本等に依る。細井本には武に作つてゐる。

遠理加敞之都追 敞は、底本等に依る。細井本には弊に作つてゐる。

奴婆多麻能 婆は、底本等に依る。細井本には波に作波つてゐる。

和可伎兒等毛波 波は、元暦校本等に依る。底本等には婆に作つてゐる。

三九六三 **美知乎多騰保旅** 底本に、保旅以下の二十字は、その頁の最後の行に書いてゐる。但しこの位置に入れるやうに記號を附けてゐる。今、多本に依る。

許登都氐夜良受 氐は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。

加苦思氐也 同前。

加受奈枳物能可 枳は、底本等に依る。細井本には吉に作り、大矢本には伎に作つてゐる。いづれも同類の字で差支へは無い處である。

知里能麻我比尒 我は、底本等に依る。細井本には可に作つてゐる。

三九六四 左註 **右十九年** 底本等右の下に天平の二字がある。今、元暦校本に依つて削る。

二月廿日 元暦校本に廿の下に一の字がある。いづれが原形であるか判斷に苦む處であるが、目錄にも二月廿日に作つてゐるから、今、底本のまゝとする。

三九六五 題詞 **贈椽大伴宿祢池主** 底本等、贈の上に、守大伴宿祢家持の七字がある。今、元暦校本に依つて削る。歌の次に署名してゐるのであるから、無きを以つて可とするであらう。

三九六五 序詞 **忽沈枉疾** 枉は、底本等に依る。細井本には狂に作つてゐる。

對此節候 候は、底本等に依る。活字附訓本以後、侯に誤つた。

帷幄之裏 帷は、底本等に依る。活字無訓本には惟に作つてゐる。

三九六五 **乎里氐加射佐武** 氐は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。

三九六六 左註 **二月廿九日** 底本等、この上に、天平廿年の四字がある。今、元暦校本に依つて削る。なほ元暦校本には右に赭で、天平十九年とある。略解は十九年説を採り、古義は二十年を可としてゐて、兩説を存する處であるが、事情を按ずるに、前に續いて十九年の事となすべきであり、四〇二〇の左註に至つて、二十年春正月廿九日とあるを存すべきである。即、それまでは天平十九年の作となすべきものである。

三九六七 序詞 **戲蝶廻花儛** 儛は、底本等に依る。細井本にはこの字が無い。

琴罇無用 罇は、多本に依る。底本には偏を直してゐる。

不能默已 底本に、默を點に作つてゐる。細井本に

已を止に作つてゐる。底本、この下に俗の字があり、これは誤つて二つ重ねて書いたのである。今、多本に依る。

三九六七

夜麻我比尒　我は、底本等に依る。細井本には可に作つてゐる。また元暦校本、類聚古集に尒を迩に作つてゐる。

伎美尒旅西氐婆　氐は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。

三九六九　序詞

戴荷未春　戴は、元暦校本等に依る。底本等、戴に作つてゐる。未春は、諸本みな未春である。略解に引いた宣長の説に、來眷の誤としてゐるが、今、底本のまゝとする。

乏乎彫蟲　乎は、多本に依る。底本には于に作つてゐる。

詞失乎聚林　乎は、多本に依る。底本には于に作つてゐる。聚は、底本等に依る。細井本には叢に作つてゐる。誤字説もあつて、解釋に議論があるが、古きに依り聚林と爲し、これに依つて解を求むべきものと思はれる。また京都大學本に代赭を以つて示された校本には、詞の字の下に、文迫庶庸淺之作然椎古人无言不酬今者之意孰能非報乎哉因以述懷賦頴煩重敬和其哥曰の三十八字があるといふ。これは伴信友の檢天治萬葉集に下の續錦之言の下に、追慙庸淺之作然惟古人无言不酬今者之意孰能非報乎哉目以述懷賦題頴重敬和其歌曰の三十七字があるのと連絡がある。これはもと作者の一案であつたらうか。しばらく記して參考に備へる。

將石間瓊之詠　間は、底本等に依る。元暦校本に問であるのは、間を誤つたものであらう。細井本には同に作つてゐる。

不能默已　默は、元暦校本等に依る。底本等、點に作つてゐる。なほ已は、底本等に依る。細井本には止に作つてゐる。

故之乎哀佐米尒　哀は、底本等に依る。細井本には遂に作つてゐる。

伊泥氏許之　氐は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。

夜須家奈久尒　底本、家の右下に久があり、家の下に入るべき記號を附してゐる。しかしこれは誤で、無い方が正しい。今、多本に依る。

夜麻伎敞奈里氐　敞及び氐は、底本等に依る。細井本には、弊及び底に作つてゐる。

美知能等保家婆　婆は、元暦校本等に依る。底本等、婆を波に作つてゐる。濁音を可とする處である。

春花乃　乃は、元暦校本等に依る。底本等には之に作つてゐる。この卷は多く字音假字を用ゐてゐる。

多乎里可射佐受　可は、底本等に依る。細井本には加に作つてゐる。

之氣美登妣久ゝ　登は、多本に依る。底本には豆に作つてゐる。

ゝ保比ゝ豆知弖　弖は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。

加欲數良牟　良は、底本等に依る。活字附訓本以後、浪に誤つた。

宇流波之美　宇は、底本等に依る。細井本には牟に作つてゐる。寛永版本には、波を沈の如く作つてゐる。

孤悲都追曾乎流　孤は、底本等に依る。寛永版本には、抓に誤つてゐる。

伎美等之見氐婆　氐は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。

安礼古非米夜母　非は、元暦校本等に依る。底本等には遇

三九七〇

三九七一

夜麻扶枳能　麻は、底本等に依る。元暦校本、類聚古集には靡に作つてゐる。

之氣美登毗久々　登は、多本に依る。底本には等に作つてゐる。

伊泥多ゝ武　泥は、底本等に依る。寛永版本に至つて尼に誤つた。

三九七二

許母里爲弖　弖は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。

大伴宿祢家持　持は、底本等に依る。活字無訓本にはこの字を落してゐる。

三九七三　左註

晩春遊覽　底本等、春の下に、三日の二字がある。今、元暦校本に依つて削る。三日の二字があつては、詩題を成さぬのである。

晩春遊覽詩題詞

桃花昭瞼　昭は、底本等に依る。細井本には照に作つてゐる。

同　序詞

曠望　曠は、底本等に依る。細井本には曠に作つてゐる。

訪酒　酒は、底本等に依る。細井本には須に作つてゐる。

過野客之家　過は、元暦校本に依る。底本等には遏

に作つてゐる。

晩春遊覽詩序詞

琴罇得性　琴は、底本等に依る。細井本には開に作つてゐる。底本に、罇を樽に作つてゐる。但し偏は何かを直してゐる。今、多本に依る。

若不扣寂含章　底本にのみ含の下に之の字が有つて、多本にすべて無い。この句は次の何以攄逍遙之趣と對句になるのであるが、元暦校本には逍遙之趣の之の字も無い。これによれば兩方とも無かつたものかも知れない。但し扣寂含章は、文選の文賦の叩寂寞而求音韻、及び蜀都賦の含章而挺生から來てゐるのであるが、下句は逍遙が熟語になつてゐて、完全な對句を成してゐない。

何以攄　攄は、多本に依る。底本に攄に作つてゐる。

逍遙之趣　元暦校本に、之の字が無い。今、底本に依る。前々條參照。

詩

忘彼我　忘彼は、底本等に依る。細井本には、忌被に作つてゐる。

三九七三　序詞

如蔑　蔑は、底本等に依る。細井本には夢に作つてゐる。

得看矣　看は、底本等に依る。細井本には香に作つてゐる。

三九七三

夜麻野佐波良受　波は、元暦校本に依る。底本等には婆に作つてゐる。清音を可とする處である。

麻須良袁夜　袁は、底本等に依る。細井本に赤に作つてゐるのは誤である。

奈途可毋能毛布　途は、底本等に依る。細井本には尒に作つてゐる。

之多毛比余　諸本皆同じである。萬葉考に余を尒の誤としてゐるが、原のまゝで通ずる處である。

伊尒之敞由　敞は、底本等に依る。細井本には弊に作つてゐる。

可受奈枳毛能曾　曾は、底本等に依る。細井本には賀に作つてゐる。

佐刀毗等能　毗は、底本等に依る。細井本には妣に作つてゐる。

安礼途都具良久　途は、底本等に依る。細井本には尒に作つてゐる。

須美礼乎都牟等　底本に、等は直してある。今、多本に依る。

蘇泥乎利可敞之　敞は、底本等に依る。細井本には弊に作つてゐる。

三九七五

乎登賣良波　波は、元暦校本等に依る。底本等には婆に作つてゐる。

於毛比美太礼弖　弖は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。

宇良吳悲須奈理　須及び理は、底本等に依る。細井本には、次及び里に作つてゐる。

和賀勢故途　途は、底本等に依る。細井本には尒に作つてゐる。

古非須敞奈賀利　敞は、底本等に依る。細井本には弊に作つてゐる。

三九七六　序詞

但走　走は、元暦校本に依る。底本等には惟下僕の三字に作つてゐる。元暦校本にも右に赭で惟下僕とある。作者の訂正かも知れないが、明瞭で無いから今、これを採らない。

終日目流　目は、底本等に依る。元暦校本等には曰（因）に作つてゐる。

如今賦言　以下三十八字、元暦校本に無い。これを作者の一案とする説もあるから、今これを存し、小字とする。活字無訓本に今を令に作つてゐるのは誤である。

將石間瓊　石間は、底本等に依る。細井本には不同に作つてゐる。

遊走曲歟　走は、多本に依る。底本には之に作つてゐる。なほ細井本に遊を拯に作り、活字無訓本にこれを承けて極に作るのは誤である。

濫謡　謡は、底本等に依る。活字附訓本に謂に作るのは誤である。

葉端　葉は、多本に依る。底本には何かを直してゐる。

三九七七　詩

逈赴瀛　逈は、底本等に依る。活字無訓本に至つて廻に誤つてゐる。

嘯侶　嘯は、多本に依る。底本等には肅に作つてゐる。侶に就いて、誤字説もあるが、今、底本のまゝとする。

染懊　懊は、底本等に依る。細井本には隩に作つてゐる。

三九七八　題詞

短歌二首　底本等、二首の二字が無い。今、元暦校本等に依つて補ふ。

三九七七

孤悲家礼許曾婆　底本等、曾を古に作つてゐる。但し底本、朱で消して左に曾イがある。今、元暦校本等に依る。

三九七八

多具敞礼騰　敞は、底本等に依る。細井本には弊に

作つてゐる。

三九八六

相見婆　婆は、元暦校本等に依る。底本等には波に作つてゐる。

安麻射加流　加は、底本等に依る。細井本には可に作つてゐる。

登之由吉我敞利　敞は、底本等に依る。細井本には弊に作つてゐる。

春花乃　乃は、元暦校本等に依る。底本等には之に作つてゐる。

伊多母須敞奈美　敞は、底本等に依る。細井本には弊に作つてゐる。

蘇泥可敞之都追　同前。

知敞尒都母里奴　同前。

近在者　在は、元暦校本等に依る。底本等には有に作つてゐる。

加敞利尒太仁母　敞は、底本等に依る。細井本には弊に作つてゐる。

宇知由吉氐　氐は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。

佐之加倍氐　同前。

關左閇尒　閇は、底本等に依る。寛永版本には閑に誤つてゐる。

敞奈里氐安礼許曾　敞及び氐は、底本等に依る。細井本には弊及び底に作つてゐる。

宇乃花能　能は、底本等に依る。細井本には乃に作つてゐる。

尒保敞流山乎　敞は、底本等に依る。細井本には弊に作つてゐる。

安比氐早見牟　氐は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。

安良多麻乃　乃は、元暦校本等に依る。底本等には之に作つてゐる。

登之可弊流麻泥　弊は、元暦校本等に依る。底本等には敞に作つてゐる。

於毛保由流香聞　毛は、底本等に依る。細井本には母に作つてゐる。

伊米尒波母等奈　波は、元暦校本等に依る。底本等には、婆に作つてゐる。

夜麻伎弊奈里氐　弊は、元暦校本等に依る。底本に等は敞に作つてゐる。細井本、氏を底に作る。

相見祢婆　婆は、元暦校本等に依る。底本等には波に作つてゐる。

三九八二　左註

三月廿日　元暦校本に廿の下に五の字がある。いづれが是とも知り難いが、目錄にも三月廿日に作つてゐるから、今、底本のまゝとする。

三九八四

忽兮　兮は、底本等に依る。細井本には号に作り、活字無訓本には號に作つてゐる。

三九八五

波奈多知波奈乎　下の波は、底本及び元暦校本等に依る。細井本等には婆に作つてゐる。

伊美都河伯　伯は、元暦校本に依る。底本等、伯を泊に作つてゐる。本集の例、川を假字書きにする時に、しば〳〵河伯の字面を用ゐてゐる。

三九八六

佐家流左加利尒　家は、底本等に依る。細井本には氣に作つてゐる。

安吉能葉乃　能は、元暦校本等に依る。底本等には乃に作つてゐる。

尒保敞流等伎尒　敞は、底本等に依る。細井本には弊に作つてゐる。

出立氐　氐は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。

伊尒之敞由　敞は、底本等に依る。細井本には弊に作つてゐる。

加氣氐之努波米　氐は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。

三九八七

伊尒之敞於母保由　敞及び母は、底本等に依る。細井本には、弊及び毛に作つてゐる。

三九八八

奴婆多麻乃　乃は、元暦校本に依る。底本等には、能に作つてゐる。

三九八九

都奇尒牟加比氐　氐は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。

三九九〇

多知和可礼奈婆　婆は、元暦校本に依る。底本等には波に作つてゐる。

和我勢故波　和我は、元暦校本、類聚古集に依る。底本等には和加に作り、細井本には我加に作つてゐる。元暦校本を以つて原形と爲すべきである。

手尒麻伎氐　氐は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。

三九九一

於吉氐伊加婆乎思　同前。

三九九二　左註

相別之嘆　嘆は、底本等に依る。細井本には歎に作つてゐる。

宇麻奈米氐　氐は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。

奈我波麻須義氐　同前。

布祢宇氣須恵氐　同前。

三九九一 **於伎敞許藝** 敞は、底本等に依る。細井本には弊に作つてゐる。

三九九二 **見都追思奴播牟** 細井本等奴を努に作つてゐる。音聲の種類から云へば努に作るを可とすべきであるが、元暦校本も奴であるから、今しばらく底本のままとする。

三九九三 **佐伎弖知里尒伎** 弖は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。

宇麻宇知牟礼弖 同前。

伊美豆河伯 伯は、元暦校本等に依る。底本等には泊に作つてゐる。

思保美弖婆 弖は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。

都麻欲妣可波須 妣は、元暦校本等に依る。底本等には比に作つてゐる。こゝは、濁音を用ゐるべき處である。

安利蘇乃佐伎尒 利は、底本等に依る。細井本には里に作つてゐる。

氐尒麻吉母知弖 氐及び弖は、底本等に依る。細井本には、兩字とも底に作つてゐる。

布勢能美豆宇旅尒 勢は、元暦校本等に依る。底本等には施に作つてゐる。

三九九四 **蘇泥布理可邊之** 理は、元暦校本等に依る。底本等には里に作つてゐる。

阿登毛比弖 弖は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。

波奈知利麻我比 波は、元暦校本等多本に依る。底本等には婆に作つてゐる。

多知弖毛爲弖母 弖兩字は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。

三九九五 **都藝弖民仁許武** 弖は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。

三九九五 題詞 **餞稅帳使** 餞は、底本等に依る。細井本には錢に作つてゐる。

三九九八 題詞 **美奴日佐麻祢美** 活字無訓本以後、佐の下に等を入れたのは誤である。

三九九六 **久尒敞麻之奈婆** 敞は、底本等に依る。細井本には弊に作つてゐる。

三九九八 題詞 **石川朝臣水道** 川は、元暦校本等に依る。底本等には河に作つてゐる。

三九九九 **美夜故敞尒** 敞は、底本等に依る。細井本には弊に作つてゐる。

四〇〇〇 題詞 **安久麻弖尒** 弖は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。

此立山者有新川郡也 立の字は、元暦校本に依つて補ふ。川は、元暦校本に依る。底本は河である。後の四〇二四の題詞にも新川郡とある。續日本後紀にも新川郡に作つてゐる。古くは川の字を用ゐたのであらう。

四〇〇〇 **由伎布理之伎弖** 弖は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。

於婆勢流 婆は、元暦校本等に依る。底本等には波に作つてゐる。

余增能未母 增は、元暦校本等に依る。底本等には曾に作つてゐる。

名能未母伎吉氐 母は、元暦校本等に依る。底本等には毛に作つてゐる。氐は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。

四〇〇一 **由久美豆能** 由久は、底本等に依る。細井本にはこの二字が無い。

四〇〇二 **遊吉波布里於吉弖** 弖は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。

多知氐爲弖 氐及び弖は、底本等に依る。細井本には施に作つてゐる。

四〇〇四 **加波之多要受波** 上の波は、元暦校本等に依る。底本等には婆に作つてゐる。

布理於家流由伎能 理は、底本等に依る。細井本には里に作つてゐる。

氣受弖和多流波 弖は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。

可牟佐備弖 弖は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。

多氐流都我能奇 氐は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。

安比弖許登騰比 弖は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。

手多豆佐波利弖 同前。

伊泥多知弖 同前。

四〇〇五 **吉民婆安礼騰母** 婆は、底本等に依る。細井本には波に作つてゐる。

古要敞奈利奈婆 敞は、底本等に依る。細井本には弊に作つてゐる。底本等、婆を波に作つてゐる。今、元暦校本等に依る。

氣乃奈我家牟曾 家は、底本等に依る。細井本に

は家を氣に作つてゐる。家の類の字を使ふべき處である。

四〇〇六

手尒麻吉毛知弖　弖は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。

於伎弖伊加婆乎思　伎は、多本に依る。底本には枝を直して伎としてゐる。又婆及び思は、元暦校本等に依る。底本等には婆を波に作り、思を志に作つてゐる。

四〇〇七

和我勢故波　波は、元暦校本等に依る。底本等には婆に作つてゐる。

保登等伎須　登等は、底本等に依る。細井本には等登に作つてゐる。

許惠尒安倍奴吉　吉は、底本等に依る。細井本には伎に作つてゐる。

手尒麻伎弖由可牟　弖及び可は、底本等に依る。細井本には、底及び加に作つてゐる。

四〇〇七　左註

四月卅日　活字無訓本にこの四字が無いのは、落したのであらう。

四〇〇八　題詞

生別悲兮　兮は、元暦校本等に依る。底本には号かと見える字を直してゐる。

四〇〇八

安遠尒与之　尒は、底本等に依る。細井本には尒に作つてゐる。

四〇〇九

許等登理毛知弖　理及び弖は、底本等に依る。細井本には、里及び底に作つてゐる。

等騰米毛可祢氐　氐は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。

宇能婆奈夜麻乃　婆は、清音を可とする處であるが、今、底本等に依る。細井本に波に作つてゐる。

祢能未之奈可由　祢は、多本に依る。底本には旅に作り、朱で偏を直してゐる。

許登尒伊泥弖　弖は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。

伊波婆由遊思美　波婆は、元暦校本に依る。底本等には婆ゝに作つてゐる。

多麻保許乃　乃は、元暦校本等に依る。底本等には能に作つてゐる。

美知能可未多知　未は、元暦校本等に依る。底本等には味に作つてゐる。

越登名尒於敞流　敞は、底本等に依る。細井本には弊に作つてゐる。

奈都能左加利等　加は、元暦校本等に依る。底本等には可に作つてゐる。

伎欲吉瀬其等尒　等は、元暦校本等に依る。底本等には登に作つてゐる。

登母伊射奈比弖　弖は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。

之良奴里能　能は、元暦校本等に依る。底本等には奴に作つてゐる。

鈴登里都氣弖　弖は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。

伊保都登里多氐　氐は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。

知登里布美多氐　同前。

於敷其等迩　迩は、底本等に依る。細井本には尒に作つてゐる。

許礼乎於伎氐　氐は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。

左奈良敞流　敞は、底本等に依る。細井本には弊に作つてゐる。

於毛比保許里弖　弖は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。

名乃未乎能里弖　同前。

二山上登妣古要氐　山上は、元暦校本等に依る。底本等は上山に作つてゐる。いづれにても意を成す處であるが、今、古きに依つて元暦校本に從ふ。氐は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。

可敞理伎弖　敞及び弖は、底本等に依る。細井本には、弊及び底に作つてゐる。

伊敷須敞能　敞は、底本等に依る。細井本には弊に作つてゐる。

伊伎豆吉安麻利　伎は、元暦校本等に依る。底本等には岐に作つてゐる。

乎氐母許乃毛尒　氐は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。

母利敞乎須惠氐　敞及び氐は、底本等に依る。細井本には、弊及び底に作つてゐる。

氐流鏡　氐は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。

己比能美弖　弖は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。

麻都太要乃　都は、多本に依る。底本には、追に作つてゐる。

比美乃江過弖　弖は、底本等に依る。細井本には底に作つてゐる。